

長野県松本市

HIRATAHONGŌ

平田本郷遺跡Ⅲ

—緊急発掘調査報告書—

1999.3

松本市教育委員会

長野県松本市

HIRATAHONGŌ

平田本郷遺跡Ⅲ

—緊急発掘調査報告書—

1999.3

松本市教育委員会



調査地全景（北から）



A区全景（写真上方が東）



B区全景 (写真上方が北)



110住出土漆紙 (上から)

序

平田本郷遺跡は松本市南部の芳川地区に位置します。平成4年度には初めての発掘調査が行われ、奈良・平安時代の大規模な集落址をともなう重要な遺跡であることが判りました。

ところが、このたび一帯に土地区画整理事業が計画されたため、松本市では平田西土地区画整理組合から発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成9年12月から翌10年3月にかけて行われました。折からの寒風の中、百年ぶりという大雪で発掘作業は困難を極めました。参加者、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘の結果、平安時代後半のムラの跡を発見し、貴重な遺物を多数得ることができました。これらは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思われます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうことは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大なご理解とご協力をいただいた松本市平田西土地区画整理組合の皆様、地元関係者の皆様、そして、発掘調査をご助力いただいた参加者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

松本市教育委員会 教育長 竹 淵 公 章

例言

- 1 本書は長野県松本市大字芳川平田129番地他に所在する平田本郷遺跡(ひらたーほんごうーいせき)の第3次発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、松本市平田西土地区画整理事業に先立ち、松本市平田西土地区画整理組合と松本市が発掘調査委託契約を締結し、それに基づいて松本市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、平成9年12月11日から平成10年3月24日にかけて行った。また、本書作成のための整理作業は平成9年12月11日から平成11年2月28日の間に行った。
- 4 本遺跡は平成4年度及び5年度に第1次、第2次の発掘調査が行われているため、今回を第3次調査とし、遺構番号は先の調査の連番とした。
- 5 本書の執筆分担は以下のとおりである。

I章：事務局

II章 I節：太田守夫、II節：直井雅尚

III章 I節：長畦和正、II節：荒木龍、直井雅尚、III節1・3～5：直井雅尚、2：荒木 龍

IV章 I節：森 義直、II節：バリノサーベイ株式会社

V章：直井雅尚

- 6 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄：百瀬二三子、洞沢文江

遺物整理・復元：五十嵐周子、内沢紀代子、林 和子、洞沢文江

土器陶磁器実測・トレース：松尾明恵、竹平悦子、洞沢文江、横山真理

鉄器鉄製品実測・トレース：洞沢文江

石器実測・トレース：太田圭郁

遺構図整理・トレース：百瀬秀俊、松尾明恵、石合英子、開嶋八重子、竹平悦子、横山真理

写真撮影(現場写真)：長橋重幸、荒木 龍、長畦和正、村田昇司

(遺物写真)：横山和明

(航空写真)：エアーテック

編 集：田多井用章、荒木 龍、直井雅尚

- 7 本文中及び挿入図・図版中では遺構名・番号について以下のような省略を行っている。

第●号住居址 → ●住、第●号建物址 → 建●、第●号竪穴状遺構 → 竪●

第●号土坑 → 土●、第●号溝址 → 溝●

- 8 土器・陶磁器の実測図において断面図の白抜きは土師器、スミ塗りは須恵器・陶器・磁器を示す。
- 9 本調査および整理作業において次の方々からご教示、ご協力を得た。記して謝意を表す。
太田守夫、白沢勝彦、岡沢聡、原明芳、樋口昇一、山越正義、長野県立歴史館、
- 10 本調査で出土した遺物および作成測量図・実測図類はすべて松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(長野県松本市中山3738-1、Tel 0263-86-4710)で収蔵している。

目次

序	
例言	
目次	
I章 調査の経緯	1
II章 遺跡の環境	
I節 遺跡の立地と地形・地質	3
II節 遺跡の歴史的環境	6
1 周辺遺跡	6
2 平田本郷遺跡の過去の調査	6
III章 調査結果	
I節 調査の概要	14
II節 遺構	15
1 竪穴住居址	15
2 竪穴状遺構	19
3 掘立柱建物址・柱穴列	19
4 土坑・ピット	20
5 溝址	21
III節 遺物	
1 土器・陶磁器	24
2 鉄器・鉄製品	29
3 石器・石製品	30
4 その他の遺物	30
IV章 自然遺物分析	
I節 炭化材・炭化物の樹種について	38
II節 平田本郷遺跡の住居址の年代と住居構築材の樹種について	40
V章 調査のまとめ	
1 集落・遺構の変遷	42
2 平田本郷遺跡と田川・奈良井川間の開発	42
3 おわりに	44

図表目次

挿図目次

第1図	遺跡の位置	2
第2図	土層柱状図	4
第3図	周辺遺跡	7
第4図	周辺地形と調査地点	9
第5図	試掘地点出土土器	10
第6図	調査範囲・遺構配置及び区画整理施工図	11
第7図	A区遺構配置	12
第8図	B区遺構配置	13
第9図	土器器種器形一覧	25
第10図	遺構変遷図	43

図版目次

図版1	住居址(1): 97・98住	45
図版2	住居址(2): 99・100住	46
図版3	住居址(3): 101・102住	47
図版4	住居址(4): 103・104住	48
図版5	住居址(5): 106・110・111住	49
図版6	住居址(6): 107住	50
図版7	住居址(7): 107・112住	51
図版8	住居址(8): 113~115・121住	52
図版9	住居址(9): 116・117住	53
図版10	住居址00: 118~120住	54
図版11	竪穴状遺構、建物址(1): 建7・8	55
図版12	建物址(2): 建9~11	56
図版13	建物址(3): 建12・13、柱列	57

写真図版目次

巻頭写真図版1: 調査地全景	写真図版6: 住居址
巻頭写真図版2: 調査地全景、漆紙	写真図版7: 住居址
写真図版扉: 現地説明会風景	写真図版8: 住居址、竪穴状遺構
写真図版1: 調査地全景	写真図版9: 建物址、土坑、溝
写真図版2: 調査地全景、溝12	写真図版10: 溝
写真図版3: 住居址	写真図版11: 溝
写真図版4: 住居址	写真図版12: 土器・陶器
写真図版5: 住居址	写真図版13: 土器・陶器

表目次

第1表	試掘地点出土土器観察表	10
第2表	住居址一覧	23
第3表	掘立柱建物址一覧	23
第4表	土坑一覧	23
第5表	土器観察表	31~35
第6表	白磁一覧表	35
第7表	鉄器・鉄製品観察表	36・37
第8表	炭化材・炭化物樹種等一覧	38・39
第9表	放射性炭素年代測定結果	40

図版14	土坑	58
図版15	溝(1): 溝13~20	59
図版16	溝(2): 溝12護岸状遺構	60
図版17	溝(3): 同上断面	61
図版18	土器(1)	62
図版19	土器(2)	63
図版20	土器(3)	64
図版21	土器(4)	65
図版22	土器(5)	66
図版23	土器(6)	67
図版24	鉄器・鉄製品(1)	68
図版25	鉄器・鉄製品(2)	69
図版26	鉄器・鉄製品(3)、石器、漆紙	70

写真図版14: 土器・陶器
写真図版15: 土器・陶器
写真図版16: 土器・陶器
写真図版17: 土器・陶器
写真図版18: 土器・陶器
写真図版19: 鉄器・鉄製品
写真図版20: 鉄器・鉄製品

I 章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

松本市芳川平田129番地一帯に、松本市平田西土地区画整理組合によって土地区画整理事業が計画された。この場所は、北部に隣接して周知の埋蔵文化財包蔵地平田本郷遺跡があり、当該遺跡では過去2回にわたって発掘調査が行われ、多数の遺構、遺物が発見されているところでもあった。そこで、松本市教育委員会では平田本郷遺跡が同事業予定地まで広がっている場合を懸念し、同組合の協力を得て平成9年10月27日から試掘調査を実施した。その結果、平安時代の遺構と遺物が確認され、平田本郷遺跡が同事業予定地まで及ぶことが明らかになった。同組合と市教育委員会では事業予定地内の埋蔵文化財について保護方法を協議した結果、緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

発掘調査の実施にあたっては、同組合から松本市が委託を受け、市教育委員会が発掘調査、整理、及び調査報告書の刊行等の業務を行うこととし、平成9年12月10日に委託契約を締結、翌11日より発掘調査にとりかかった。厳冬期であったため発掘調査は難渋したが、平成10年3月24日をもって現場作業は終了した。

整理、調査報告書刊行については平成10年5月14日付で前年度同様に委託契約を締結して作業に入り、翌平成11年3月25日をもって終了した。

2 調査体制

調査団長	守屋立秋（松本市教育長）
調査担当者	直井雅尚、長橋重幸、高桑俊雄、長畦和正、村田昇司、荒木 龍（文化課文化財担当）
調査員	太田守夫、松尾明恵、森 義直
協力者	青木雅志、浅井信興、浅輪敬二、荒井留美子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、石井脩二、市場茂男、今井太成、入山正男、上兼昭一、臼井秀明、内沢紀代子、大月八十崙、岡村行夫、開嶋八重子、上條信彦、上條道代、神田栄次、清沢智恵、久保田登子、河野清司、小松正子、斎藤政雄、鈴木幸子、鷺見昇司、高橋昭雄、高橋登喜雄、竹平悦子、田中一雄、鶴川 登、寺嶋 実、中上昇一、中村恵子、中村地香子、中村安雄、中山自子、林 和子、林 武佐、福島 勝、藤井道明、藤本利子、布野行雄、布山 洋、洞沢文江、丸山喜和子、丸山恵子、道浦久美子、宮坂ふみ、宮田美智子、村山牧枝、百瀬二三子、百瀬二三子、百瀬義友、矢崎寛子、山崎照友、横山 清、横山真理、吉田 勝、米山慎興

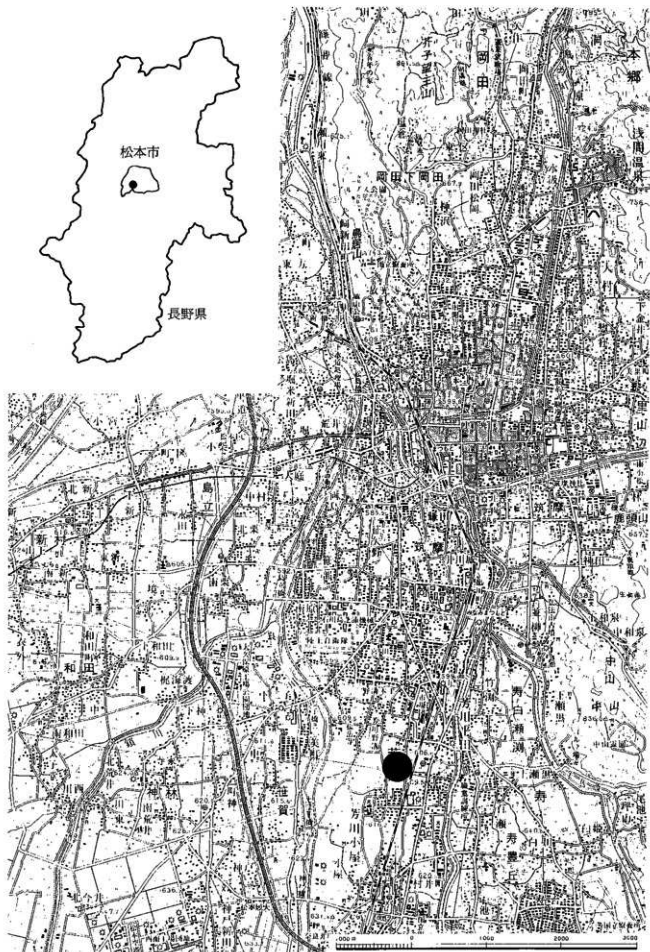
事務局

平成9年度：松本市教育委員会文化課

木下雅文（課長）、熊谷康治（課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、
近藤潔、田多井用章、川上真澄（文化財担当）

平成10年度：松本市教育委員会文化課

木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、
久保田剛、近藤潔、上條まゆみ（文化財担当）



第1図 遺跡の位置

II章 遺跡の環境

I節 遺跡の立地と地形・地質

1 位置と地形

本調査地は松本市大字芳川平田（現在は新住居表示が行われ「平田西2丁目」と大字芳川村井町・大字芳川小屋の境界付近の平田地籍に位置し、東はJR篠ノ井線に、南は北原町に接している。一帯は以前は水田であったが、構造改善事業が行われ水田ほ場と住居区となりつつある。

地形上は西方を北流する奈良井川のはん蓋原に属し、その扇状地性沖積堆積物で構成されている。周辺の平田本郷遺跡第1・2次調査地点（北北西500m：平成4・6年発掘）、小原遺跡第1～3次（南800m：平成1・4年発掘）とは同じはん蓋原や地形面に属するが、東方を北流する田川の沖積堆積物に接することは、小原遺跡と共通している。調査地と奈良井及び田川の現河床及び最も近いはん蓋口までの距離はそれぞれ奈良井川1300m・1700m（西及び南西）、田川600m・1500m（東及び南東）で多分に田川寄りに位置するが、前者の影響の方が大きい。地形面は平坦で、東北東へゆるく傾き、平均傾斜8/1000、約0.5度を示す。広い奈良井川と田川の複合扇状地の扇尖に当たるため、地下水は低い。このため用水は小河流やせぎに頼っていた。

調査地周辺の扇状地性堆積物は砂礫の多い部分と厚い土層から構成されている。砂礫は中・古生層系統の砂岩・硬砂岩を主とし、粘板岩・チャートを混えている。調査地は土層が発達し、古くから水田として開発されていた。また南に接する北原町一帯は、砂礫層の発達した場所である。

2 遺跡の堆積層と流れ

発掘地は、南北に通ずる市道を挟んで東側（JR篠ノ井線沿い）をA地区、西側をB地区に分けている。発掘により観察できた堆積層の厚さ（深さ）は60～130cmである。第2図はA・B地区の地層の断面を表したものである。この図からもみられるように、堆積は上層（地下60cmくらいまで）と下層に分けられ、その状況に違いがある。すなわち、上層は表土（耕土：厚さ地表から30cm前後）と、これに続く赤褐色を帯びた土層（20～30cm）からなる。表土は灰黒色の壤土で、すでに水田耕地として一様化され、下部の赤褐色土層は、鉄分の沈着層や斑鉄層である。

下層は発掘により検出された遺跡面を上面とした層に当たる。粗ざんな暗褐色土層と灰褐色～灰黒土層の重なりで、最下部に茶色の土層が現われるところもある。深さ80cm附近から、砂礫や砂礫層と介在し堆積が複雑になっている。各地区で違いが現れ、微地形的な変化が多い。砂礫は粗砂・細砂・中礫に大礫を混じえ、扇状・面状あるいは流れの状態に広がっている。これら砂礫の堆積の方向はN30°～60°E（北東）を示し、扇状地のはん蓋の方向に一致する。土層と砂礫層は介在することが多く、土層の深さが130cmを越える場所もある。発掘された竪穴住居址、掘立柱建物址や溝及び流れの跡は、この土層と砂礫層を掘り広げて存在し、壁や下底に多くの礫面を露出している。

次に各地区の状態と特徴を述べる。

① A地区

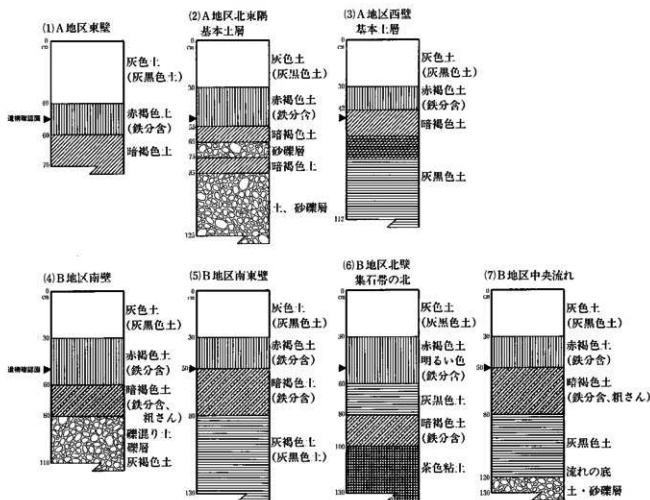
上層を除去した発掘面の地表は、両地区とも砂礫の分布が目立つ。特にA地区は、発見された竪穴住居址の大半が集中しているため多量の砂礫の分布が観察できた。この複雑な分布の中にも3条の砂礫層の流れと、その方向（N60°E）を示す堆積が認められ、また砂礫の堆積の間にはそれぞれ土層が介在していた。竪穴住居址は砂礫と土層の双方へ切り込んだ形で発掘されている。この流れの方向はB地区の東半部（上流）へ連続

し、同様の堆積を広げている。第2図の(2)・(3)はいずれも基本土層と考えられるもので、下層は厚い砂礫層、または灰黒色土層からなっている。砂礫層は上下二層からなり、その間に土層を挟む。土・砂・礫の混りの層で、礫種は砂岩・硬砂岩・チャートで、礫径は25×15・25×10cmを最大とする巨・大・中・細礫の混成である。

次に、東壁に沿って浅い溝（溝11）が発見されている。前記の砂礫層の流れとは異なった、南北性の蛇行を示す。深さ10cm、幅60～190cm、礫は砂岩・硬砂岩・粘板岩の細礫（2×4・1×2cm）を中心とし中礫を含む。土石とも鉄分に汚染され、田川水系の堆積状況を示す。上流にあたる南方の小原遺跡における堆積状況の延長が、当然観察されてもよい場所であるが、今回はこれ以上の資料は得られなかった。

② B地区

B地区は東西およそ85m、南北40～50mの面積をもち、東北東（N60°E）へゆるやかに傾く地形であるが、発掘面で見るとそれぞれ特徴をもった東部・中央部・西部に分けられる。すなわち、東部はA地区に続く砂礫層（N60°E）の発達が著しく、中央部は幅2mを越えて北流（N30°E）する溝13の流路と、この流路を切って北へ直道あるいは曲流する3条の溝（溝15～17）が発見され、様相が一変している。西部は中央部と堆積層の状態が同じであるが、幅2.5m・中細礫を中心にした2条の流れ（自然流路として捉え遺構番号は付していない）が目立っている。第2図(4)～(7)はB地区の壁と中央の地層の断面を示したもので、(4)は東部の砂礫層、(5)・(6)はその介在土層である。



第2図 土層柱状図

中央部では東部の砂礫層の卓越に対し、基底の土層を浸食した溝13の流路（深さ50cm・幅平均2.7m、北北東へ向かう凹地）が目立つ。この溝13の流路は発掘地の北壁近くで真東へ向うものと北北東へ向うものの2本に分岐する。そして、真東へ向うもの（溝13）は川幅を4.6mまで広げ、約20mほど進んで北壁へ消える（N30°E）。この流路底の土砂・細礫には、鉄分に汚染された部分があり、9世紀後半ころの遺物出土が認められる。上部の3条の溝状地形（溝14～16）は深さ10～20cm・幅60～70cm、前者に比べ規模の小さいものである。この中の2条（溝15・16）が下層の溝13の流路を切っているため、次の階の形成であることが明らかである。下部と上部の溝の比高は10～20cmである。

③ B地区東壁沿いの集石帯と溝状凹地形（溝12）について

集石帯 集石帯の状況は、南北約25m・幅1m・厚さ40cm、巨礫・大礫（礫種：砂岩・チャート、礫径36×20×20～19×16cm）を集めて並べたもので、下部は自然堆積の砂礫層（礫種：砂岩・チャート、礫径20×10・15×10cm中・細礫）に移る。集石帯の北側は切れて一般の堆積に変わる。南側は竪穴住居址（118住：11世紀）に切られ、その延長は介在層の厚い土層になる。東側は調査区東壁内に移り、中央で東壁から延びてきた竪穴住居址（119住：11世紀）に集石帯が切られた場所がある。西側は集石帯に沿う溝状の凹地（溝12）に接している。

溝状の凹地形（溝12） 集石帯と同様上層（60～80cm）下に発見されたもので、南北性・幅7m・深さ110～130cm・溝の辺りの傾斜30°で、ゆるやかな鍋底状の静水性堆積を重ねている。堆積層は下部から茶色、暗褐色の粘質土である。またこの堆積層の表面からは中央を北へ向う小さな流れ（わずかに蛇行性を有す）がみつかり、幅60～100cm・深さ30～60cm、椀状の地形と堆積（細礫混りの粗砂、上部は新鮮な砂礫）を示す。凹地形の南側は竪穴住居址（118住）によって切られ、その延長は厚い灰褐～灰黒色土層に変わる（第2図5）。北側は第2図6）に見るように連続する可能性がある。西側は各地区で発達する扇状地性堆積層に接する。さて、この溝状の凹地形（溝12）は、成因が自然流あるいは用水とみると、B地区中央の流路（溝13）の時階に相当する可能性が高い。人工物とみると、集石帯・凹地形・西側の堆積層の三者に関連が考えられる。集石帯の目的は現在推定の城を出ないが、地塁または堤防とすれば、凹地形は集石帯の前面に造られた溝地形であり、材料の石の供給場所とも考えられる。

3 地形の形成と遺構

これまで述べてきた堆積層や流れ、溝（流路）、竪穴住居址から考察できる調査区内の地形の形成順は次のとおりである。

- 1) 基底（下部）砂礫層と土層の堆積（地下120cm前後）
- 2) B地区中央の基底層を浸食してできた溝13の流れ（広い溝）
集石帯と溝状の凹地
- 3) 上部砂礫層と土層の堆積（地下80cm前後）
- 4) 3条の狭い溝の出現。竪穴住居址の出現？

II節 遺跡の歴史的環境

1 周辺遺跡

第3図に示す、平田本郷遺跡の周辺の遺跡は、西の奈良井川、東の田川に画されて、大きく4ブロックに分けることができる。第1のブロックは奈良井川西岸の段丘上に南北に連なる遺跡群（第3図19～26）で、現在の島立・笹賀・神林地区にあたる。第2のブロックは田川東岸の段丘や微高地上に点在する遺跡（同図7・10・12・15）で、現在の寿地区にあたる。第3のブロックは奈良井川、田川間の地域で、しかも本遺跡を南限とするまとまり（同図1・3・4・6・8）である。現在のJR南松本駅周辺から芳川平田地区に及ぶ。最後の第4のブロックが本遺跡を北限とする、奈良井川、田川間の諸遺跡（同図13・14・16～18）で、芳川地区から一部は塩尻市吉田地区に広がっている。

第1のブロックは集落の初源を7世紀末から8世紀にもつ。まれに、下層に縄文中期～後期（20：南栗、25：上二子）が存在するものもあるが、遺跡の継続性はまったくない。この第1ブロック一帯は現在でこそ水田地帯になっているが、古墳時代後期までは段丘上の水利の不便さから本格的な開発が行われなかったと考えられる。7世紀後半になって、自然流の改修管理（もしかすると大規模な人為導水を含む）によって水利問題が解消し、爆発的な開発が始まっている。

第2のブロックは、初源が弥生時代中期後半（15：百瀬）ないしは後期（7：竹瀬南原、10：竹瀬）まで遡り、その後も古墳時代から平安・中世にかけて断続的に集落が立地する。田川は右岸（東岸）に安定した小規模な段丘や微高地を形成しており、川沿いには低湿地を発達させている。これらの恵まれた自然条件により古くから安定した居住域であったと推定でき、百瀬遺跡の第2次調査（平成4年）では縄文時代早期押型紋期の土坑が調査されている。ただし、近世以降になると田川のさらに東側を北流する牛伏川が氾濫を繰り返しては田川に切れ込み、田川東岸の遺跡地帯を大きく破壊している。現在確認されている遺跡はこの氾濫の直撃を免れたものである。

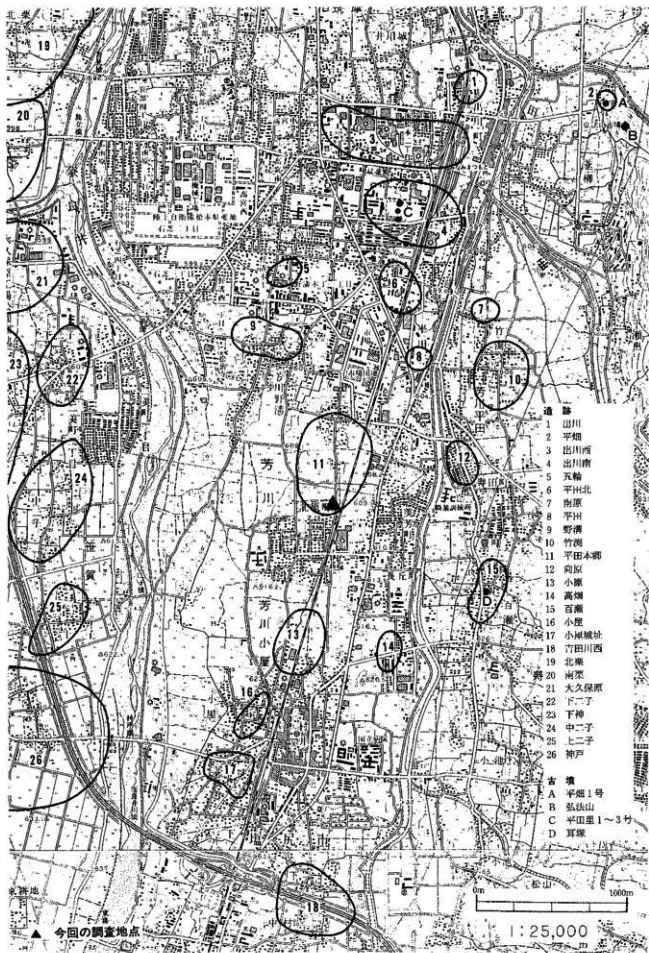
第3のブロックは松本市内では珍しい沖積地状の平坦地に展開する遺跡群である。集落の初源は弥生時代中期に遡り、以後は古墳時代から平安時代まで重厚に遺構が分布する。平地に立地する古墳時代中期～後期の古墳（C：平田里1～3号古墳）も発見・調査されている。また、本ブロックの東方約1.5kmの丘陵突端には前期の前方後方墳である弘法山古墳が築かれており、本ブロックがその造営集団の主力と目されている。この一帯の北部には湧水帯がひろがり、田川左岸にも低地帯が延びており、これらを生産地として弥生時代から継続して有力な集落が営まれ、古墳築造にまで至ったと推定される。

第4のブロックでは集落の進出は8世紀代が中心で、他のブロックに比べて遅い。その最大の原因は水利の悪さにあり、最も遅れて開発が始まった地帯といえよう。しかし、9世紀以降は拠点的な集落（13：小原、18：吉田川西など）が立地し、中世にかけてもかなり繁栄した（小原と塩尻市若宮で備蓄銭の発見がある）と推測できる。

本遺跡は上記第3ブロックと第4ブロックの中間に位置するが、内容でも中間的といえる。本遺跡範囲内北部の平成8年度試掘調査地では古墳時代中期土器の多量出土をみており、時期的に第3ブロックの縁辺部と捉えられる。一方で、今回調査は11世紀代を中心としており、第4ブロックのあり方につながる。また、平成4年度の発掘調査地点は本遺跡内ではかなり北寄りだが、8世紀初頭から11世紀初頭の間に属する多数の遺構が検出され、いずれのブロックの延長か今後の課題となっている。

2 平田本郷遺跡の過去の調査

平田本郷遺跡では今回の発掘調査以前に何度か発掘調査や試掘・確認調査が行われ、成果を挙げている。



第3図 周辺遺跡

ここでは、それらについて詳しく触れ、今回の調査成果を理解する一助としたい。

① 発掘調査

本格的な発掘調査は平成4年度（第1次調査）と6年度（第2次調査）の2回行われており、いずれも調査報告書が刊行されている。

平成4年度 発掘調査は県営ほ場整備事業に伴うもので、平成4年11月9日から翌5年3月24日にかけて実施された。調査地点は平田神社西側一帯にあたり、平田本郷遺跡の中では北寄りに位置する。調査面積は6,500㎡、発見された遺構は竪穴住居址94、掘立柱建物址6、土坑43、溝10、ピット328を数える。土坑の中には須恵器大甕を埋設したものもみられた。これらの遺構の時期は8世紀初頭から11世紀初頭の間に属するが、9世紀代が特に多く、中核をなしている。

遺構内や周辺の検出面からは大量の遺物が出土しており、遺物の種別は土器・陶磁器、鉄器・鉄製品、石器、土製品がある。土器・陶磁器は土師器・須恵器・灰釉陶器が主体で、わずかに緑釉陶器7点や白磁1点が伴う。土師器・須恵器・灰釉陶器には墨書のあるものも多く、総数で118点が認められる。他に文字資料として注目すべきものは「美濃国」の刻印がある美濃須衛窯産の須恵器杯破片が1点確認されている。鉄器・鉄製品は刀子、鎌、鋤、釘、火打金具、弓引鉄、紡錘車、鑊、鋸、楔、鋸、鉋、鉋など多岐にわたり、総数で128点を数える。市内の奈良・平安期の遺跡では格段に多い数量といえよう。土製品は紡錘車、土錘、籾の羽口、および瓦塔である。瓦塔は14点の破片が出土し、すべて同一個体と考えられている。籾の羽口は完形品が1点もないが、総数97点、重量にして5,566gが出土した。しかも、いくつかの遺構に偏って存在し、集落内での鍛冶関連の行為が推定できる資料である。これに関わって残されたと思われる鉄屑も833点と多量で、総重量は30kgを超える。石器は砥石が2点出土したのみである。

平成6年度 発掘調査は市の公園造成に先立って、平成6年5月10日から5月24日に行われた。調査地点は平田神社の西隣で、第1次調査の発掘区に西側と南側を囲まれる位置にある。対象面積は3,150㎡だが、開発事業の性格上、トレンチにより遺構が確認できた部分のみを拡張したので、実質の調査面積は190㎡であった。遺構は竪穴住居址2、土坑5、ピット3を検出、調査した。時期は住居址の1軒が11世紀中葉に属する他は不明である。

遺物は土器・陶器では土師器・須恵器・灰釉陶器、石器では砥石、鉄器・鉄製品では刀子・紡錘車・弓引金具が出土しており、少量の鉄屑も伴った。

参考文献

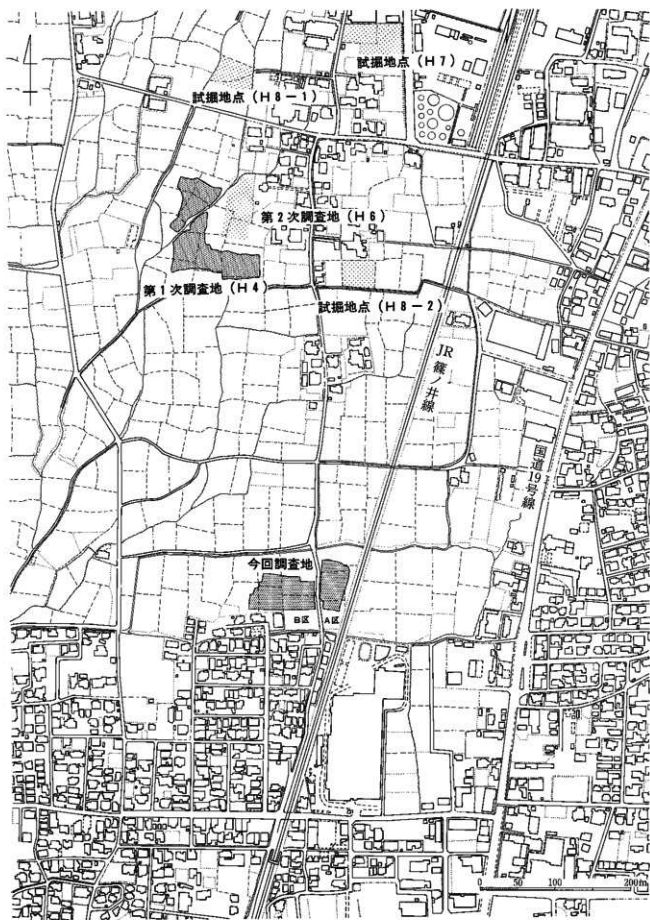
- 松本市教育委員会1994「松本市平田本郷遺跡 -緊急発掘調査報告書-
- 松本市教育委員会1995「松本市平田本郷遺跡II -緊急発掘調査報告書-

② 試掘・確認調査

本遺跡の一帯では、平成7年度に1回、平成8年度に2回の試掘・確認調査が行われており、平成8年度の各調査ではそれぞれ遺構・遺物の発見をみている。

平成7年度 民間開発に伴い、12月2日から3日にかけて芳川平田340-1、341番地で試掘確認調査を行った。平田本郷遺跡の北部縁辺と推定される場所であったが、遺構・遺物の検出はなかった。これにより、本地点までは遺構分布が及んでおらず、平田本郷遺跡の北限からはずれる可能性が高まった。

平成8年度-1 民間開発に伴い、10月1日から9日にかけて平田西1丁目358で試掘確認調査を行った。平田本郷遺跡の範囲内北部と推定される場所である。遺構の確認はなかったが、南北に延びる自然流路が検出された。流路の埋土は砂礫が堆積し、水流があったことは明瞭であった。しかし、その堆積の下層から古墳時代中期に属する土器が多量に出土した。これらの土器は水流があったにもかかわらず、ほとんど摩滅を受けておらず非常に良好な器表面の状態でも遺存していた。したがって、本地点の近隣に古墳時代中期に遡る

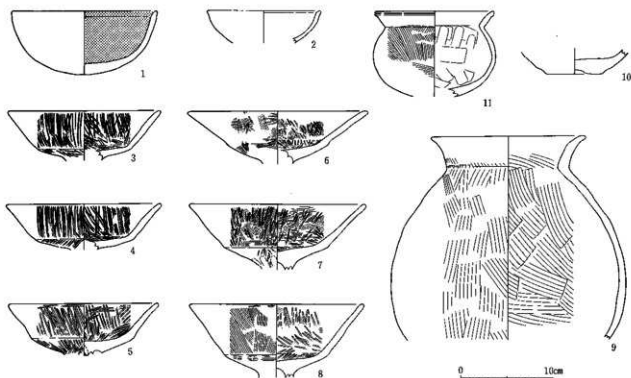


第4図 周辺地形と調査地点

遺構が分布している可能性が極めて高いものと推定された。

出土した土器はすべて土師器で、器種には杯（第5図1・2）、高杯（同3～8）、壺（同9・10）、小形甕（同11）がある。図化できた高杯はいずれも脚部を失っている。壺の内外面と小形甕の外面上にはハケメが顕著に認められ、高杯にもミガキの地にハケメが残るものがある。2点の杯は口縁端部が内斜状になっており、2は内面黒色処理が行われている。また、小形甕は口縁端部外側にわずかな面と沈線を有す。これらの土師器は一括して5世紀後半～末の年代を与えることができると推定する（写真図版18）。

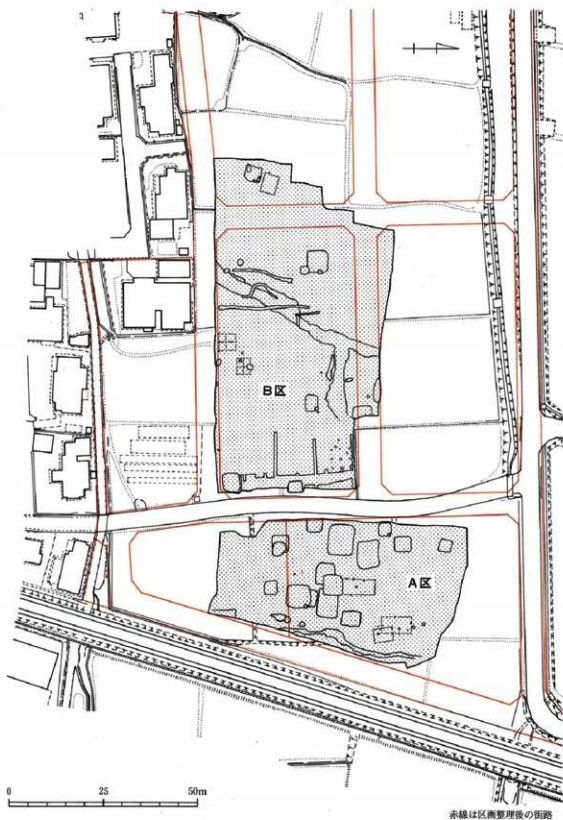
平成8年度・2 民間開発に伴い、10月14日から24日にかけて平田西1丁目272-1で試掘確認調査を行った。平田本郷遺跡の範囲内東部と目される地点である。対象地内に設定したトレンチから、数軒の竪穴住居址の存在が確認できた。これらの上部からは平安時代の土器が僅かではあるが出土し、いずれも奈良～平安時代の竪穴住居址と推定された。したがって、本地点には第1・2次の発掘調査地区から連続して平安時代を中心とする古代集落が展開していることが確実となった。



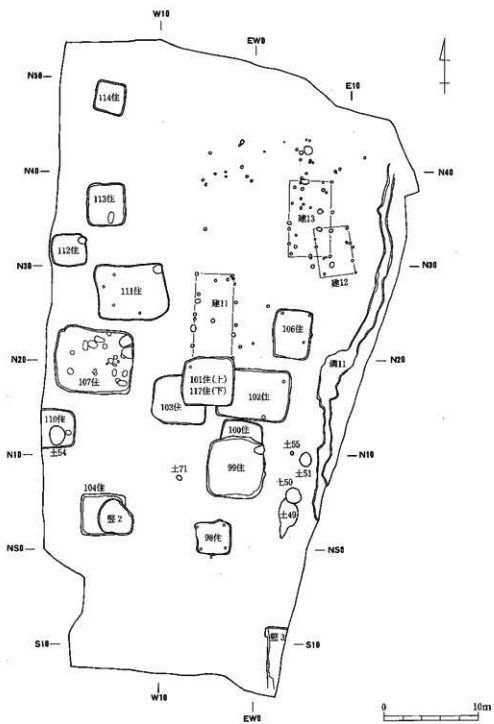
第5図 試掘地点出土土器

第1表 試掘地点出土土器観察表

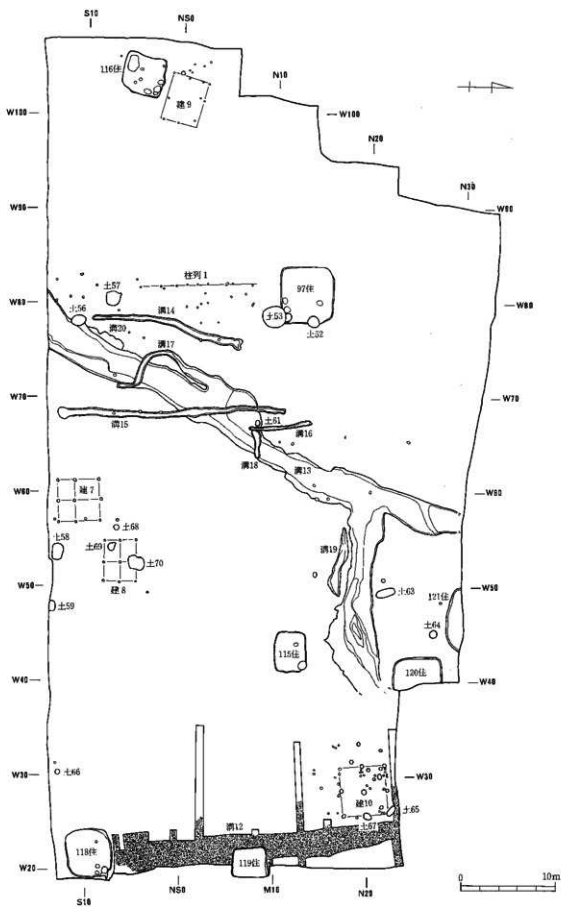
No	器種	寸法(cm)			残存度	紋様・調整			実測番号	備考
		口径	底径	器高		外面		内面		
1	杯	(12.2)			口縁1/4	口縁ヨコナデ、体部ミガキ摩滅?	ミガキ摩滅?	試掘7		
2	杯	(15.6)		6.8	口縁1/4	口縁ヨコナデ、体部ミガキ摩滅、底部ヘラケズリ?摩滅	ミガキ後黒色処理	試掘10	内黒	
3	高杯	16.1			口縁1/2	口縁ヨコナデ、ミガキ	杯部ミガキ	試掘2		
4	高杯	19.0			口縁1/4	口縁ヨコナデ、杯部上半ハケメ後ミガキ・指ナデ後半ミガキ摩滅	杯部ハケメ後ミガキ	試掘3		
5	高杯	(19.4)			口縁一部	口縁ヨコナデ、ハケメ後ミガキ	ハケメ後ミガキ	試掘4		
6	高杯	16.6			口縁7/8	口縁ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	試掘5		
7	高杯	(16.4)			口縁1/4	口縁ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	試掘6		
8	高杯	(18.8)			口縁1/8	口縁ヨコナデ、ハケメ	ハケメ後ミガキ	試掘8		
9	壺	(16.6)			口縁1/3	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ	胴部ハケメ	試掘11	胴部に炭化物付着	
10	壺	(6.2)			底部1/4	ケズリ摩滅、底部ナデ	ミガキ状の工具ナデ	試掘11	ドーナツ状底面	
11	小形甕	(12.8)			口縁1/3	口縁ヨコナデ・沈線状、胴部上半ハケメ・下半ナデ	工具ナデ・指ナデ	試掘9		



第6図 調査範囲・遺構配置及び区画整理施工図



第7圖 A区遺構配置



第 8 图 B区遺構配置

III章 調査結果

I 節 調査の概要

1 調査地・調査手順

発掘調査地は松本市大字芳川平田129番地他にあたり、東をJR篠ノ井線で、また南を芳川小屋（北原町）の住宅街で画されている。東及び西隣は水田となっている。発掘着手前は水田と畑地であった。発掘調査地の標高は、発掘前の田畑地表で最低が海拔609.57m、最高が海拔610.49mを示し、南西から北東へごくわずかに傾斜する地形であった。

調査区は中央を南北に横切る市道を挟んで、東側をA区、西側をB区とした。調査面積はA区2050.8㎡、B区3507.9㎡で合計は5558.7㎡を測る。A区に設置した基準点（第7図NS0-EW0ラインの交点）より、真北に振り出した基準線を用いて調査区全体を覆う3メートルのグリッド方眼を設定し、測量や遺構実測を行っている。グリッド方眼の名称は各グリッド北東隅の座標（基準点からの距離をNS方向、EW方向で示したものの。単位はm）を以ってあてた。基準点を国家座標で示すと、第VIII座標系：X=20871.913、Y=-48138.476である。

発掘調査の手順は、まず大型建設機械を使用して遺構検出面までの耕作土、上土を除去した。次に、人力により遺構検出作業を行い、竪穴住居址など個々の遺構の位置と範囲を平面的に特定した。土色の区別が微妙で平面的な把握がむずかしい部分では、人力による小規模な試掘溝を掘り断面観察も併用して遺構を検出した。遺構検出が終了したものから遺構番号を命名したが、遺構番号は第1・2次調査のものに連続させている。引き続き人力による遺構掘り下げを開始し、必要に応じて覆土の土層や、遺構内の遺物・礎等の出土状態の観察と記録を、写真や実測図により行った。遺物を取り上げ、掘り上がった遺構は写真と実測図の双方で記録し、最後にラジコンヘリコプターによる航空写真を撮影して、発掘調査の現場における作業の全工程を終えた。

2 調査成果

発見した遺構の種類と数量及び時期は次のとおり。

竪穴住居址22軒（97住～121住、ただし105・108・109住は欠番）：平安時代後期

竪穴状遺構2基（竪2～竪3）：不明（平安時代後期以降と推定）

掘立柱建物址7棟（建7～建13）：平安時代後期及びそれ以降

柱列1本（柱列1）：不明（平安時代後期以降と推定）

土坑21基（土49～土71）：平安時代後期及びそれ以降

溝址10条（溝11～溝20）：古墳時代中期（溝20）、平安時代前期（溝11～13）、同後期（溝14～19）

ピット233基（建物址と柱列を構成するピットを含む）：時期不明（平安時代後期及びそれ以降と推定）

出土した遺物の種別は次のとおり。一部の土器以外は時期はすべて平安時代後期に属す。

土器・陶磁器：土師器（内黒土師器・黒色土器を含む）、須恵器、灰軸陶器、白磁

鉄器・鉄製品：刀子、釘、鏃、鏃、紡錘車、芋引鉄、鎖、鉄鐔、不明品、鉄障

石器・石製品：砥石、礫石錘

自然遺物：炭化材、炭化米

その他の遺物：漆紙

II節 遺構

1 竪穴住居址（第2表、図版1～10、写真図版3～8）

竪穴住居址は97住から121住までの25軒を検出、命名した。しかし、遺構重複の著しい部分があり、掘り下げを行った結果、105住・108住・109住の3軒は他の住居址の一部と判明したため欠番とした。したがって、最終的に竪穴住居址は22軒が調査されたことになる。

なお、遺構の規模はcm単位で長軸・短軸・深さの順に示した。また、規模と床面積の（ ）は現状値を、〈 〉は推定値を表わしている。主軸方向は基本的にカマドを奥壁右隅にみるように設定している。時期は本章III節で触れる出土土器群の時期で示す。

(1) 第97号住居址（遺構：図版1、写真図版5、遺物：鉄器1～3）

位置 B区中央部西寄り。重複関係 土52・53に切られる。平面形 隅丸方形 規模 592・564・8 床面積 31㎡ 主軸方向 N-0° 壁 高さ約5cm。残存不良で傾斜等は不明。床面 特に堅い床面は認められない。ピット 4基。南東隅に3基。P₁に礫多い。カマド種類・位置 カマド発見できず。覆土の状況 2層に分かれる。床面上の広範囲に焼土、炭化物がみられる。遺物出土状況 覆土の残存少ないため遺物僅少。土師器少量、白磁2片、鉄器6点（刀子1、不明5）出土。時期 第3群後半？ 備考 本址一帯の検出面を低く設定したため、削平されてわずかな壁と床付近の覆土が残るのみ。

(2) 第98号住居址（遺構：図版1、写真図版3、遺物：土器1～3）

位置 A区南部 重複関係 なし。平面形 隅丸方形。北壁東寄りに突出部。規模 388・368・18 床面積 11.4㎡ 主軸方向 N-0° 壁 壁高20cm。ほぼ直に立ち上がる。床面 灰色土の床面。あまり堅くない。北西隅に焼土範囲あり。ピット 4基。径20～30cm前後。壁際に位置する。柱穴か？。遺構外の2基（P₄₂₁・P₄₂₂）と関連あるか？。カマド種類・位置 石組・北東隅。両袖石が2個ずつ残存する。燃焼部に焼土が広がる。右袖石の右側に長い礫が立っており、カマドと関係あるか？。覆土の状況 3層に分かれる。礫が中央部とカマド付近にみられる。遺物出土状況 カマド付近に多くみられる。土師器皿・小形甕・羽釜出土。時期 第3群前半？

(3) 第99号住居址（遺構：図版2、写真図版3、遺物：土器4～19、鉄器4～12）

地区 A区中央南寄り。重複関係 100住を切る。平面形 隅丸方形 規模 656・620・24 床面積 30.6㎡ 主軸方向 N-0° 壁 北側のみ明瞭。壁高20cm。直に立ち上がる。床面 小礫の露出する灰色の堅い床面。表面には焼土粒や炭化物粒が付着。中央部分が堅く、外側に向かうにつれて礫の露出が顕著である。周辺の基盤土には礫がみられることから、礫を取り去った後貼床をしたと推定。カマド周辺の床面は堅い。ピット 2基。径20cm前後。中央に位置する。覆土に炭化物粒を多く含む。P₂内に炭化材出土。カマド種類・位置 石組・北東隅。カマド周辺、カマド覆土中に構築礫がみられる。覆土の状況 2層に分かれる。大量の炭化材出土（主に中央から北壁）。炭化物の断面は円形と方形を呈し、中央から外側に向かって放射状に倒れている材が多い。側柱と垂木の痕跡か。樹種はコナラ材が80%を占める。焼土、炭化物は中央部から東側に多くみられる。礫は多く、ほとんどの礫は炭化材より上位にある。炭化材は床面より10cm程度浮いている。遺物出土状況 覆土中全般、炭化材や礫間から出土。土師器と灰釉陶器多数。白磁2片。鉄器11点（鎌3、字引鉄2、紡錘車1、釘1、鉄錘1、不明2）出土。時期 第3群後半 備考 いわゆる焼失住居。本址出土の白磁と100住出土品の遺構間接合あり。

(4) 第100号住居址（遺構：図版2、写真図版4、遺物：土器20～25、鉄器13～18）

地区 A区中央 重複関係 99住に切られる。平面形 方形？ 規模 442・(168)・28 床面積 (6.8㎡) 主軸方向 N-6.5°-E 壁 壁高約20cm。直に立ち上がる。床面 北側中央部に堅い床面。それ以外は小礫が露出

する。 **ピット** なし。 **カマド種類・位置** カマド発見できず。99住に破壊される部分に位置したか?。 **覆土の状況** 2層に分かれる。覆土中全般に礫が多くみられる。礫は意図的な投入、廃棄か?。 **遺物出土状況** 覆土中全般にみられる。土師器多数、白磁9片。鉄器7点(刀子2、弓引鉄1、釘1、不明3)、鉄滓出土。

時期 第3群後半

(5) 第101号住居址 (遺構: 図版3、写真図版5、遺物: 土器26~29、鉄器19)

地区 A区中央部 **重複関係** 102住・103住を切る。117住の上部をまるごと貼る。建11南部と重複するか?。 **平面形** 長方形。北西角がわずかに欠ける。 **規模** 560・488・14 **床面積** 24.8㎡ **主軸方向** N-0° **壁** 壁高10~15cm前後。ゆるやかに立ち上がる。 **床面** 不明瞭。 **ピット** 2基 **カマド種類・位置** カマド発見できず。北東隅にわずかに残る焼土が残骸か?。 **覆土の状況** 3層に分かれる。床面上に礫が多くみられるが、南西部分には少ない。 **遺物出土状況** 覆土中全般にみられる。土師器、灰釉陶器少量。鉄器2点(釘1、不明1)、鉄滓1点出土。 **時期** 第3群後半

(6) 第102号住居址 (遺構: 図版3、写真図版5、遺物: 土器30~36、鉄器20)

位置 A区中央 **重複関係** 117住の東側を貼る。101住に切られる。埋没後P₁₀₀がつくられる。 **平面形** 長方形 **規模** 764・544・30 **床面積** (36.6㎡) **主軸方向** N-6°-E **壁** 壁高10~20cm前後。東西壁は直に、南北壁はゆるやかに立ち上がる。 **床面** 東側の床面は小礫の露出する面とし、西側は不明瞭。東側の床面と同じ高さの灰褐色砂質土を床面とした。 **ピット** 9基。径20cm前後。8基が西半分の壁際にみられる。 **カマド種類・位置** 中央部北寄りにわずかな焼土を認めるがカマド痕跡か不明。 **覆土の状況** 2層に分かれる。床面上に礫が多くみられる。 **遺物出土状況** 覆土中全般にみられる。土師器少量、鉄器4点(刀子1、不明3)、鉄滓1点出土。 **時期** 第3群前半?

(7) 第103号住居址 (遺構: 図版4、写真図版5、遺物: 土器37・38)

位置 A区中央 **重複関係** 117住の西側を貼る。101住に切られる。 **平面形** 隅丸方形。南西隅がわずかに欠ける。 **規模** 560・528・12 **床面積** <27.4㎡> **主軸方向** N-4°-E **壁** 壁高10cm。ゆるやかに立ち上がる。 **床面** 西側半分では礫が露出する面を床面とした。東側は不明瞭。 **ピット** 3基。径20cm前後。 **カマド種類・位置** カマド発見できず。101住破壊部分に存在したか?。北西隅礫は焼土を伴わずカマドとは認められない。 **覆土の状況** 2層に分かれる。北西隅に礫がかたまってみられる。 **遺物出土状況** 遺物が少なく、覆土中に点在。土師器、灰釉陶器少量。 **時期** 第3群前半?

(8) 第104号住居址 (遺構: 図版4、写真図版5、遺物: 土器44~62、鉄器21・22)

位置 A区南部西寄り。 **重複関係** Ⅱ2に上部を破壊される。 **平面形** 隅丸方形 **規模** 480・432・52 **床面積** 15.7㎡ **主軸方向** N-0° **壁** 壁高約50cm。直に立ち上がる。 **床面** 青灰色土と小礫の露出する面。やや堅い。 **ピット** 検出できず。 **カマド種類・位置** 石組・北東隅。両袖石、天井石が残存。 **覆土の状況** 3層に分かれる。礫が多く、I層では全体に広がるが、II層は中央部に集中。 **遺物出土状況** 覆土中全般にみられ、カマド周辺にも多い。土師器、灰釉陶器多数。鉄器2点(釘1、鏃1)出土。赤色物質(朱?)わずかに出土。 **時期** 第3群前半 **備考** 面積の割に深くしっかり掘り込まれた住居址。礫質の地山に礫混じりの覆土が落ち込み、検出は困難であった。

(9) 第106号住居址 (遺構: 図版5、写真図版6、遺物: 土器39~43)

位置 A区中央北東寄り。 **重複関係** なし。 **平面形** 隅丸長方形 **規模** 524・416・20 **床面積** 17.7㎡ **主軸方向** N-6°-E **壁** 東壁中央部が張り出す。 **床面** 非常に不明瞭で、ピットの確認できる面を床とした。 **ピット** 18基。径10~15cmのピットが多い。 **カマド種類・位置** カマド発見できず。 **覆土の状況** 2層に分かれる。 **遺物出土状況** 遺物少ない。P₁内にほぼ完形の土師器椀出土。 **時期** 第3群前半? **備考** 今回調査では珍しい南北長軸の住居。

00 第107号住居址 (遺構：図版6・7、写真図版6、遺物：土器63～155、鉄器23～44)

位置 A区中央部西寄り。重複関係なし。平面形 隅丸長方形。北壁の西側にわずかな張り出し。規模 832・700・44 床面積 48.7㎡ 主軸方向 N-5°-E 壁 壁高40～60cm。直に近い。床面 灰褐色土の堅い床面。中央部に非常に堅い部分がある。カマド周辺の床面は高い。ピット 21基。覆土中には炭化物、焼土が多くみられる。P₁内に土師器6個体出土。P₁₇、P₁₈、P₁₉内には礫がみられる。主柱穴か？。カマド種類・位置 石組・北東隅。両袖石、粘土が一部残存する。覆土の状況 4層に分かれる。南東隅に炭化物が多くみられる。カマド周辺と中央部分に焼土が多くみられる。覆土中全般に礫が多くみられる。遺物出土状況 覆土中に遺物きわめて多い。土師器皿、椀、杯等が大量に出土。白磁破片1点。鉄製品36点(鉄鐔3、刀子4、釘17、鎖2など)、鉄釘9点(計243g)出土。炭化材が単独で数点出土。コナラの堅炭であった。時期 第3群後半 備考 今回調査の堅穴住居址中で最大規模と深さを有し、遺物も多い。調査当初、本址南に108住、109住の存在を想定したが、掘り下げの結果、本址の一部となった。したがって108住、109住でとりあげた遺物(土器153～155)はすべて本址に属す。

(1) 第110号住居址 (遺構：図版5、写真図版6、遺物：土器162～167、鉄器48)

位置 A区南部西端 重複関係 土54に中央部を破壊される。西部1/3は区域外にかかる。平面形 隅丸長方形と推定。規模 400・(366)・28 床面積(13㎡) 主軸方向 N-0° 壁 壁高20～25cm。直に立ち上がる。床面 地山面を床面とした。あまり堅きはない。ピット なし。カマド種類・位置 カマドは発見できず。覆土の状況 3層に分かれる。遺物出土状況 遺物量は少なく点在。土師器、灰釉陶器少量、鉄製品1点、鉄滓1点出土。漆紙の付着した土師器杯(椀？：図版26)出土。時期 第3群後半？

(2) 第111号住居址 (遺構：図版5、写真図版6、遺物：土器156・157)

位置 A区中央西寄り。重複関係なし。平面形 やや不整な隅丸長方形。規模 720・560・10 床面積 39㎡ 主軸方向 N-3°-W 壁 壁高10cm前後。床面 軟弱で不明瞭。ピット 4基。径20～30cm前後。カマド種類・位置 石組・北東隅 覆土の状況 2層に分かれる。カマド周辺に礫がみられる。遺物出土状況 遺物少なく点在。時期 第3群前半？ 備考 遺構規模や施設内容の割に遺物が少ない。

(3) 第112号住居址 (遺構：図版7、写真図版6、遺物：土器158～161、鉄器49)

位置 A区中央の西端部。重複関係なし。平面形 隅丸長方形 規模 376・336・20 床面積 10.6㎡ 主軸方向 N-0° 壁 壁高10～15cm。床面 中央部分に堅い面。ピット なし カマド種類・位置 石組・北東隅。カマド奥壁突出張り出し、煙道か？。覆土の状況 2層に分かれる。ほぼ全面に炭化材、焼土が広がる。西側に炭化材がみられる。カマド周辺に礫多い。遺物出土状況 遺物少ない。土師器少量、白磁1片、鉄器1点(鎌)出土。西壁中央部に棒状礫4点まとめて遺存し礫石籠(籠編み籠)の一部か。南西部分床面上に炭化した敷物の痕跡。時期 第3群後半？ 備考 いわゆる焼失住居か？。その割に遺物少ない。

(4) 第113号住居址 (遺構：図版8、写真図版7、遺物：土器168～184)

位置 A区北部西寄り。重複関係なし。平面形 隅丸長方形 規模 452・404・28 床面積 15.4㎡ 主軸方向 N-90°-E 壁 直に立ち上がる。壁高30cm。床面 堅い面がみられるが一律でなく、礫の露出する面を床とした。ピット 2基 カマド種類・位置 石組・南東隅 覆土の状況 2層に分かれる。中央部分とカマド付近に礫が多くみられる。3箇所に焼土範囲。II層上面に被熱面あり。遺物出土状況 覆土中全般にみられる。土師器、灰釉陶器多い。時期 第3群前半 備考 今回調査でカマド位置南東隅は珍しい。

(5) 第114号住居址 (遺構：図版8、写真図版7)

位置 A区北西 重複関係なし。平面形 隅丸長方形 規模 328・324・20 床面積 8.9㎡ 主軸方向 N-10°-E 壁 壁高20cm前後。ほぼ直に立ち上がる。床面 軟弱で不明瞭。灰色土面を床面とした。ピット なし。カマド種類・位置 カマド発見できず。覆土の状況 礫が少ない。遺物出土状況 遺物少ない。土師器少量

出土。図化遺物なし。 時期 不明。他遺構との関係で第3群と推定。

(08) 第115号住居址 (遺構：図版8、写真図版7、遺物：土器185～193)

位置 B区中央東寄り。 重複関係 なし。 平面形 隅丸長方形。東壁に2か所のわずかな張り出し。 規模 436・336・32 床面積 12.9㎡ 主軸方向 N-0° 壁 壁高約30cm。直に立ち上がる。 床面 地山面を床とした。中央からカマド周辺にかけてやや堅い。 ビット 1基。東壁の2か所の張り出し部にはビット未確認。 カマド種類・位置 石組・北東隅。 覆土の状況 3層に分かれる。南側中央部と東側の床面上に焼土、炭化物、粘土分布。床面上に礫多くみられる。特にカマド付近には多く分布する。 遺物出土状況 カマド付近に遺物が多くみられる。土師器、灰釉陶器出土。 時期 第3群前半

(07) 第116号住居址 (遺構：図版9、写真図版7、遺物：土器194・195、鉄器50・51)

位置 B区西部 重複関係 なし。 平面形 不整隅丸方形。西辺全体的に内張り。南東隅わずかに欠ける。北辺中央突出。 規模 466・408・6 床面積 16.8㎡ 主軸方向 N-11°-E 壁 壁高約5cm。残存状況が悪く詳細不明。 床面 中央部からカマド周辺にかけてやや堅くしめる。中央部分、北東隅に被熱痕。 ビット 7基。 カマド種類・位置 北東隅に焼土を伴った窪みがあり、カマドの残骸と推定。 覆土の状況 2層に分かれる。床面上の広範囲に焼土、炭化物分布。 遺物出土状況 覆土の残存が少ないため遺物出土は僅少。土師器少量、白磁2片。鉄製品2点(刀子1、不明1)出土。床面上の炭化物にはモミが含まれていた。 時期 第3群後半 備考 本址一帯の検出面を低く設定したため、床面直上の覆土とわずかな壁が調査できたのみ。内部の大形ビットは本址を切る土坑だった可能性がある。

(06) 第117号住居址 (遺構：図版9、写真図版7、遺物：土器196～216、鉄器52)

位置 A区中央 重複関係 102住の深い部分に東壁突出部先端を切られる。101住上部全体を貼られている。 平面形 隅丸方形。北辺全体に凹凸の張り出し。東辺カマド脇に突出部。 規模 576・500・34 床面積 21.6㎡ 主軸方向 N-3°-E 壁 直に立ち上がる。器高40～50cm。 床面 灰褐色土に茶色土が斑らに混入し堅い。中央部付近に特に堅い面が3か所ある。 ビット なし。 カマド種類・位置 石組。北東隅。両袖石が1個ずつ残存する。全面に焼土。煙道状の窪みがわずかに奥壁へ延びる。 覆土の状況 6層に分かれる。覆土中には礫が多く含まれる。カマド付近に炭化物、焼土広がる。 遺物出土状況 覆土中全般にみられる。土師器、灰釉陶器多量、鉄器4点(鎌1、釘3)、鉄滓1点出土。 時期 第3群前半 備考 土器に101住出土品と遺構間接合するものあり。これらは本址上層遺物が101住に混入したものと捉え、本址に帰属させた。

(09) 第118号住居址 (遺構：図版10、写真図版8、遺物：土器217～224、鉄器53)

位置 B区南東隅。 重複関係 溝12埋没後に構築。 平面形 胴張り隅丸方形。南東隅と東辺北部にわずかな凹凸。 規模 528・480・38 床面積 20.7㎡ 主軸方向 N-2°-E 壁 壁高30～35cm。直に立ち上がる。 床面 中央部分に明瞭な貼床。北壁下から中央部の床面に、溝12の護岸状礫の下部がわずかに露出している。 ビット 3基。うち2基は柱穴か? カマド種類・位置 北東隅。煙道が残る。石組だったと推定されるが崩れて石材がまとまっているのみ。 覆土の状況 5層に分かれる。床面よりも10cm程度の高さに礫が広く分布する。カマド付近に礫が多くみられる。 遺物出土状況 覆土中全般にみられる。土師器、灰釉陶器少量、鉄製品2点(刀子2)出土。 時期 第3群後半?

(04) 第119号住居址 (遺構：図版10、写真図版8、遺物：土器225・226)

位置 B区東端 重複関係 溝12埋没後に護岸状礫を切って構築。東部は区域外にかかる。 平面形 隅丸方形と推定 規模 364・(344)・36 床面積 (10.4㎡) 主軸方向 N-0° 壁 壁高30～40cm。直に立ち上がる。 床面 中央部分から東側にかけて黄色粘質土の明瞭な貼床。 ビット なし。 カマド種類・位置 カマド発見できず。区域外部分に存在か? 覆土の状況 2層に分かれる。多量の礫が意図的に投入されており、特にI層からII層上部に集中。床面上4か所に焼土分布。 遺物出土状況 遺物は礫間に点在。土師器、灰釉陶器

少量出土。 時期 第3群前半？

(2) 第120号住居址 (遺構：図版10、写真図版7、遺物：土器227～231、鉄器54～56)

位置 B区北部。重複関係 なし。東半分が区域外にかかる。平面形 不明。隅丸方形または長方形と推定。規模 516・(328)・32 床面積 (14m²) 主軸方向 特定できない。壁 壁高10～25cm。直に立ち上がる。床面 軟弱。不明瞭。ピット なし。カマド種類・位置 カマド発見できず。覆土の状況 3層に分かれる。遺物出土状況 覆土中全般にみられる。土師器、灰軸陶器少量、鉄製品5点(刀子1、鎌1、不明3)、鉄片10点(計817g)出土。 時期 第3群前半？

(2) 第121号住居址 (遺構：図版8)

位置 B区北部。重複関係 なし。北側が区域外にかかる。平面形 不明。胴張り隅丸長方形となるか？。規模 668・(184)・18 床面積 (8.4m²) 主軸方向 特定できない。壁 壁高20cm。やや直。床面 茶褐色土の面を床面とした。貼床は認められない。ピット なし。カマド種類・位置 カマド発見できず。区域外部分に存在するか？。覆土の状況 3層に分かれる。遺物出土状況 遺物少ない。土師器僅少出土。 時期 不明。第3群に属するか？。備考 平面形や床面の状況、遺物出土状況などからみて住居址ではない可能性もある。

2 竪穴状遺構

(1) 第2号竪穴状遺構 (図版11、写真図版8)

A区南部に位置し、104住の上部を切る。平面形は南北3.6m、東西3.8mの不整な円形を呈し、深さは20cm。底面は礫混じり土で平坦、やや堅い。壁は傾斜を有す。覆土中に10～20cmの礫が投入されていた。遺物はわずかな土師器の出土をみたのみである。時期は不明だが、本址下部の104住が第3群前半に比定されることから、同期かそれ以降と推定する。

(2) 第3号竪穴状遺構 (図版11、写真図版8)

A区南東隅に位置し、ほとんどが区域外にかかる。把握できた最大部分で南北7.2m、東西2.4mを測り、おそらく方形ないしは長方形プランになると推定する。深さは10～18cmと浅く、底面は平坦だが軟弱である。遺物はめばしいものがない。時期は不明。

3 掘立柱建物址・柱穴列 (第3表、図版11～13、写真図版9)

A地区に1地点、B地区に3地点、ピットが集中する場所があり、それぞれピット群1～4の仮称で作業を進めたが、最終的にこれらに属するピットの多くが掘立柱建物址、または柱穴列になった。その対応関連は本文中に記す。したがって、本節ではピット群という項目は扱わないが、各ピット群の検出面などから出土した遺物はそのままピット群の名称で掲載してある。そのピット群が対応する建物址の遺物である可能性が高い。掘立柱建物址は総計7棟、柱穴列は1列を数える。時期を特徴づける遺物は少ないが、いずれも第3群後半、及びそれ以降のものと推定している。

(1) 第7号建物址 (図版11、写真図版9)

B地区南部、ピット群3に属する。P₃₅₃・P₃₅₄・P₃₅₅・P₃₅₆・P₃₅₈・P₃₅₉・P₃₆₁・P₃₁₂・P₃₁₃・P₃₂₄で構成される2間×2間の総柱建物址である。柱間は1.8～2.4mと一定しない。南側区域外に延びて間数が増える可能性もあろう。出土遺物はない。

(2) 第8号建物址 (図版11、写真図版9)

B地区南部、ピット群3に属する。P₃₆₂・P₃₁₇・P₃₁₈・P₃₂₀・P₃₂₁・P₃₂₂・P₃₂₃・P₃₂₅で構成される2間×2間の総柱建物址で、領域内に土69・70を含むが本址の施設か明確ではない。柱間は南北1.7m、東西

2.1mの数値を示す。P₄₁₈から白磁片1点(232)が出土している。

(3) 第9号建物址 (図版12)

B地区西端、116住に隣接し、ピット群5に属す。P₅₀₂・P₅₀₃・P₅₀₄・P₅₀₅・P₅₀₈・P₅₁₀・P₅₁₇で構成される側柱式の建物址で、柱穴が均等に並ばず、全体で方形をなすタイプである。軸方向が真北より18度ほどずれるが、南隣の116住と揃っており、関連を有す可能性がある。

(4) 第10号建物址 (図版12)

B地区北東隅、ピット群2に属する。P₅₇₄・P₅₇₈・P₅₈₂・P₅₉₀・P₆₀₀などから構成される建物址で、2間×2間の方形プランをもつ側柱式として捉えたが、周囲に小ピットを多数伴うため、柱穴が均等に並ばず、全体で方形をなすタイプの建物である可能性も残る。中央部のピットを拾って総柱式とみることもできる。溝12の埋没後に構築されており、領域内に土65・67を含む。両土坑ともに本址に関連するものであろう。本址に伴う遺物は多く、P₉₇₈から土師器皿(233)と107gの鉄滓、P₅₈₂から土師器皿(234)と灰軸陶器碗(235)、土65から土師器皿(237)、須恵器長頸壺(238)が出土している。

(5) 第11号建物址 (図版12)

A地区中央、ピット群1に属する。P₃₉₃・P₄₀₁・P₄₀₂・P₄₀₄・P₄₀₅・P₄₁₅などで構成される側柱式の建物址。柱穴が均等に並ばず、全体で長方形をなすタイプである。101・117住に南部を切られる。めばしい出土遺物はない。

(6) 第12号建物址 (図版13)

A地区北東、ピット群1に属する。P₃₃₂・P₃₃₃・P₃₃₄・P₃₃₇・P₃₄₁・P₃₄₂・P₃₄₃で構成される側柱式の建物址。柱穴が均等に並ばず、全体で長方形をなすタイプである。建13と重複する。軸方向が真北より9度ほどずれる。

(7) 第13号建物址 (図版13)

A地区北東、ピット群1に属する。P₃₃₈・P₃₄₄・P₃₅₁・P₃₅₄・P₃₅₆・P₃₅₇・P₃₆₅・P₃₈₀・P₃₈₁などで構成される側柱式の建物址。柱穴が均等に並ばず、全体で長方形をなすタイプである。建13と重複する。内外に大小のピットを伴っているが、いずれも本址に関連するものであろう。遺物は検出面から灰軸陶器(山茶碗? : 243)と白磁片が得られている。

(8) 第1号柱穴列 (図版13)

B地区中央西寄り。溝12・14などの西隣りに位置し、ピット群4に属する。P₅₂₆・P₅₂₉・P₅₂₀・P₅₃₀・P₅₃₁・P₅₃₂・P₅₃₃・P₅₄₂・P₅₄₃・P₅₄₆で構成される。ほぼ真北を指しているが、柱穴間は1.2~2.7mと一定しない。この一帯には南北に細長い範囲でピットが集中点したため、ピット群4として捉え、なんらかの遺構の可能性を考えながら調査を進めたが、最終的に柱穴列を設定できたに止まった。すぐ北の97住や土53・56・57と関連する遺構の存在を想定する必要がある。

4 土坑・ピット (第4表、図版14、写真図版9)

土坑およびピットは総計250基以上を検出した(土坑21基、ピット233基)。このうちピットは、建物址の項で述べたとおり調査時に5つのピット群にまとめて捉えた(ピット群1~5)。大半は建物址と柱穴列を構成する。

土坑の詳細は第4表に示したとおりであるが、中には建物址の領域内に位置し、建物址の施設の一部であった可能性を持つものが指摘できる(土69・70:建8、土65・67:建10)。土65は土師器と須恵器を出土しているが、須恵器の壺(238)は形態からのみ見ると第2群に近い時期の所産である。しかし、本址が溝12(時期は第2群)の埋没後に掘られていること、本址が含まれる建10(ピット群2)は第3群の時期と推定され

ていることから、古い小形品が伝世された可能性を考えたい。土坑63は周辺検出面を低くしすぎて覆土がわずかしか残っていなかったが、底面付近に全面的に板状または植物繊維を荒く編んだようなものの炭化物が厚さ1~2cmで遺存していた。

5 溝址 (図版15~17、写真図版2・9~11)

溝址は11号から20号までの計10条を検出した。多くは流路だが、人為的な加工のなされたと考えられるものもある。溝址の形成についてはII章I節に述べているので参照されたい。

(1) 第11号溝址 (写真図版9)

A地区の調査区東壁沿いを南から北に蛇行する、浅い流路性堆積の溝。A地区東壁中央南寄りから現れ、北東隅付近で浅くなって消滅している。長さ約38m、幅0.7~1.5m、深さ10~20cm。覆土には5cm大の礫が点在していた。土師器、須恵器、灰釉陶器(244)の小片、鉄釘2本が出土している。時期は第2群に相当する。

(2) 第12号溝址 (図版16・17、写真図版2・11)

B地区東端を南北の直線的に延びる幅の広い溝。南端及び北端は区域外に連続し、調査範囲内で確認できた長さは約16mである。118・119住や建10など周辺遺構のすべてに切られる。断面形はゆるやかな逆三角形を呈し、規模は幅7.5~9m、深さ0.8~0.9mを測る。土層堆積は中央部中層で流路性を示している(II章I節2-③、写真図版11参照)。本溝の最大の特徴は東岸表面を径5~20cmの礫で溝底から上部まで覆っている点である。あまりに規模が大きいため当初は自然地形かとも考えたが、覆っている礫帯の下部(内部)は小礫や砂利と砂質土の自然堆積で、傾斜する岸の表面のみに大中礫が集められていることが断面観察で明瞭にわかった。このため本溝の東岸はおそらく人為的に礫が積まれ、護岸状の様相を呈したと推定する。溝内からの遺物は、土師器小片がわずかに出土したのみである。

本址の用途・目的は推測の域を出ないが、本址西方の溝13などの大形流路がまだ活発に活動していた時期に、本址以東の地帯を不意の出水などから防ぐ目的の護岸状遺構を考えたい。すなわち今回の調査では捉えられなかったが、溝13と同時期の平安時代前期に遡る集落が、ここより東方のいずれかの地点に存在する可能性を今後追究する必要がある。したがって本址の時期は第2群と推定する。

(3) 第13号溝址 (図版15、写真図版10)

B地区中央部を南西から北東に向かってわずかに蛇行しながら50mにわたって縦断し、北部で2本に分流して区域外へ消える。幅2.0~5.5mを測る大規模な自然流路で、深さは40~50cmとあまり掘り下らない。南部で古墳時代の遺物を持つ溝20を下部に覗かせている他は周辺の遺構すべてに切られる。中央部と北部には中・下層に自然礫の投入がみられた。かなりまとまった形の土師器、須恵器を溝底部から点々と出土しており、これらから第2群の時期に主体的に存在・活動した溝(流路)と考える。ただし、覆土上層には周囲のより新しい溝と同様の土層をもつ部分があるため、本址は経時とともに徐々に小規模となって蛇行しながら部分的に残存し、溝17・18はその一部になっていった可能性もあろう。その時期は第3群に相当する。

出土遺物は土師器内黒杯(247~249)、土師器碗(250)、須恵器高台杯(252)、軟質須恵器杯(251)、須恵器壺(253)、同長頸壺(254)、鉄器筒状不明品である。

(4) 第14号溝址 (図版15)

B地区中央西、溝13の西外に位置する。長さ16.3m、幅0.5~0.9m、深さ8~14cm。わずかに蛇行するが、ほぼ南北方向に延びる。覆土は灰褐色砂質土。流路性の溝と推定する。出土遺物にめばしいものはない。

(5) 第15号溝址 (図版15、写真図版10)

B地区中央に位置し、溝13の南部に重複する。長さ24.0m以上、幅0.4~0.8m、深さ10~22cm。ほぼ一直線に南北方向に延び、南端は調査区域外にかかる。あまりに直線的なため、人為的な遺構の可能性を認めたい。

時期は溝13の埋没後であり、第3群後半、及びそれ以降と推定する。出土遺物にめばしいものはない。

(6) 第16号溝址 (図版15)

B地区中央、溝15の北部東側にほぼ並列する。長さ6.7m、幅0.3～0.5m、深さ10～18cmの小規模な溝。溝15との位置関係から人為的な遺構の可能性を認める。時期も溝15に等しいであろう。出土遺物にめばしいものはない。

(7) 第17号溝址 (図版15、写真図版10)

B地区中央南寄り。溝13の南部を切る。長さ約13m、幅0.5～1.0m、深さ8～18cm。大きく蛇行しながら北端は溝13に合するようにみえる。あるいは前述のように溝13の上層部分となって北へ続いていたのかもしれない。時期は第3群と推定する。出土遺物にめばしいものはない。

(8) 第18号溝址 (図版15)

B地区中央。溝13の中央部上層を東西に切る。長さ約3.0m、幅0.4～0.6m、深さは10cm前後と浅い。覆土は灰褐色砂質土。溝17の北端が蛇行、断続しながら本址に至っている可能性もある。時期は第3群と推定する。出土遺物にめばしいものはない。

(9) 第19号溝址 (図版15、写真図版10)

B地区北部、溝13の東に向かう分流の南側に並行する。長さ7.2m、深さ20cm前後だが、幅は両端が徐々に細くなる不定なもので、最大1.2mを測る。位置や形状からみて溝13の東流部分と同時に形成された流路性の溝と考える。したがって、時期は溝13の主要な活動時期と等しいと推定する。出土遺物にめばしいものはない。

(10) 第20号溝址 (図版15)

溝13の下層にあたり、B地区南部の区間でのみ長さ約1mにわたって検出できた。溝13と土坑56に切られている。検出できた部分の幅は1.4m、深さは8cmである。第1群(古墳時代中期)の土師器数片を出土し(図化提示できたのは246のみ)、その時期まで遡ると推定する。おそらく本址及び溝13の位置には古墳時代中期から断続して流路が活動しており、本来は同一の溝であるが時代によってわずかに位置をずらしていたため、部分的に古い時期のものが検出できたのであろう。

第2表 住居址一覧

住居 No	地区	平面形	軸方向	規模 (cm)			床面積 (㎡)	カマド 位置	備 考
				長軸	短軸	深さ			
97	B区	隅丸方形	N-0°	592	564	8	31.0	なし	土32・53に切られる。
98	A区	方形	N-0°	388	368	18	11.4	北東隅	
99	A区	隅丸方形	N-0°	656	620	24	30.6	北東隅	100住を切る。徳失住居
100	A区	方形?	N6.5° E	442	<168>	28	6.8	不明	99住に切られる。
101	A区	長方形	N-0°	560	488	14	24.8	なし	102住・103住を切る。117住を貼る。
102	A区	長方形	N6° E	764	544	30	36.6	なし	117住を貼る。101住、P400に切られる。
103	A区	隅丸方形	N4° E	560	528	12	27.4	不明	117住を貼る。101住に切られる。
104	A区	隅丸方形	N-0°	480	432	52	15.7	北東隅	赤色物質(朱?)出土。壁2に切られる。
105									欠番となる。
106	A区	隅丸方形	N6° E	524	416	20	17.7	なし	
107	A区	隅丸方形	N5° E	832	700	44	48.7	北東隅	最大規模の竈穴住居址
108									欠番となる。
109									欠番となる。
110	A区	不明	N-0°	400	<366>	28	13.0	不明	土54に切られる。区域外にかかる。
111	A区	隅丸方形	N3° E	720	560	10	39.0	北東隅	
112	A区	隅丸方形	N-0°	376	336	20	10.6	北東隅	全面に炭化材・焼土広がる。徳失住居か?
113	A区	隅丸方形	N90° E	452	404	28	15.4	北東隅	
114	A区	方形	N10° E	328	324	20	8.9	なし	
115	B区	隅丸方形	N-0°	436	336	32	12.9	北東隅	
116	B区	不整形長方形	N11° E	466	408	6	16.8	なし	
117	A区	隅丸方形	N3° E	376	500	34	21.6	北東隅	102住に切られる。101住に貼られる。
118	B区	隅丸方形	N2° E	528	480	38	20.7	北東隅	溝12を切る。
119	B区	隅丸方形	N-0°	364	344	36	10.4	不明	溝12を切る。区域外にかかる。
120	B区	不明	不明	516	<328>	32	14.0	不明	区域外にかかる。
121	B区	不明	不明	668	<184>	18	8.4	不明	区域外にかかる。

第3表 掘立柱建物址一覧

No	地区	軸方向	規 模			柱 穴			備 考	
			桁行(m)	梁間(m)	頭積(㎡)	数	規 模	形		
7	B区	N-0°	4.44	4.34	19.5	9	0.40~0.26	円形		
8	B区	N-0°	4.30	3.40	14.9	9	1.76~0.24	円形	領域に土69・70を含む。	
9	B区	N18° E	4.90	3.78	18.4	9	0.22~0.12	円形		
10	B区	N6° W	5.00	4.80	24.9	8	1.26~0.36	円形	土65・67を含む。溝12埋設後に構築	
11	A区	N-0°	8.80	4.06	36.1	17	0.14~0.80	円形	101・117住に切られる。	
12	A区	N9° W	5.04	3.36	18.1	8	0.18~0.58	円形	礎15と重複	
13	A区	N-0°	7.92	4.40	34.9	11	0.22~0.92	円形	礎12と重複	
合計	B区	N1° W	全長11.72m				9	0.48~0.12	円形	

第4表 土坑一覧

土坑 No	地区	位 置 グリッド	規 模 (cm)			平 面 形	備 考
			長径	短径	深さ		
49	A区	N5, E15	432	200	6	不定形	
50	A区	N7, E15	164	160	12	円形	土49を切る。
51	A区	N11, E16	152	124	6	楕円形	
52	B区	N15, W77	124	120	42	円形	97住を切る。
53	B区	N11, W77	248	224	8	楕円形	97住を切る。白磁(239)出土
54	A区	N13, W10	208	162	54	楕円形	110住を切る。
55	A区	N11, E14	36	36	10	円形	
56	B区	S11, W77	168	156	30	楕円形	溝13・20を切る。
57	B区	S6, W80	180	156	22	不整形円形	
58	B区	S12, W53	172	116	10	隅丸長方形	
59	B区	S13, W47	108	<70>	22	不明	一部が区域外
60							欠番となる。
61	B区	N9, W67	72	52	8	楕円形	溝13を切る。
62							欠番となる。
63	B区	N23, W49	208	80	6	楕円形	底形付近の全面に炭化物
64	B区	N27, W44	84	76	22	円形	
65	B区	N23, W25				楕円形	礎10の北東角に存在。土師器(237)・須恵器(238)出土
66	B区	N12, W30	54	52	16	円形	
67	B区	N21, W25				楕円形	礎10の領域内に存在
68	B区	N6, W56	60	58	8	円形	
69	B区	N7, W54	100	72	10	不定形	礎8の領域内に存在
70	B区	N4, W51				不定形	礎8の領域内に存在。白磁(240)出土
71	A区	N8, E3	60	44	16	楕円形	

Ⅲ節 遺物

1 土器・陶磁器（第5・6表、図版18～23、写真図版12～18）

① 概要

今回出土した土器・陶磁器は総量で整理用コンテナ12箱分、ほぼ180kgである。ほとんどが竪穴住居址を中心とする遺構内から出土した。

種別は、土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁に分類される。土師器には炭素吸着技法によって内面を黒色にした内黒土師器（黒色土器A）、同様に内外面を黒色にした黒色土師器（黒色土器B）を含む。種別ごとの量的な比は、土師器が9割を占め、残りを須恵器と灰釉陶器が埋めている。白磁は数片に過ぎない。

時期的にみると、複数の時期によって構成される。溝13から平安時代前期、溝20からは古墳時代中期のものが出土しているが数量は少ない。土器・陶磁器の主体となるのは平安時代後期のもので、上記2遺構以外の各遺構から出土している。

図化提示は残りの良いものを中心に、263点を行った。種別の内訳は、土師器207点（うち内黒土師器15点、黒色土師器1点を含む）、須恵器8点、灰釉陶器40点、白磁8点である。これを百分率にすると、土師器78.8%、灰釉陶器15.2%、須恵器と白磁がいずれも3.0%ずつとなる。また、土師器に占める内黒土師器と黒色土師器の比率は7.2%と0.5%である。図化提示できなかった小破片も含める全土器・陶磁器総体における各種別の構成比も、ほぼこれに近い数字になると推定する。ただし、白磁は図化率がやや高い。

② 器種・器形

帰属する時期によって、器種・器形の分類が大きく異なるので、以下では時期ごとに述べる。平安時代の器種・器形の基本的な名称は文献1の分類を踏襲したが、黒色土器（黒色土師器）の位置付けや皿の形態分類などには違いがある。

A 古墳時代の土器

土師器の小形甕、または小形の壺と推定される個体が認められる。「く」の字にくびれる頸部を有し、口縁部は強いヨコナデが行われる。

B 平安時代前期の土器・陶器

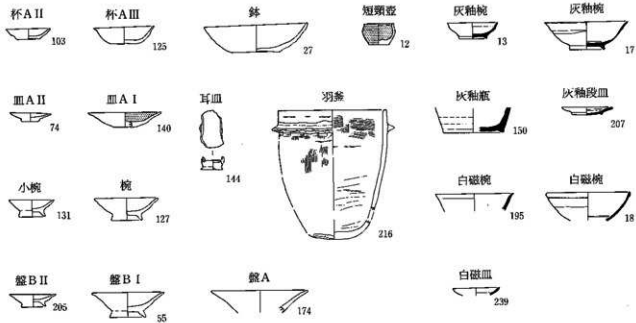
土師器杯・椀、須恵器杯・甕・長頸壺の種別・器種が認められる。土師器杯は内面を黒色処理した内黒土師器（黒色土器A）の杯AⅡで、口径13cm前後を測る。須恵器杯は高台が付される杯Bと台のない杯Aの双方がある。

C 平安時代後期の土器・陶磁器

土師器の器種には杯・皿・耳皿・壺・椀・鉢・羽釜・短頸壺がみられる。須恵器には甕が、灰釉陶器には椀・段皿・瓶が、また白磁には椀・皿・瓶がみられる。このうち、主な器種・器形は以下に述べるとおりである。

土師器杯 すべて高台を持たない杯Aであるが、小形の杯AⅡと、中形の杯AⅢの2器形（法量）が存在する。口径は杯AⅡが8.5～10.5cm、杯AⅢは12.5cm以上を測る。杯AⅡは器高がかなり低くなっており、口縁部破片だけは皿AⅡと区別がつけにくい個体も多い。内外面にロクロナデの痕跡を明瞭に残し、ミガキが行われる個体はきわめて少ない。底面にはすべて回転糸切り痕が残る。内面にミガキを行い黒色処理した内黒土師器（黒色土器A）がわずかに混じる。

土師器皿 すべて高台を持たない皿Aである。小形の皿AⅡと、中形の皿AⅠの2器形（法量）が存在する。口径は皿AⅡがほぼ10cm以下、皿AⅠは15cm前後を測る。皿AⅡはかなり平らな体部に突出気味の底部が付される特徴的な形態を呈し、口縁部内側にわずかな面を有す。内外面にロクロナデの痕跡を明瞭に残し、



第9図 土器器種器形一覧

底面にはすべて回転糸切り痕が残る。内面にミガキと黒色処理が行われた内黒土器器(黒色土器A)の個体もわずかにある。

土器器碗 大形の碗と小形の碗の2器形(法量)が存在する。碗の寸法はほぼ口径14~16cm、底径5~7cmの範囲にあり、同様に小碗は口径9~11cm、底径4~6cmほどを測る。碗・小碗ともに形態は盤B I・IIに類似し、区別のむずかしい個体もあるが、体部の丸味が強く、高台の低いものを碗・小碗として分離した。内外面にロクロナデの痕跡を明瞭に残し、底面に貼り付けられた高台の内側に回転糸切り痕が残る個体も多い。内面にミガキと黒色処理が行われた内黒土器器(黒色土器A)の個体は、碗にわずかに認められるのみである。

土器器盤 逆「ハ」の字形に開く体部とやや丈の高い高台を有す形態を基本とする。口径20cmを超す大形の盤A、口径15cm前後の盤B I、口径9~11cmの盤B IIの3器形が存在する。ただし、盤Aは数量的に少なく、かつ、脚部までの全形を知り得るものはない。いずれも、内外面にロクロナデの痕跡を明瞭に残し、高台の内側にも回転糸切り痕が残る。ミガキや黒色処理が行われる個体はまったくない。

土器器鉢 杯のごく大形のもの(27・57・58)を鉢とした。杯を相似形で大きくしたもの(27・57・58)と、口径と底径の大きさに対し器高が低く洗面器形を呈するもの(224)の2種がある。前者はロクロナデによる器面調整だが、後者はナデや指オサエによっておりロクロナデが行われない。数量的にみて、いずれも特殊な器形・形態といえよう。

土器器羽釜 わずかに胴張りの深鉢に鐏が付される形態を呈す。口縁から底部まで接合し、完全に全形を捉えられるものはない。口径が24~28cmほどの大形品と16cm前後の小形品の2器形(寸法)に分かれるとみられるが、小形品は数が少なく明確ではない。ほとんどの個体で鐏は全周しているが、まれに全周せず偏平横長の突起状に数単位で付される例(182:4単位)がある。器内は厚手で、器面調整はハケメや雑なナデが用いられている。

灰釉陶器碗 口径9~11cmの小形品と14cm以上の大形品の2器形(寸法)に分かれる。それぞれ土器器の小

椀と椀に対応しているのであろう。いずれにも雑な輪花椀がわずかに伴う。器面調整はロクロナデだが底面周辺に回転ケズリが行われる個体も少なくない。施釉は濃掛けで雑なものが多い。

灰釉陶器段皿 高台を持ち、体部内面にのみ段を有する形態で、口径10～12cmの小形品が主体を占めるが、口径13cmを超える個体もわずかに認められる。器面調整はロクロナデで底面周辺に回転ケズリが行われる。成形や施釉に雑なものが多い。

白磁 全数で27片の出土。その一覧を第6表に示した。このうち図化提示できたのは8点にすぎず、全形を知るものはない。小破片で、椀の一部と推定される程度のものが大半である。器種としては椀、皿、瓶頸（壺？）が認められる。椀の口縁部には大きな玉縁、小さな玉縁、端反り、反りなしの各種がある。椀・皿ともに内面見込部に溝線（凹線）がみられる。

③ 土器群

竪穴住居址や溝の中には、まとまった数量の土器が出土したものがある。これらの遺構出土土器について、出土状態を検討した上でそれぞれ各遺構出土土器群として認定し、器種・器形組成を概観したい。対象となる遺構の種類は竪穴住居址と溝である。

第99号住居址出土土器群 炭化材と礫が多量に遺存する住居址の床面付近から多数が出土した。ただし、地点的に集中する傾向はなく、住居址内の各地に散乱して存在した。したがって、特殊な廃棄状況は想定できないが、炭化材の形成や礫の投棄とほぼ同じ時間幅のなかで廃棄・遺棄されたものと推定する。

種別は土師器、灰釉陶器、白磁から構成される。白磁は2片のみであるが、本址に切られる100住出土の8片と接合している。器種・器形では皿AⅡ・杯AⅡ・杯AⅢ・盤BⅠ・盤BⅡ・椀・短頸壺・羽釜の計16点が図化できている。器種ごとの種別は、椀は土師器と灰釉陶器、短頸壺が黒色土師器（黒色土器B）で、他はすべて土師器が占める。

第104号住居址出土土器群 本址には上層から下層にわたり多数の礫が投入されていたが、土器・陶磁器もそれらの礫の間から点々と出土した。覆土の土層は上下2層に分けられたが、礫の投入は継続して行われたようであり、土器・陶磁器も礫と同時に廃棄されたものと推定する。したがって、本址出土品はある程度の時間幅の中で捉えるべき土器群と考える。

種別は土師器と灰釉陶器が主体をなし、わずかに内黒土師器（黒色土器A）が混じる。器種・器形には杯AⅡ・杯AⅢ・盤BⅠ・盤BⅡ・椀・鉢の計19点が図化提示できている。椀に土師器と灰釉陶器の2者がみられるが、他の器種はほとんどが土師器で占められる。

第107号住居址出土土器群 8m×6.6mを測る大形の竪穴住居址覆土から多量の土器が出土し、総量で整理用コンテナ3箱（約40kg）を数える。本址中央部から東側の覆土上層には多数の礫が点在していたが、土器の出土地点はそれらの礫とは相関がなく、下層の西北部、中央部北側、北東隅部および南東隅部にそれぞれまとまっている（図版6参照）。しかし、個々の土器出土状況は重ねられたり、配列が感じられる様子はまったくなく、正位や逆位などさまざまな形態を示した。無差別に廃棄されたか、棚や台、または箱のような施設に置かれていて、施設の崩壊腐朽とともに散乱したなど、いろいろな状況が想定できるが、いずれにせよ下層の覆土形成に先行、またはほぼ同時に生じた状況であろう。したがって、器種器形の組み合わせや比率に意図的なものを読み取ることが有効性の問題は残るにしても、廃棄の同時性を有する土器群と認定できよう。

種別は土師器、灰釉陶器、白磁から構成されるが、圧倒的に土師器が多く、白磁は小破片1点にすぎない。土師器の中にはわずかに内黒土師器（黒色土器A）が含まれている。器種・器形では皿AⅠ・皿AⅡ・杯AⅡ・杯AⅢ・盤A・盤BⅠ・盤BⅡ・椀・小椀・段皿・耳皿・甕・羽釜・瓶（底部のみ）の実に計90点が図化できた。椀に土師器と灰釉陶器の2者がみられ、段皿は灰釉陶器に限られるが、他の器種はほとんどが土師器

で占められる。

第113号住居址出土土器群 本址南西から中央部にかけての覆土上層（第I層）にまともて礫が投入されており、その礫間および礫下部のかなり床面に近い位置から点在して出土した。図化提示したもののうち、170・171・173・180は明らかに礫下の床面に近い位置にあり、それらと182の羽釜以外は礫中または上層の出土、182の羽釜は本址南部の広い範囲に上層から下層にわたって破片が散らばっていた。この状況からは170・171・173・180の4点がまず遺棄され、続いて礫の投入とともに他の土器が廃棄されたと捉えたい。したがって、厳密には床付近の4点を第113号住居址下層土器群、他を第113号住居址上層土器群と区別するが、編年的な時期差はほとんど認められない。

種別は土器器が主体をなし、わずかに灰釉陶器が混じる。器種・器形には杯AⅡ・杯AⅢ・盤A・盤BⅡ・椀・羽釜の計17点が図化提示できている。椀に土器器と灰釉陶器の2者がみられるが、他の器種はほとんどが土器器で占められる。

第117号住居址出土土器群 本址の中央部から壁のやや内側までの上層及び下層の上部に多量の礫がびっしりと投入しており、土器はそれらの礫中よりは外周部の壁やカマドに近い位置から主に出土した。深さは覆土上層および下層の上部で、床面まで降りるものは少ない。このことから、礫の投入の寸前の本址外周部に土器を廃棄（遺棄）し、引き続いて礫を投入した状況が推測できる。時間的にはかなり同時性を有する土器群と考えたい。ただし、須恵器の大甕破片は礫間より出土しており、礫と同一に扱われて投入されたものと推定する。

種別は土器器、灰釉陶器および須恵器から構成されるが、量的には土器器が多い。土器器の中にはわずかに内黒土器器（黒色土器A）が含まれている。器種・器形では杯AⅡ・杯AⅢ・盤BⅡ・椀・小碗・段皿・耳皿・大甕・羽釜の計21点が図化できている。椀に土器器と灰釉陶器の2者がみられ、段皿は灰釉陶器に限られるが、他の器種はほとんどが土器器で占められる。須恵器は大甕の1点のみである。口縁と底部を欠くが、頸部径33cmを測る巨大なもので、おそらく須恵器はこの種の大形貯蔵器にわずかに残存するのみであろう。

第13号溝址出土土器群 大形の流路である溝13の底部付近から、点々と出土した。図化提示できたものは8点のみで量的に少なく、出土地点も離れている。しかし、各個体があまり分離せずに原型を保って出土したこと、溝底に点在する出土状況が類似することから、廃棄の状況にかなり同時性を有する土器群として扱いたい。

種別は土器器と須恵器で構成されるが、土器器は1点を除きすべて内黒土器器（黒色土器A）である。器種・器形は杯（杯AⅡの平安時代前期段階のもの）・椀・大甕・長頸甕があり、杯は土器器と須恵器（杯AⅡは軟質須恵器）、椀は土器器で、他は須恵器となっている。

④ 編年的な位置

当地域での奈良・平安時代の編年案は、長野県埋蔵文化財センターによって松本市内奈良井川西岸部諸遺跡における編年（文献1）と塩尻市吉田川西遺跡のもの（文献2）の2本が提示され、現段階では最も有効と考える。これを基軸に、当遺跡の土器群の編年的な位置を把握したい。具体的には、上記の代表的な土器群における、焼き物の種別構成、器種器形組成、特徴的な器種の寸法（法量）、という3段階で検討を行いたい。

種別構成 第13号溝址出土土器群（以下「溝13土器群」と略称。他の土器群も同様）を除く他の土器群では土器器と灰釉陶器で構成される特徴がある。まれに白磁、内黒土器器（黒色土器A）が伴っている土器群もあるが、その数量は非常に少ない。この構成は文献1による「12期」以降、あるいは文献2による「SB84段階」以降に相当すると考える。ただし、白磁の共伴は文献1・2ともに、最終段階の「15期」「SB31段階」とな

っている。

一方、溝13土器群は須恵器と内黒土師器(黒色土器A)が種別構成の主体を占め、しかも須恵器には軟質須恵器を含むため、文献1による「7期」から「8期」、文献2による「SB144段階」から「SB111段階」に相当しよう。

器種器形組成 溝13土器群を除くと、杯AⅡ・Ⅲ、盤BⅡ、碗が主体となる104住・113住・117住土器群と、この組成に皿AⅡ・Ⅰが加わる99住土器群と107住土器群の2分別が可能となる。文献1によれば盤Bは「11期」から「15期」、皿Aは「14期」に存在し、また、文献2でも盤Bは「SB94段階」から「SB31段階」、皿Aは「SB32段階」から「SB74段階」に存在が認められている。したがって、104住・113住・117住土器群が先行し、「12期」～「13期」、「SB84段階」に併行。99住土器群・107住土器群がこれに続き「14期」、「SB32段階」～「SB74段階」に併行となる。

問題は、99住土器群と107住土器群における皿A(特に皿AⅡ)と少量ながらも存在する白磁の共伴である。繰り返すが、皿Aは「14期」、「SB32段階」から「SB74段階」に対し、白磁は次期の「15期」「SB31段階」である。皿Aの存在時期と型式変化を検討する必要があるだろう。

特徴的な器種の寸法(法量)構成 先にとりあげた各土器群における杯AⅡの寸法(法量)は次のとおりである。

- 99住(1点のみ):口径9.8cm、底径6.0、器高1.6
- 104住(2点):口径9.1～10.4cm(平均9.75cm)、器高1.9～2.0(平均1.95cm)
- 107住(31点):口径8.4～10.4cm(平均9.33cm)、器高1.6～2.5(平均1.97cm)
- 113住(5点):口径9.2～10.2cm(平均9.72cm)、器高2.0～2.3(平均2.13cm)
- 117住(6点):口径8.9～10.2cm(平均9.52cm)、器高1.4～2.7(平均2.09cm)

標本数の少ない99住や104住での言明はできないが、いずれの数値も文献1・2に当てはめると「13期」「SB32段階」以降に相当する。また、113住・117住土器群に対し、107住土器群における杯AⅡは口径、器高ともにわずかな縮小傾向を示している。

皿AⅡの検討 今回出土の皿AⅡは突出気味で厚手の底部と口縁部内側のわずかな平坦面が特徴(Type2と仮称する。)で、107住の土器群によって全貌が窺える。しかし、文献1・2ともに皿AⅡの特徴は「口縁端部の(上方へつまみ上げるような:筆者加筆)面取り」(Type1と仮称する。)とされ、かろうじて文献2で新しい段階のものは底部が厚く仕上げられるという指摘がなされている。ところが、今回の出土品の中には、Type1に近い個体は107住66の1点のみで、同住79・80などには口縁端部外側にわずかな面も感じられるが、いずれも口縁部内側の平坦面の方が印象的である。そもそも、皿AⅡは文献3及び文献2で畿内の土師皿の影響下に成立した可能性が指摘されており、この視点は妥当なものと評価できる。基本的には、Type1・2ともに、口縁端部の加工変形という点では同系統と捉えて間違いはあるまい。したがって、単純に考えれば、Type2はType1の端部面取りによる内面受け口部分が退化して単なる平坦面となり、外側の面は失われたもので、時期差による形式変化の結果と捉えることも可能である。文献2では皿AⅡの変化について、SB31段階になると小型化した杯AⅢと法量が一致し「取り込まれてしまうようである」と推測しているが、法量の間でも、あくまでも皿AⅡを意識した形態が作られた状況も想定したい。

加えて、文献4ではType2類似の口縁端部内側に沈線をめぐらす皿AⅡの存在が確認されており、これらの違いは、単に時期差に起因する型式変化なのか、それとも地域の中の小地域での差、あるいは模倣の範囲の違いによるのかなど、案外、未解決の問題を内包している可能性が高い。

土器群の時期 以上の既存編年に対置させた検討を次のように整理したい。すなわち今回調査の良好なまとまりをもつ各遺構出土の土器群は、時期的にみた場合、以下の三群に大別統合できよう。その他、土器群

として取り上げられなかった遺構出土品や検出面出土品は、ほとんどが第3群の時期に属し、特にピット、建物址は第3群後半が多いと考えている。

(平田本郷Ⅲ出土土器第1群：溝20出土土器が相当。古墳時代中期。)

平田本郷Ⅲ出土土器第2群：溝13出土土器群が該当。文献1「7期～8期」、文献2「SB144～111段階」相当。平安時代前期（9世紀後半）

平田本郷Ⅲ出土土器第3群前半：第104・113・117号出土土器群が該当。文献1「13～14期」、文献2「SB32～74段階」付近相当。平安時代後期（11世紀後半）

平田本郷Ⅲ出土土器第3群後半：第99・107号出土土器群が該当。文献1「14～15期」、文献2「SB74～31段階」付近相当。平安時代後期（12世紀）

参考文献

文献1：長野県教育委員会1990「中央自動車道長野緑地文化財発掘調査報告書4－松本市内 その1－総論編」

文献2：長野県教育委員会1989「中央自動車道長野緑地文化財発掘調査報告書3－塩尻市内 その2－吉田川西遺跡」

文献3：原 明芳1988「吉田向井遺跡 古代末期の廃物」中央自動車道長野緑地文化財発掘調査報告書2－塩尻市内その1－長野県教育委員会

文献4：竹内晴長1992「平安時代の土器・陶器」松本市域の内遺跡 松本市教育委員会

2 鉄器・鉄製品（第7表、図版24～26、写真図版19・20）

総計123点出土した。このうち56点を図化した。すべて鉄製で、器種には刀子、釘、鉄滓、鎌、鉄鐮、苧引鉄、紡錘車、鎖、鉄鍬、不明品、鉄滓などがみられる。ほとんどの鉄製品は竪穴住居址の覆土中から出土している。遺構別に出土点数をみると107住で47点と最も多く、次いで120住17点、99住10点、100住8点となっている。特に107住と99住は器種も豊富であり、鉄鐮を出土する。以下では器種別に叙述する。

刀子 12点出土した。このうち10点を図化した（1・15・16・20・41・42・43・51・53・56）。1・43・53が特徴的である。1は2つの個体が接着したものか1個体であるか判然としない。上下の個体とも基部の断面はほぼ正方形を呈している。下方の個体は刃部に比べ基部が長く棟側である。あまり類例をみないものである。43は基部端が欠損しているものの、全長は240mm、身部の最大幅35mmと大きい。53は身部中央に最大幅を持ち、刃側は直線的で棟側は湾曲している。

釘 29点出土した。このうち11点を図化した（10・19・21・30・31・32・33・34・35・45・48）。107住から17点出土している。

鎌 6点出土しすべてを図化した（4・5・6・44・49・54）。99住で3点出土している（4・5・6）。44と49は完形品。4・5・54は折り曲げられている。49は通常とは逆に着柄部端部が折り返されている。

鉄鐮 5点出土しすべてを図化した（12・36・37・38・46）。99住で1点（12）、107住3点（36・37・38）、溝11で1点（46）出土した。12・36・37・38は完形品。12は頭部に穿孔されている。36は内部に棒状品が付着しており舌かもしれない。

苧引鉄 4点出土しすべてを図化した（7・8・17・47）。完形品は7と17。ともに端部に木質部が残存している。

紡錘車 2点出土した。2点を図化した（9・39）。2点とも輪部。9には軸孔がみられ、39は軸部が残存している。それぞれ中央部が厚く縁部に向かって徐々に薄くなっていく。

鎖 2点出土した。このうち1点を図化した（28）。2点とも107住より出土している。28は4個の輪が繋がる。

鉄鍬 3点出土しすべてを図化した（22・40・52）。文献1の分類に従うと22と52はVIC類、40はVI類に相当する。

不明品 23点出土した。このうち14点を図化した(2・3・11・13・14・18・21・23・24・25・26・27・29・50・55)。形状から板状不明品、棒状不明品、筒状不明品に分かれる。このうち18と29は特徴的である。18は棒状品が板状品を買いており、棒状品の片方の端部は潰されている。棒状品は板状品を止める役割をしていたのだろうか。表装具の一部分か。29は断面方形でU字形を呈する。断面の大きさは身部がほぼ一定なのに対し端部の幅が小さく、先端に向かうにしたがって細くなっていく。

鉄 滓 28点出土した。形状から塊状鉄滓、樹状鉄滓に分かれる。総重量は1439.62g、重量範囲は2.18~163.32g、重量平均は55.37gである。107住(9個。総重量242.97g)と120住(10個。総重量817.11g)で比較的多く出土している。

参考文献

文献1：長野県教育委員会1989『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書3―塩尻市内 その2―古田川西遺跡』

3 石器・石製品

砥石1点(図版26-57)と礫石錘2群が出土している。

砥石は第118号住居址から出土した。粘板岩製で、長さ9.3~10.4cm、幅4.2~4.7cm、厚さ0.9~1.4cmを測る扁平長方形、重量は92gである。前後の両主面と片側面に磨面を有す。また、上下面と両側面に荒削りによる成形痕跡が残る。

礫石錘は第98号住居址と第112号住居址から出土した。いずれも、長楕円体の自然礫が3~4個かたまつて住居床上に遺存していたもので、出土状態から籠編み等に利用した石錘の一部と判断した。第98号住居址出土品は礫3点で、最大長85.2~140.1cm、最大幅40.4~54.6cm、重量80.4~320.0gと大きさにかなり違いがある。第112号住居址出土品は最大長123.1~143.1cm、最大幅34.1~39.4cm、重量122.9~215.4gと規格が揃っている。いずれの群もこの点数では編物には不足で、本来の数の一部であろう。

4 その他の遺物

第110号住居址から漆紙が出土している(図版26-58に平面図を示す。断面図は破損の心配があり作成できなかった)。口径15.1cmを測る土師器杯AⅢの内面ほぼ中心に付着しており、平面形は直径10cmの円形を呈す。全体的に細かい皺がよっており、端部で観察すると複数枚の紙が重なっているようにもみえる。表面の紙と下方の紙では皺のより方が違っている。また、表面の紙には糞いた時の目のような平行線が全面に浮き出ている。当初、平面形態があまりにも円形に整っているため、漆椀か皿の木質部が失われ、漆皮膜のみが土師器杯内に残ったものとも考えたが、漆の溜まった部分に接した紙のみが円形に残ったと解釈し、漆紙として報告する。なお、赤外線カメラ、フィルムによって墨書の存在を調べたが、それらしいものは発見できなかった。杯の内面には、漆紙の周囲にも薄く漆状の黒色物が付着している。

第5表 土器観察表

No	出土地点・注記	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度	成形・脚態・形部の特徴	実測番号	備考
1	98住P1	土	皿A I	(12.8)			L1/10	ロクロナデ	98-1	
2	98住フク土	土	小形壺		(6.6)		底完	内外ロクロナデ、回転余切	98-2	内面炭化物付着
3	98住№1・4・6・7・8・9・カマド	土	卵形	(25.0)			□17/8、底完	内外ハケム(内面下半摩滅)、磨附付	98-3	脚全周
4	99住フク土	土	皿A II	8.6	4.0	2.0	F1/2、底完	ロクロナデ、回転余切	99-3	
5	99住SE	土	皿A II	(9.4)	(4.4)	(2.3)	□1/10、底1/3	ロクロナデ、回転余切	99-13	
6	99住№16	土	杯A II	(9.8)	6.0	1.6	□2/5、底完	ロクロナデ、回転余切	99-4	端部黒変
7	99住SW	土	壺B II	(9.8)	(6.4)	(3.1)	L1/10、底1/5	ロクロナデ、付高台、回転余切	99-14	
8	99住	土	壺B I		(9.2)		高台1/6	付高台	99-15	
9	99住床	土	杯A II?	(14.4)			□1/6	ロクロナデ	99-5	
10	99住№1	土	杯	13.7	6.0	4.5	□3/4、底完	ロクロナデ、付高台、回転余切	99-2	
11	99住№47	土	碗				底完	ロクロナデ 内面ミダギ後黒色処理、回転余切	99-12	黒色A
12	99住№3	土	丸形壺	6.3	4.4	4.4	ほぼ底完	ロクロナデ、回転余切、内外面黒色処理	99-16	黒色B
13	99住№27・34・50・NE	灰	碗	(10.6)	(6.4)	(3.5)	□1/3、底1/2	ロクロナデ、付高台、回転余切	99-9	
14	99住床・NW・検	灰	碗	(11.2)	(8.0)	(3.5)	□1/3、底1/2	ロクロナデ、付高台、回転余切	99-8	転用履?
15	99住№23	灰	碗	(16.0)			L1/3	ロクロナデ	99-7	輪花施
16	99住№19・51・56	灰	碗	(15.2)	(8.0)	(5.6)	□1/3、底1/2	ロクロナデ、付高台、回転余切	99-6	転用履
17	99住№7・24	灰	碗	(17.6)	(7.4)	(5.9)	L1/8、底2/3	ロクロナデ、付高台、回転余切	99-11	転用履
18	99住№39・100住N床・W	白	碗	(17.6)			I1/8	ロクロナデ、見込部磨滅	白99-1	100住と接合
19	99住№36・37・38・43・44・53・NE	土	卵形	(24.0)			□1/4	口縁・脚コナデ、脚部板ナデ、脚内面指頭状残	99 1	
20	100住№5	土	皿A II	9.0	4.6	1.6	□一部欠、底完	ロクロナデ、回転余切	100-3	
21	100住№6	土	杯A II	8.8	5.1	1.2	□完、底完	ロクロナデ、回転余切	100-2	
22	100住№7	土	杯A II	9.0	5.0	1.6	□完、底完	ロクロナデ、回転余切	100-1	
23	100住床	土	碗?		4.6		底完	ロクロナデ	100-4	
24	100住№9	土	小碗		(4.2)		高台1/2、底完	ロクロナデ、付高台、回転余切	100-5	
25	100住フク土	土	皿A?	(16.2)			□1/12	ロクロナデ、内面黒色処理	100-6	黒色A
26	101住№7	土	皿A II	(8.2)	(3.8)	1.7	□1/6、底完	ロクロナデ、回転余切	101-3	
27	101住№6	土	鉢	22.2	10.5	5.8	□1/5、底完	ロクロナデ、回転余切	101-1	内面炭化物
28	101住NW	土	碗	(15.6)			□1/4	ロクロナデ	101-2	
29	101住NW	灰	碗		(7.4)		底1/4	ロクロナデ、付高台、回転余切	101-4	
30	102住フク土	土	杯A II	(9.0)	(4.4)	(1.8)	□1/4、底1/4	ロクロナデ、回転余切	102-4	
31	102住フク土	土	小碗	(9.2)	(5.0)	(2.9)	□1/6、底1/2	ロクロナデ、付高台、回転余切	102-3	
32	102住№12	土	壺B II	10.1	5.2	2.9	□1/2、底完	ロクロナデ、付高台、回転余切	102-2	
33	102住フク土	土	碗		6.1		高台3/4、底完	ロクロナデ、内面敷針状ミダギ、付高台、回転余切、内面黒色処理	102-5	黒色A
34	102住№2	土	碗		6.4		高台3/4、底完	ロクロナデ、内面黒色処理	102-6	黒色A
35	102住№10	土	杯A II	15.0	7.6	4.6	□1/4、底完	ロクロナデ 内面に黒、回転余切	102-1	
36	102住№3	灰	杯A II	(6.8)			底1/4	ロクロナデ、回転余切	102-7	個人
37	102住検	灰	碗		(6.2)		底3/4	ロクロナデ、付高台、底部回転ヘラケズリ	103-2	
38	103住№2	灰	碗	(14.8)			□1/5	ロクロナデ	103-1	軟質
39	106住№1・P2	土	壺B II	9.25	5.95	3.4	□ほぼ底完、底完	ロクロナデ、付高台、回転余切	106-2	
40	106住	土	壺B II?	(10.4)			□1/6	ロクロナデ	106-3	
41	106住検	土	杯A III		(6.2)		底1/4	ロクロナデ、回転余切	106-1	
42	106住NE	土	杯A III	(15.4)	(8.6)	3.8	□1/6、底1/3	ロクロナデ、回転余切	106-4	
43	106住NW	灰	碗	(17.8)			□1/8	ロクロナデ	106-5	
44	104住フク土	土	杯A II	9.1	5.75	2.0	□1/4、底3/4	ロクロナデ、回転余切	104-4	
45	104住フク土	土	杯A II	(10.4)	(7.2)	1.9	□1/8、底1/4	ロクロナデ、回転余切	104-5	
46	104住№2	土	杯A II		5.3		底完	ロクロナデ、回転余切	104-9	
47	104住フク土	土	杯A II	(13.6)	(6.0)	3.2	L1/8、底1/6	ロクロナデ、外周一部ケズリ、回転余切	104-8	
48	104住№2・カマド	土	碗		7.4		底1/2	ロクロナデ、付高台	104-11	
49	104住フク土	土	碗	(13.2)			L1/8、底1/2	ロクロナデ、付高台、回転余切	104 18	高台欠
50	104住SE	土	壺B II?	(10.2)			□1/8	ロクロナデ	104-19	
51	104住№4	土	壺B II	(9.8)	6.2	2.8	L1/4、底完	ロクロナデ、付高台	104-3	
52	104住№7	土	壺B II	9.8	5.45	3.2	□3/4、底完	ロクロナデ、付高台、回転余切	104-2	口唇部にケール付着
53	104住カマド	土	壺B I	(15.8)			□1/8	ロクロナデ	104-16	
54	104住№4・カマド	土	壺B I?	(16.2)			L1/10	ロクロナデ	104 15	
55	104住フク土・カマド	土	壺B I	(15.55)	7.75	5.25	□2/5、底完	ロクロナデ、付高台	104-1	見込部スス付着
56	104住№3・カマド	土	皿?	(17.2)			□1/2	ロクロナデ、内面黒色処理	104-10	黒色A
57	104住ベルト	土	鉢?	(21.6)			□1/16	ロクロナデ、内面黒色処理?	104-17	黒色A?

No	出土地点・注記	類別	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存度	成形・調整・形態の特徴	実測番号	備考
58	104住№3・フク土・ベルト	土	鉢	(28.1)			口1/20、体部1/6	ロクロナデ	104-7	内外黒帯
59	104住	灰	鉢	(14.2)			口1/10	ロクロナデ、内面沈線	104-12	
60	104住№1・カマド	灰	鉢				底1/4	ロクロナデ、付高台	104-14	高台割縁
61	104住NE	灰	鉢		(5.2)		底1/4	ロクロナデ、付高台	104-13	
62	104住№9	灰	鉢		7.6		底1/2	ロクロナデ、付高台、底面回転ケズリ後ナデ	104-6	
63	107住NW	土	皿AII	(8.2)	(4.0)	1.25	口1/4、底1/4	ロクロナデ、回転未切	107-77	
64	107住P10・№1	土	皿AII	(9.6)	(3.4)	1.4	L1/6、底完	ロクロナデ、回転未切	107-21	
65	107住NW	土	皿AII	(8.6)	(4.6)	1.5	口1/4、底1/3	ロクロナデ、回転未切	107-74	
66	107住フク土	土	皿AII	(10.7)	(5.8)	1.6	L1/6、底1/3	ロクロナデ、回転未切	107-76	端部肥厚
67	107住№53	土	皿AII	9.9	5.6	1.5	口3/4、底3/4	ロクロナデ、回転未切	107-10	鋳形込み
68	107住P1・№3・4	土	皿AII	9.65	4.4	1.55	口3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-19	
69	107住№54	土	皿AII	9.7	5.0	1.7	L1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-23	
70	107住NW	土	皿AII	(8.8)	(5.0)	1.6	口1/6、底3/4	ロクロナデ、回転未切	107-33	
71	107住SE	土	皿AII	(8.5)	(3.6)	1.8	口1/3、底完	ロクロナデ、回転未切	107-47	
72	107住P1・№2	土	皿AII	(8.2)	(3.4)	1.5	口1/3、底1/3	ロクロナデ、回転未切	107-20	
73	107住№23	土	皿AII				口2/3、底完	ロクロナデ、回転未切	107-11	
74	107住№5・ベルト	土	皿AII	8.9	3.9	1.8	口1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-51	
75	107住№4	土	皿AII	(7.7)	(3.2)	2.1	口1/2、底1/2	ロクロナデ、回転未切	107-46	
76	107住№63・NE	土	皿AII	8.4	3.8	1.9	口2/3、底完	ロクロナデ、回転未切	107-18	
77	107住№22	土	皿AII	8.8	4.0	2.0	口1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-17	
78	107住№51	土	皿AII	9.0	4.2	2.0	口3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-24	
79	107住SE	土	皿AII	8.6	4.0	2.0	口1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-70	
80	107住№60・ベルト	土	皿AII	8.6	3.8	2.1	口完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-34	
81	107住№80	土	皿AII	(8.6)	(3.8)	1.9	L1/2、底5/6	ロクロナデ、回転未切	107-49	
82	107住№48	土	皿AII	8.5	2.2	2.1	口1/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-48	
83	107住P1・№6	土	皿AII	(9.2)	(4.8)	2.2	口1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-18	
84	107住№5	土	皿AII	9.85	4.2	2.1	口3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-67	内外黒帯
85	107住№65	土	皿AII	(9.4)	(4.0)	2.1	口1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-14	
86	107住№1	土	皿AII	9.6	4.0	2.1	L1/3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-40	
87	107住NW	土	皿AII	(8.2)	(3.4)	2.25	口1/3、底4/5	ロクロナデ、内面沈線状、回転未切	107-41	
88	107住NW	土	杯AII	(8.4)	(4.4)	1.8	L1/6、底1/4	ロクロナデ、回転未切	107-75	
89	107住№78・Wベルト	土	杯AII	9.2	5.5	1.6	口完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-7	
90	107住№46	土	杯AII	9.5	5.2		口ほぼ完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-39	
91	107住№20	土	杯AII	8.5	5.0	1.8	口3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-27	
92	107住№57・ベルト	土	杯AII	(9.6)	(5.6)	1.7	口1/8、底完	ロクロナデ、回転未切	107-50	
93	107住№85	土	杯AII	8.7	5.2	1.6	口2/3、底完	ロクロナデ、回転未切	107-26	
94	107住№82・NE	土	杯AII	8.5	4.8	1.7	口3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-28	
95	107住№73・ベルト	土	杯AII	9.5	5.6	1.75	口1/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-45	
96	107住№69・Wベルト	土	杯AII	9.5	5.5	1.8	口1/3、底ほぼ完	ロクロナデ、回転未切	107-42	
97	107住№26	土	杯AII	9.6	4.8	2.0	口1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-25	
98	107住フク土	土	杯AII	(9.2)	(5.4)	2.0	口1/4、底5/6	ロクロナデ、回転未切	107-72	
99	107住№24	土	杯AII	8.6	4.6	2.0	口完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-43	
100	107住№43	土	杯AII	9.4	4.6	1.8	口完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-44	
101	107住№75・Wベルト	土	杯AII	(10.2)	(5.2)	1.8	口1/6、底完	ロクロナデ、回転未切	107-38	
102	107住№72・Wベルト	土	杯AII	9.3	5.0	2.05	口完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-8	
103	107住№59・ベルト	土	杯AII	(9.4)	(5.0)	2.2	口1/6、底完	ロクロナデ、回転未切	107-37	
104	107住SE	土	杯AII	(9.4)	(5.4)	1.8	口1/4、底1/3	ロクロナデ、回転未切	107-73	
105	107住№89・Wベルト	土	杯AII	(9.6)	(4.6)	2.1	口1/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-30	
106	107住№32	土	杯AII	8.8	5.4	2.3	L1/2/3、底完	ロクロナデ、回転未切	107-13	内面黒帯
107	107住№92・ベルト	土	杯AII	9.3	4.8	2.1	口3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-32	
108	107住№12	土	杯AII	(10.0)	(5.0)	2.1	L1/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-22	
109	107住№74・Wベルト	土	杯AII	(9.8)			口1/4	ロクロナデ、回転未切	107-56	
110	107住№77・Wベルト	土	杯AII	9.0	5.0	2.0	L1/2/3、底完	ロクロナデ、回転未切	107-12	
111	A区107住№83	土	杯AII	10.0	5.4	2.2	口完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-52	
112	107住№81・NE	土	杯AII	9.0	5.2	2.1	口完、底完	ロクロナデ、底部回転未切・一部ハケメ	107-9	
113	107住№89・NW	土	杯AII	10.4	5.5	2.0	口完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-6	
114	107住№45	土	杯AII	9.4	5.5	1.9	口ほぼ完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-35	
115	107住№79・Wベルト	土	杯AII	9.5	5.8	2.1	口1/2、底完	ロクロナデ、回転未切	107-29	
116	107住№58・ベルト	土	杯AII	9.4	5.3	2.5	口ほぼ完、底完	ロクロナデ、回転未切	107-31	
117	107住№91・NW	土	杯AII	9.2	4.8	2.4	口3/4、底完	ロクロナデ、回転未切	107-36	

No	出土地点・注記	種類	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残 存 度	成形・調整・形造の特徴	実測番号	備 考
118	107住SW	土	杯AⅡ	(8.8)	(3.8)	2.1	口1/10、底1/4	ロクナダ、内面ミガキ後黒色処理、回転糸切	107-86	黒色A
119	107住NW	土	杯AⅡ	(8.6)	(3.5)	2.2	口2/3、底1/4	ロクナダ、内面ミガキ後黒色処理、回転糸切	107-82	黒色A、口縁付近 タール付着
120	107住P18	土	杯AⅡ		(6.8)		底1/2	ロクナダ、回転糸切	107-16	
121	107住62・ベルト	土	杯AⅡ		(5.8)		底1/4	ロクナダ、回転糸切	107-55	
122	107住NW	土	杯AⅡ		(6.6)		底3/4	ロクナダ	107-88	内外摩滅
123	107住NW	土	杯?	(13.2)			口1/3	ロクナダ	107-78	
124	107住№3	土	杯AⅢ	(14.0)	(4.8)	4.4	口1/3、底1/5	ロクナダ、回転糸切	107-53	
125	107住№1・2 P15	土	杯AⅢ	12.8	5.6	3.6	口1/2、底完	ロクナダ、回転糸切	107-64	
126	107住№4	土	杯AⅢ	(13.8)	(5.4)	3.3	口1/8、底1/3	ロクナダ、回転糸切	107-54	
127	107住№19	土	杯	(13.6)	6.6	4.7	口1/4、高台2/3	ロクナダ、付高台	107-71	
128	107住№94	土	杯		(6.8)		底2/3	ロクナダ、内面ミガキ後黒色処理、付高台	107-84	黒色A
129	107住№52	土	小碗	(11.0)	(6.2)	3.2	口1/4、底縁ぼろ	ロクナダ、内面に糠、付高台	107-60	
130	107住№38	土	小碗	9.8	5.0	2.6	口完、底完	ロクナダ、付高台、回転糸切	107-59	
131	107住№86・NW	土	小碗	9.6	5.6	3.6	口完、底完	ロクナダ、付高台	107-57	
132	107住№55	土	小碗	(10.0)	(4.6)	2.8	口1/2、底完	ロクナダ、付高台、回転糸切	107-58	
133	107住№74・Wベルト	土	小碗	(10.2)	(6.2)	3.9	口1/3、底完	ロクナダ、付高台、回転糸切	107-62	
134	107住№42	土	小碗	9.3	5.0	3.0	口1/3、底完	ロクナダ、付高台、回転糸切	107-61	
135	107住68・Wベルト	土	盤BⅡ	10.3			口2/3、高台欠、底完	ロクナダ、付高台	107-63	
136	107住№50	土	盤BⅡ		(5.8)		高台1/2	ロクナダ、付高台	107-83	内面黒炭
137	107住NW	土	盤BⅠ?		(7.8)		高台1/3	付高台	107-79	割磨
138	107住№76	土	盤BⅡ		(6.4)		高台2/3	ロクナダ、付高台	107-68	
139	107住67・Wベルト	土	盤BⅡ	(10.6)	(7.6)	4.3	口1/8、底2/3	ロクナダ、付高台	107-69	
140	107住SW	土	皿AⅠ	(15.6)	(4.8)	3.1	口1/8、底1/8	ロクナダ、内面黒色処理、回転糸切	107-85	黒色A
141	107住№88・NW	土	皿AⅠ	16.7	7.8	4.1	口3/4、底完	ロクナダ、回転糸切	107-81	
142	107住№39	土	盤BⅠ	15.8	8.3	5.1	口1/4、高台1/2	ロクナダ、付高台	107-80	
143	107住SW	土	盤A	(20.8)			口2/3	ロクナダ	107-87	高台欠
144	107住№47	土	耳皿		4.7		口1/3、底完	ロクナダ、回転糸切	107-66	
145	107住№28	土	ミニ チュップ	3.9	2.6	2.2	口完、底完	ロクナダ、回転糸切	107-65	
146	107住NE	灰	杯	(9.8)	(4.4)	2.8	口1/4、底1/4	ロクナダ、付高台、底部ナデ	107-1	
147	107住NE・NW	灰	碗	(11.8)			口1/4	ロクナダ	107-3	
148	107住№27	灰	杯		(7.2)		底完	ロクナダ、付高台、底部回転糸切後ナデ	107-4	
149	107住NW	灰	杯	(10.8)	(5.8)	3.8	口1/8、底1/3	ロクナダ、付高台、底部ナデ	107-2	輪花模(単位不明)
150	107住№31	灰	釜		(13.0)		底1/8	ロクナダ、胴下平回転ヘラケズリ、付高台、底部欠度	107-5	
151	107住№56・SW	土	葉		11.7		底3/4	ロクナダ、底ナデ	107-89	内面黒炭、被熱割磨
152	107住№64・66・カ マド・NE	土	羽釜	(28.0)			口1/6	口縁ヨコナデ、(外面工具)ナデ内面ハメ、 口縁取付	107-90	露金周
153	108住	土	皿AⅡ	(8.6)			口1/6	ロクナダ	108-1	
154	109住機	土	杯AⅡ	(16.2)	(6.0)	1.7	口1/7、底1/4	ロクナダ、回転糸切	109-1	
155	109住機	土	杯AⅡ		(6.0)		底1/4	ロクナダ、回転糸切	109-2	
156	111住№1	土	杯		(7.2)		底3/4	ロクナダ、付高台、回転糸切	111-2	
157	111住カマド	土	盤BⅡ	(11.0)	(5.4)	(3.6)	口1/4、底1/3	ロクナダ、付高台	111-1	
158	112住№3	土	盤BⅡ?		(5.0)		底1/3	ロクナダ、付高台、回転糸切	112-3	
159	112住№4	土	杯AⅡ		4.3		底完	ロクナダ、回転糸切	112-2	
160	112住№4・NE	土	杯?		(5.4)		底3/4	ロクナダ、回転糸切	112-1	
161	112住№6・7	土	羽釜	(26.6)			口1/6、胴1/6	口縁ヨコナデ、外側ハメ状工具の横ナデ、 内面横ナデ	112-4	
162	110住	土	皿AⅡ	(9.8)			口1/6	ロクナダ	110-5	
163	110住	土	皿A		(4.4)		底1/5	ロクナダ、回転糸切	110-6	
164	110住SW	土	杯		6.3		底1/2	ロクナダ、付高台、回転糸切	110-1	
165	110住№3	須	杯		(8.2)		底1/4	ロクナダ、付高台、底面回転ヘラケズリ・ 回転糸切	110-4	混入品
166	110住フコ土	灰?	杯		(7.4)		底1/2	ロクナダ、付高台、回転糸切	110-3	粘土類混入
167	110住№2	灰	葉		(9.0)		底1/3	ロクナダ、付高台、回転ヘラケズリ	110-2	
168	113住SW	土	杯AⅡ	(9.2)	(4.0)	(2.0)	口1/3、底1/3	ロクナダ、回転糸切	113-5	
169	113住№5	土	杯AⅡ	10.0	4.5	2.15	口完、底完	ロクナダ、回転糸切	113-7	口唇タール付着
170	113住№1	土	杯AⅡ	9.8	4.9	2.3	口ほぼ底完、底完	ロクナダ、回転糸切	113-8	口唇タール付着
171	113住№2	土	杯AⅡ	9.4	5.1	2.1	口完、底完	ロクナダ、回転糸切	113-6	口唇タール付着
172	113住№14	土	杯AⅡ	10.2	4.3	2.1	口1/4、底完	ロクナダ、回転糸切	113-4	
173	113住№4	土	盤BⅡ?	9.0			口7/8、高台欠、底完	ロクナダ、回転糸切	113-3	高台欠
174	113住ベルト	土	皿A	(20.6)			口1/8	ロクナダ	113-13	
175	113住NE	土	杯	(12.0)			口1/6	ロクナダ	113-12	

No	出土地点・注記	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	残存度	成形・調整・形態の特徴	実測番号	備考
176	113住ベルト	土	杯AⅢ	(18.0)			□1/6	ロクロナデ	113-9	
177	113住SEW	土	杯AⅢ	(13.2)	(7.0)	(3.8)	□1/6、底1/4	ロクロナデ、回転糸切	113-15	
178	113住フク土	土	杯?	(15.6)			□1/6	ロクロナデ	113-10	
179	113住フク土	土	盤?	(14.4)			□1/6	ロクロナデ	113-11	
180	113住№3	土	杯AⅢ	14.2	7.3	3.9	□1/2、底4/5	ロクロナデ、回転糸切	113-2	端部にスス付着
181	113住ベルト	土	杯AⅢ	(15.2)	(6.6)	(4.0)	□1/12、底1/2	ロクロナデ、回転糸切	113-14	
182	113住№6・7・8・9・10・11・19・ベルト・SE	土	羽釜	(28.0)	(12.4)		□1/8、底4/5	口縁コナナデ、内外細工ナゲ、下部ケズリ、底磨ナデ	113-1	舞4単位
183	113住ベルト	灰	筒		(6.9)		高台1/9	ロクロナデ、付高台	113-17	
184	113住№18	灰	筒	(17.2)			□1/16	ロクロナデ	113-16	
185	115住№3	土	杯AⅡ	(8.6)	(4.0)	1.5	□1/4、底1/3	ロクロナデ、回転糸切	115-4	
186	115住№12	土	杯AⅡ	9.4	4.6	2.2	□3/4、底完	ロクロナデ、回転糸切	115-2	
187	115住カマド	土	杯AⅡ	(9.8)	(4.0)	2.1	□1/4、底完	ロクロナデ、回転糸切	115-1	
188	115住№12	土	杯AⅡ	9.7	5.0	2.1	□1/2、底完	ロクロナデ、回転糸切	115-7	
189	115住№9	土	盤BⅡ	(11.0)	(5.0)	2.8	□1/2、高台1/2	ロクロナデ、付高台、回転糸切	115-5	
190	115住№7	土	筒	(14.8)	(6.0)	4.2	□1/8、高台1/2	ロクロナデ、付高台、回転糸切	115-6	
191	115住№4	土	杯AⅢ	(15.4)	(6.8)	3.3	□1/4、底1/2	ロクロナデ、底部回転糸切後ハケメ	115-3	
192	115住№5	灰	筒	14.7	7.0	3.5	□完、底完	ロクロナデ、付高台、回転糸切	115-9	
193	115住№8	灰	筒	16.0	7.4	5.7	□3/5、底完	ロクロナデ、付高台、回転糸切	115-8	輪花紋、輪花5単位
194	B区116住	白	筒	(14.4)			□1/8	ロクロナデ	白116-2	
195	116住№4	白	筒	(16.8)			□1/10	ロクロナデ、体部外周回転ケズリ	白116-1	
196	117住№18・38	須	蓋				胴部1/6	胴部ロクロナデ、胴部タタキメ、内面削り肌	117-20	内面被蝕で割棄
197	117住№2	土	杯AⅡ	(9.4)	(5.2)	(1.4)	□1/3、底1/3	ロクロナデ、回転糸切	117-8	
198	117住№34	土	杯AⅡ	10.2	4.9	1.7	□完、底完	ロクロナデ、回転糸切	117-11	
199	117住№40	土	杯AⅡ	9.3	5.0	1.85	□完、底完	ロクロナデ、回転糸切	117-13	
200	117住№43	土	杯AⅡ	9.4	4.5	2.3	□1/3、底1/2	ロクロナデ、回転糸切	117-9	
201	117住№1	土	杯AⅡ	(8.9)	4.0	2.7	□1/6、底完	ロクロナデ、回転糸切	117-10	
202	117住№26	土	杯AⅡ	9.9	5.1	2.6	□5/8、底完	ロクロナデ、回転糸切	117-12	
203	117住№5	土	杯AⅢ	13.0	6.2	3.8	□1/2、底7/8	ロクロナデ、回転糸切	117-6	
204	117住№4	土	筒	14.8	6.8	5.5	□1/2、底完	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理、付高台、回転糸切	117-7	黒色A
205	117住№11	土	盤BⅡ	(10.0)	(5.2)	(2.7)	□1/2、底完	ロクロナデ、付高台、回転糸切	117-4	
206	117住№35	土	盤BⅡ	(9.8)	(5.2)	(3.1)	□1/5、高台1/4、底完	ロクロナデ、付高台、回転糸切	117-2	
207	117住№7	灰	底皿	10.8	6.2	1.65	□完、底完	ロクロナデ、付高台、底磨回転ヘラケズリ	117-16	
208	117住№29	灰	筒	(11.2)	(6.8)	(2.6)	□1/8、底完	ロクロナデ、付高台、底部回転ケズリ	117-14	底面曇り?
209	117住№24・33・36	灰	底皿	13.8	8.3	2.4	□ほぼ完、底ほぼ完	ロクロナデ高輪ケズリ、付高台、胴部回転ケズリ	117-17	
210	101住ベルト・102住NW・117住№13・20	灰	筒	14.8	7.2	5.8	□1/2、底1/2	ロクロナデ、付高台、底部回転ヘラケズリ	117-18	101・102住と接合
211	101住№10、117住№31	灰	筒	(14.8)	(7.8)	(6.0)	□1/4、底完	ロクロナデ、付高台、底部回転ヘラケズリ	117-19	101住と接合
212	117住№23	灰	筒	(15.0)			□1/12、底1/4	ロクロナデ、回転糸切	117-15	高台割棄
213	117住NW	土	耳皿	(8.8)			□1/4	ロクロナデ	117-5	高台割棄
214	117住№19・SE・ベルト	土	羽釜	(16.0)			□1/10、脚1/4	口縁コナナデ、胴部ナゲ、内面平ハケメ下平ナゲ	117-1	舞全周
215	117住№25・NE・SE	土	羽釜	(27.6)			□1/6	口縁コナナデ、外面細ハケメ、内面細ハケメ	117-3	舞全周
216	117住№1・15・21・22・41、101住SE・102住NW	土	羽釜	23.2			□2/3、底2/3	口縁コナナデ、外面細ハケメ、内面細ハケメ・板状工具ナゲ・底部ケズリ	117-21	胴部と底縁曇りなし 101・102住と接合
217	118住№20	土	杯AⅡ	(9.4)	(5.2)	1.6	□1/5、底ほぼ完	ロクロナデ、回転糸切	118-4	
218	118住№21	土	杯AⅡ	9.1	5.0	2.0	□3/4、底完	ロクロナデ、回転糸切	118-5	
219	118住№6	土	杯AⅡ	9.4	5.0	2.1	□3/4、底完	ロクロナデ、回転糸切	118-6	
220	118住№19	土	盤BⅡ	(9.4)	(5.6)	3.6	□1/4、高台1/2	ロクロナデ、付高台、回転糸切	118-7	
221	118住№17	土	盤B		5.8		底完	ロクロナデ、付高台	118-9	
222	118住№2	土	小瓶				□1/3、底5/6	ロクロナデ、付高台、回転糸切	118-8	
223	118住№7	灰	筒		(6.8)		高台ほぼ完	ロクロナデ、付高台、回転糸切	118-3	
224	118住№2	土	鉢	(27.4)	(16.0)	8.1	□1/4、底2/3	ナゲ指押上、体部下ヘラケズリ、底部木炭灰	118-10	外周面ヘラケ、歪み
225	119住№1	土	筒		(7.8)		高台1/3	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理、付高台、回転糸切	119-2	黒色A 摩滅
226	119住フク土	灰	筒	(15.0)			□1/8	ロクロナデ	119-1	
227	120住№4	土	杯AⅡ	9.7	5.4	1.7	□5/6、底完	ロクロナデ、回転糸切	120-4	
228	120住№13	土	杯AⅡ	(8.6)	(4.0)	2.0	□1/6、底1/2	ロクロナデ、回転糸切	120-5	
229	120住№1	土	盤BⅡ	(10.0)	(6.2)	3.15	□1/10、底完	ロクロナデ、付高台、回転糸切	120-3	
230	120住№14	灰	筒		(6.8)		底完	ロクロナデ、付高台	120-1	
231	120住№3	土	筒	(14.8)			□1/20、底2/3	ロクロナデ、底部ナゲ	120-2	高台欠損

No.	出土地点・注記	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度	成形・調整・形部の特徴	実測番号	備考
232	建8 P618	白	蓋?		7.3		底完	ロクナダ、高台ケズリ出し	白磁8-1	
233	P578	土	皿AII?	(10.2)			口1/4	ロクナダ	建10-1	
234	P582No1	土	皿A1	(15.6)	(6.0)	3.0	口1/6、底1/4	ロクナダ、回転糸切	建10-3	
235	PS82・ピット群2	灰	碗	(14.8)			口1/12	ロクナダ	建10-2	
236	彫No1・2	土	羽釜?	(25.0)			口1/8	外置窯の工具ナダ、内裏焼の工具ナダ、口縁内面指環状痕	彫2-1	内外異化物多量付着
237	B区土坑65	土	皿AII	(10.0)			口1/4	ロクナダ	土65-2	
238	B区土坑65	須	長頸壺		(4.4)		削完、高台1/2	ロクナダ、胴部以下回転ヘラケズリ、付高台、底部厚縁	土65-1	
239	B区土坑土層No1	白	皿	(10.0)			口1/8	ロクナダ、外面下半回転ケズリ、見込厚縁	白土53-1	
240	土坑70	白	碗	(11.7)			口1/12	ロクナダ、体形外向回転ケズリ	白土70-1	
241	P616	土	皿?		(3.8)		底完	ロクナダ、回転糸切	P616-1	
242	PS09	土	杯AIII	(14.6)	(6.8)		口1/12、底2/3	ロクナダ、回転糸切	PS09-1	
243	ピット群1校	灰	碗		(7.0)		底完	ロクナダ、付高台、回転糸切	ピット群1	山茶碗?、高台正広使用
244	溝11No2・フナ土	灰	碗				底1/4	ロクナダ、付高台、底部回転ヘラケズリ	溝11-1	高台破損後新研内使用
245	溝15No1	土	小壺	(10.6)			口1/10、高台欠、底完	ロクナダ、回転糸切	溝15-1	
246	溝13No4	土	小壺	(12.4)			口縁内外コナダ	溝20-1	溝20-1	古墳中期
247	溝13No9・14	土	杯	(13.3)	(6.3)	3.95	口1/6、底完	ロクナダ、内面削かみミガキ後黒色処理、底部手持ちケズリ	溝13-1	黒色A
248	溝13No10	土	杯	12.5	6.0	4.1	口完、底完	ロクナダ、内面ミガキ後黒色処理、回転糸切	溝13-6	黒色A、黒青
249	溝13No15・16	土	杯	13.0	6.2	3.75	口完、底完	ロクナダ、内面ミガキ後黒色処理、回転糸切	溝13-4	黒色A
250	溝13No15	土	碗	(12.5)	(6.9)	3.1	口1/12、底縁縁完	ロクナダ、付高台、底部厚縁	溝13-2	
251	溝13No7	須	杯	13.8	5.6	3.85	口1/2、底完	ロクナダ、回転糸切	溝13-3	軟質黄褐色
252	溝13No11	須	杯	(13.8)	(8.4)	5.85	口1/4、底1/4	ロクナダ、付高台	溝13-8	
253	溝13No2	須	壺	(21.6)			口2/5	口縁コナダ、胴部外面縦ハケメ、胴部タケキ、内面ナダ	溝13-9	
254	溝13No12	須	長頸壺		(7.6)		肩1/3、底1/2	ロクナダ、外面下半部回転ヘラケズリ、付高台、回転糸切	溝13-7	
255	B区検出面	土	杯		(5.2)		底3/4	ロクナダ、回転糸切	検-1	
256	A区検出面	土	杯AIII	(14.2)	(6.2)	4.8	口1/20、底完	ロクナダ、回転糸切	A検-5	
257	A区検出面	灰	皿	(12.6)			口1/8	ロクナダ	A検-2	
258	A区検出面	灰	碗	(14.2)			口1/8	ロクナダ	A検-1	
259	A区検出面	灰	碗		(6.0)		底1/4	ロクナダ、付高台、回転糸切	A検-3	
260	検出面	白	碗	(11.2)			口1/12	ロクナダ、体部下半部回転ヘラケズリ	白検-1	
261	検出面	白	碗	(12.2)			口1/12	ロクナダ	白検-2	
262	A区検出面	灰	碗		(7.0)		底1/3	ロクナダ、付高台、回転糸切	A検-4	
263	B区トレンチSE	灰	碗	(13.2)			口1/12	ロクナダ	トレンチ1	

第6表 白磁一覧表

No.	図No.	出土地点	器種	器高	片数	部位等	備考	注記
1	不	97住	碗		1	体部上半小片		97住No2白磁
2	不	97住	碗		1	体部下半小片		97住No4
3	不	99住	碗?		1	体部上半小片		99住No10
4		99住			1	口縁	玉縁。被熱。No6と接合	99住No39
5	18	100住			5	口縁・体部	玉縁。見込厚縁。被熱。4片接合	100住
6		100住			2	体部下半	被熱。2片接合。No4と接合。No5と同一体	100住N
7		100住			2	口縁	玉縁。被熱。No5と接合	100住W
8	不	107住	碗	V類?	1	口縁部小片	強く片外。	107住No37
9	不	112住	碗?		1	体部下半小片	内面厚縁	112住フナ土
10	194	116住	碗	II型	2	口縁	玉縁。2片接合	116住
11	195	116住	碗	V類?	1	口縁	端反。	116住No4
12	不	B区南東隅トレンチ	碗?		1	体部上部小片		B区南東隅トレンチ
13	232	建8 P618	瓶類		1	底部完存	削り出し高台。底面露胎	建8P618白磁
14	260	B区検出面	碗?	V類?	1	口縁		B検
15	261	A区検出面	碗	IV類	1	口縁	玉縁	A検
16	不	A区検出面	碗		1	体部下部小片	わずかに内面厚縁	A検
17	不	B区検出面	瓶類		1	胴部破片	内面厚縁	B検
18	239	土53	皿		1	口縁	見込削り出し厚縁	土53土層No1
19	240	土70	碗	V類?	1	口縁部小片	端反、内面欠	土70
20	不	ピット群1	碗?		1	体部上部小片		ピット群1 No17

第7表 鉄器・鉄製品観察表

掲載 No	鉄器 No	器 種	出土地点	重 量 (g)	形状・形態、残存状況及び計測値 (mm)
1	1	刀 子	97住	91.56	2個体が接着もしくは1個体。
2	2	板状不明品	97住	15.31	
	3	?	97住	5.28	
	4	?	97住	1.86	
	5	?	97住	0.73	
3	6	板状不明品	97住	8.93	
4	8	鎌	99住	37.58	折れ曲がる。基部端欠損。
5	7	鎌	99住	15	折れ曲がる。基部端欠損。
6	11	鎌	99住	21.93	基部端欠損。
7	10	平引鉄	99住	21.37	完形品。木質残存。
8	9	平引鉄	99住	3.28	平引鉄の端部。片側欠損。
9	16	紡錘車	99住	15.03	輪部。中央部に軸孔。径50mm、軸孔5mm、厚さ3mm
10	12	釘	99住	7.56	異部欠損。
	14	棒状不明品	99住	1.62	釘脚部か？
11	15	棒状不明品	99住	26.41	断面方形。一端に特徴。
12	13	鉄 錐	99住	9.3	完形品。頭部に穿孔。
13	22	板状不明品	100住	2.79	木質部残存か？
14	21	板状不明品	100住	3.9	
15	18	刀 子	100住	13.99	基部端欠損。同間、2個。
16	19	刀 子	100住	36.76	基部端欠損。検閲。
17	17	平引鉄	100住	21.3	完形品。一端に木質残存。
18	20	不明品	100住	5.29	棒状製品の中央に断面円形の棒状製品が打ち込んである。棒状製品の端部は止めてある。
	23	釘	100住	0.85	
	24	鉄 滓	100住	20.57	塊状。
19	25	釘	101住	9.2	脚部欠損。断面円形。断面径8mm
26	鉄 滓	101住	135.9	塊状。気泡少。小石付着。	
27	棒状不明品	101住	1.56	断面円形。紡錘車軸部分か？	
20	28	刀 子	102住	5.62	身部端、基部端欠損。
	29	板状不明品	102住	0.62	
	30	板状不明品	102住	0.5	
	31	板状不明品	102住	0.48	
	32	鉄 滓	102住	21.46	塊状。
21	33	釘	104住	1.6	先端が丸く折り返されている。
22	34	鉄 鍔	104住	9.39	鍔部。基部欠損。VII類。
	35		107住		(欠番)
23	70	棒状不明品	107住	1.32	断面方形。釘の脚部か？曲がる。
24	71	棒状不明品	107住	4.04	リング状。断面方形。
25	73	棒状不明品	107住	9.01	断面方形。横か？
26	36	板状不明品	107住	2.19	やや湾曲する。
27	80	棒状不明品	107住	4.68	
	41	釘	107住	1.31	頭部欠。
28	81	鍔	107住	8.37	リング4個繋がる。断面円形。
	43	釘	107住		頭部欠。
	44	釘	107住	1.31	頭部。
	45	釘	107住		頭部。扁平。甲き漬したか？
29	37	棒状不明品	107住	18.18	端部欠損。U字形。
30	39	釘	107住	4.35	完形品。
	48	釘	107住	1.97	頭部欠。
	49	釘	107住	1.85	頭部欠。
31	46	釘	107住	5.22	脚部欠。
	51	釘	107住	3.79	頭部欠。
	52	鍔	107住	2.71	リング2個繋がる。
32	40	釘	107住	3.42	完形品。
33	47	釘	107住	5.78	完形品。やや曲がる。
	55	鉄 滓	107住	25.06	塊状。気泡少。
	56	鉄 滓	107住	71.25	塊状。気泡多。
	57	鉄 滓	107住	9.2	塊状。
	58	鉄 滓	107住	26.35	塊状。灰色を呈する。気泡多。
	59	鉄 滓	107住	5.62	塊状。
	60	鉄 滓	107住	16.85	塊状。気泡少。

掲載 No	鉄器 No	器 種	出土地点	重 量 (g)	形状・形態、残存状況及び計測値 (mm)
	61	鉄 滓	107住	81.25	塊状。気泡少。
	62	鉄 滓	107住	5.21	
	63	鉄 滓	107住	2.18	塊状。亀裂多。小石付着。
34	50	釘	107住	4.45	頭部欠損。
35	42	釘	107住	7.26	完形品。
	66	刀 子	107住	1.42	茎部欠損。
36	54	鉄 鐔	107住	20.48	片側欠損。鉄鐔？内部に棒状品付着(舌か?)。
37	64	鉄 鐔	107住	8.73	完形品。
	69		107住		(欠番)
38	65	鉄 鐔	107住	13.11	完形品。
39	77	紡 車	107住	11.68	輪部。中央部に軸部僅かに残存。径43mm、軸孔7mm、厚さ(中心部)5mm
40	72	鉄 鏃	107住	12.76	身部端欠損。V1類か？
41	68	刀 子	107住	2.14	茎部欠。
	74	釘	107住	2.76	断面円形。脚部欠。
	75	棒状不明品	107住		扁平。刀子か？
	76	釘	107住	3.51	釘頭部？ 断面円形。
42	67	刀 子	107住	7.71	茎部端欠損。刃側に開。
	78	釘	107住	3.54	脚部欠。
	79	釘	107住	2.23	
43	53	刀 子	107住	111.61	両側。茎部欠損。
44	38	鏃	107住	42.23	ほぼ完形品。着柄部端欠損。IX類か？
45	116	釘	溝11	6.72	脚部端欠損。曲がる。
46	119	鉄 鐔	溝11	2.84	片側欠損。
47	120	守 引 鉄	溝13	3.88	片側欠損。
48	82	釘	110住	6.05	両端欠損。
	83	鉄 滓	110住	9.47	
49	84	鏃	112住	80.76	完形品。着柄部折り返しが通常と逆向き。VII類。
50	85	板状不明品	116住	14.07	やや円曲する。
51	86	刀 子	116住	2.69	刃形のみ残存。
52	87	鉄 鏃	117住	17.48	茎部曲がる。茎部先端欠損。VII類。
	88	釘	117住	0.75	
	89	釘	117住	1.34	
	90	釘	117住	1.59	頭部欠。
	91	鉄 滓	117住	6.64	塊状。
53	92	刀 子	118住	35.42	完形品。
	93	刀 子	118住	1.78	
	94		120住		(欠番)
	95		120住		(欠番)
	96	鉄 滓	120住	75.15	塊状。
	97	鉄 滓	120住	155.07	塊状。
	98	鉄 滓	120住	163.32	塊状。
	99	鏃	120住	36.36	折り曲げられている。刃部先端欠損。VII類。
54	101	棒状不明品	120住	7.09	曲がる。断面円形。
56	100	刀 子	120住	5.27	刃部端、茎部端欠損。刃側に開。
	102	棒状不明品	120住	3.81	
	103	不明品	120住	8.88	
	104	鉄 滓	120住	77.68	塊状。
	105	鉄 滓	120住	125.65	塊状。
	106	鉄 滓	120住	56.89	塊状。
	107	鉄 滓	120住	28	塊状。
	108	鉄 滓	120住	44.25	塊状。
	109	鉄 滓	120住	66.08	塊状。
	110	鉄 滓	120住	25.02	塊状。
	111	釘	A区検出面	1.55	
	112	鉄 滓	A区検出面	8.57	
	113	不明品	B区東南隅	7.31	現代のものか？
	115	鉄 滓	P578	107.35	桶形。気泡少。
	117	釘	溝11	5.1	
	118	釘	溝11	2.27	
	121	棒状不明品	溝13	1.5	
	122	鉄 滓	P591	35.98	塊状。
	123	鉄 滓	A区NEトレ	51.65	塊状。

IV章 自然遺物分析

I節 炭化材・炭化物の樹種について

森 義直

1 炭化材・炭化物の樹種

平田本郷遺跡第3次調査で出土し、73点の取り上げ番号でまとめられている数百点の炭化材、炭化物及び灰混じりの焼土について、実体顕微鏡を用いての表面及び断面の検鏡観察を行った。

結果は第8表に示すとおりだが、サンプルのほとんどは焼失家屋の第99号住居址から出土している。この結果をまとめてみると、95%以上がコナラ材であり、その他の材は残りの数%である。落葉広葉樹では多い順に、ケヤキ、カエデ、ニレ、クリなどであり、針葉樹ではモミ材とみられるものが1種類のみである。

樹種はあまりにもコナラに片寄っているが、これらが即当時の植生を表すものとは言えず、なんらかの理由によりコナラ材を選択使用しているとみられる。しかし、これだけコナラ材が多く、また第107号住居址やピット群1などからは炭窯で焼いたコナラ材の堅炭が数個出土していることなどから、近くの山林にコナラ材が存在していたことを物語る。

松本盆地は、11世紀になればアカマツが広く分布し、スギやヒノキもみられる。水田化の進行と共にハンノキ、ヤナギなども多くなり、住居周辺からは、クリ、クルミなどが出土する。また、モモ、ウメなどの炭化材や実などが出土することもある。第99号住居址の炭化材はコナラ材が多く、まだ多分に弥生的な樹種構成ではあるが、部材の使用に際しては選択使用も有り得ることを考慮しなければならない。

2 平田本郷遺跡第99号住居址の炭化材について

コナラ材を主とする炭化材の多くは、炭化一步手前のものが多く、手を触れるだけで粉々になるものもあり、組織が判然としないものもみられた。不思議なことに丸太材の中が空洞となって焼土が詰まり、周りのみ炭として残っているものもいくつか存在し、なかには中心部分が一部ザクザクした状態でまだ残っているものもある。

以上のことから、これらコナラ材の多くは、焼ける前に既に丸太材の内部は白蟻などの害をうけて空洞化していたと推定される。なかには虫孔とみられるものが存在する炭化材もみられる。

もし、これら第99号住居址の炭化材が、家屋の構造材や部材ならば、焼失家屋ではなく、長いこと廃屋になっていたものを、故意に焼却した家屋とみなければならない。したがって、大量の灰混じり焼土の中に穀類などの炭化物が見当たらないことも肯定できる。

第8表 炭化材・炭化物樹種等一覧

No	サンプル名、注記	樹種等	備 考
1	平田本郷 IIIA 99住 炭 №1 980219	コナラ片	焼失前に材は空洞化していた?
2	平田本郷 IIIA 99住 炭 №3 980219	コナラ材	
3	平田本郷 IIIA 99住 炭 №4 980219	カエデ材	
4	平田本郷 IIIA 99住 炭 №4 980302	カエデとコナラ材	
5	平田本郷 IIIA 99住 炭 №5 980219	コナラ材	腐材の炭化物 炭化前に空洞化
6	平田本郷 IIIA 99住 炭 №6 980219	コナラ?	炭化ひどい
7	平田本郷 IIIA 99住 炭 №7 980219	コナラとカエデ?	微小 炭化のため困難
8	平田本郷 IIIA 99住 炭 №8 980219	コナラ炭片のみ	
9	平田本郷 IIIA 99住 炭 №10 980219	コナラ材	炭化が進みコナラののみ検出、灰中に遺物なし
10	平田本郷 IIIA 99住 炭 №10 980302	コナラ材	焼失前に空洞化
11	平田本郷 IIIA 99住 炭 №11 980219	コナラ材	
12	平田本郷 IIIA 99住 炭 №12 980219	コナラ材	

No.	サンプル名、注記	樹種等	備考
13	平田本郷 IIIA 99住 炭 №13	980219 コナラ材	コナラ炭片のみ 灰中に他の遺物見あたらず
14	平田本郷 IIIA 99住 炭 №14	980219 コナラ材	焼ける前に空洞化。白蟻の害とみられる。
15	平田本郷 IIIA 99住 炭 №15	980219 コナラ材	
16	平田本郷 IIIA 99住 炭 №17	980219 コナラ材	炭化前に腐材
17	平田本郷 IIIA 99住 炭 №18	980219 すべてコナラ材	
18	平田本郷 IIIA 99住 炭 №19	980219 すべてコナラ材	灰中に遺物なし
19	平田本郷 IIIA 99住 炭 №20	980219 コナラ材	
20	平田本郷 IIIA 99住 炭 №21	980219 すべてコナラ材	
21	平田本郷 IIIA 99住 炭 №22	980219 コナラ材とその樹皮	
22	平田本郷 IIIA 99住 炭 №23	980219 コナラ材	炭化している (少ない方の炭)
23	平田本郷 IIIA 99住 炭 №23	980219 コナラ材	焼ける前に空洞状となっていた。(白蟻の巣?)
24	平田本郷 IIIA 99住 炭 №24	980219 コナラ材	焼ける前に既に空洞となっていたとみられる。(白蟻か)
25	平田本郷 IIIA 99住 炭 №25	980219 コナラ材	
26	平田本郷 IIIA 99住 炭 №26	980219 コナラ材	炭化激しい。クリの可能性もあり
27	平田本郷 IIIA 99住 炭 №27	980219 ニレ材	
28	平田本郷 IIIA 99住 炭 №28	980219 ニレ、クヌギ	
29	平田本郷 IIIA 99住 炭 №29	980219 すべてコナラ材	
30	平田本郷 IIIA 99住 炭 №30	980219 コナラ材?	炭化のため不明
31	平田本郷 IIIA 99住 炭 №31	980219 コナラ材	空洞化している。白蟻か?
32	平田本郷 IIIA 99住 炭 №32	980219 すべてコナラ材	
33	平田本郷 IIIA 99住 炭 №33	980219 コナラ材	炭化がひどい
34	平田本郷 IIIA 99住 炭 №34	980219 コナラ材	他になし
35	平田本郷 IIIA 99住 炭 №35	980219 コナラ材	
36	平田本郷 IIIA 99住 炭 №37	980219 すべてコナラ材	
37	平田本郷 IIIA 99住 炭 №38	980219 すべてコナラ材	
38	平田本郷 IIIA 99住 炭 №39	980219 コナラ材、	コナラ樹皮
39	平田本郷 IIIA 99住 炭 №40	980219 コナラ炭片	炭化ひどい
40	平田本郷 IIIA 99住 炭 №41	980219 コナラ材	
41	平田本郷 IIIA 99住 炭 №42	980219 コナラ材	炭化激しい
42	平田本郷 IIIA 99住 炭 №43	980219 コナラ材	
43	平田本郷 IIIA 99住 炭 №44	980219 すべてコナラ材	
44	平田本郷 IIIA 99住 炭 №45	980219 コナラ材	
45	平田本郷 IIIA 99住 炭 №46	980219 モミ材	
46	平田本郷 IIIA 99住 炭 №47	980219 モミ材	
47	平田本郷 IIIA 99住 炭 №48	980219 モミ材	
48	平田本郷 IIIA 99住 炭 №49	980219 すべてコナラ材	
49	平田本郷 IIIA 99住 炭 №50	980219 すべてコナラ材	
50	平田本郷 IIIA 99住 炭 №52	980219 コナラ材	
51	平田本郷 IIIA 99住 炭 №54	980219 クリ材	
52	平田本郷 IIIA 99住 炭 №55	980219 コナラ材	
53	平田本郷 IIIA 99住 炭 №56	980219 ケヤキ材	
54	平田本郷 IIIA 99住 炭 №57	980219 ケヤキ材	
55	平田本郷 IIIA 99住 炭 №58	980219 コナラ材	
56	平田本郷 IIIA 99住 炭 №59	980219 コナラ材	
57	平田本郷 IIIA 99住 炭 №60	980302 すべてコナラ材	
58	平田本郷 IIIA 99住 炭 №62	980302 コナラ材?	炭化前に腐っている
59	平田本郷 IIIA 99住 炭 №64	980302 すべてコナラ材	
60	平田本郷 IIIA 99住 炭 №65	980302 コナラ材	
61	平田本郷 IIIA 99住 炭 №66	980302 コナラ材	
62	平田本郷 IIIA 99住 炭 №67	980302 コナラ材	
63	平田本郷 IIIA 99住 炭 №69	980302 樹皮の炭化物	樹皮不明
64	平田本郷 IIIA 99住	980224 コナラ材	
65	平田本郷 IIIA 99住	980225 コナラ材	
66	平田本郷 IIIA 107住NE	980224 コナラ材	堅炭として焼いたもの
67	平田本郷 IIIA 107住SE	980216 コナラとその樹皮	
68	平田本郷 IIIA 107住NW	980218 コナラ材	堅炭として焼いたもの
69	平田本郷 IIIA 107住フク上	980217 コナラ材	堅炭として焼いたもの
70	平田本郷 IIIA 112住	980213 コナラ材	
71	平田本郷 IIIA ビット群1 P344	980224 コナラ材	
72	平田本郷 IIIB 116住	980227 炭化米サンプル	稻の状態
73	平田本郷 IIIB 116住	980227 炭化米サンプル	稻の状態

II節 平田本郷遺跡の住居址の年代と住居構築材の樹種について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平田本郷遺跡は、奈良井川右岸の沖積低地に立地する、平安時代（10世紀後半～11世紀後半）の集落である。竪穴住居址をはじめとして、掘立柱建物址、土坑、溝などが、発掘調査によって検出されている。そのうち、A地区の99号住居址では多量の炭化材が検出され、いわゆる焼失住居と考えられている。ただし、炭化材の中には、芯の部分に土が詰まった状態で検出されたものがあるため、害虫などを受けた後に一括焼却された可能性もあると考えられている。

今回の自然科学分析調査では、この遺構の年代に関する情報を得るために、炭化材の放射性炭素年代測定を行う。また、用材について情報を得るために、炭化材の樹種同定を行う。

1 試料

試料は、99号住居址から検出されたⅢA 99住 炭Na50、ⅢA 99住 炭Na23の2点の炭化材である。

2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定研究室の協力を得た。なお、年代値の算出には、¹⁴Cの半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用している。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

測定結果を第9表に示す。試料番号1は古墳時代後期（7世紀）、試料番号2は平安時代初頭頃（9世紀）にあたる。

第9表 放射性炭素年代測定結果

試料名	資料	樹種	年代値 (1950年よりの年数)	Code No.
ⅢA 99住 Na50	炭化材	クヌギ節	1340±50y. B. P (A.D. 610)	GaK-20069
ⅢA 99住 Na23	炭化材	クヌギ節	1110±40y. B. P (A.D. 840)	GaK-20070

(2) 樹種同定

炭化材は、2点ともコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴などを、以下に記す。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) **ブナ科** 環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

4 考察

今回の放射性炭素年代測定結果から、住居構築材には7~9世紀のものが使用されていることになる。この年代は、出土遺物などから想定されている住居の年代と、概ね整合する。年代がやや古いのは、材の樹齢や古材の再利用などが原因（東村，1990）として考えられる。材の放射性炭素年代は、その樹木が切り倒された年代ではなく、測定した材の組織が形成された年代を示すからである。

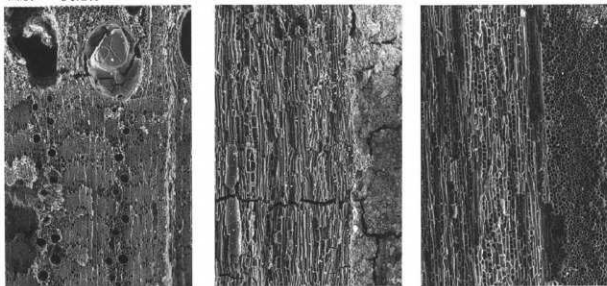
炭化材は、床面直上よりもやや浮いた状態で出土している。99号住居址では、このほかに住居址の北側を中心に、大量の炭化材が出土している。その出土状況を見ると、炭化材の軸方向は、多くの場合住居の縁辺部から中央に向かっている。また、炭化材の中には、表面のみ炭化し、内部に土壌が詰まっているものがあるが、これは炭化が充分でなかったために、内部の生木の部分が埋積後に土壌化したものと考えられる。以上の状況を考慮すれば、出土した炭化材は、住居の火災時に炭化した住居構築材の一部と考えられる。特に、軸方向が住居縁辺部から中央に向かっている炭化材は、垂木に由来すると考えられる。

確認されたクスギ節は、関東地方、山梨県、長野県佐久盆地周辺地域等で行われた住居構築材の樹種同定（千野，1991；高橋・植木，1994；パリオ・サーヴェイ株式会社，1989a，1989b，1991，1994a，1994b）で、最も多く確認されている種類の一つである。住居構築材の用材には、周辺地域の植生が大きく影響すると考えられている（高橋・植木，1994）。これまでの結果を考慮すれば、クスギ節が入手可能な場合は、強度等の面からも選択していたことがうかがえる。今回の結果についても、当時周辺地域でクスギ節の木材が入手可能であり、住居構築材として選択していたことが推定される。今後本住居址の他の炭化材についても樹種同定を行い、種類構成などについても明らかにし、当時の用材についてさらに検討したい。

引用文献

- 千野祐造（1983）縄文時代のクリと栗属周辺植生—南関東地方を中心に—。東京都埋蔵文化財センター研究論集，II，p.25-42。
 千野祐造（1991）縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺物からの検討—。東京都埋蔵文化財センター研究論集，X，p.215-249。
 東村武信（1990）改訂 考古学と物理化学。212p.，学生社。
 パリオ・サーヴェイ株式会社（1989a）広領遺跡出土炭化材の樹種同定。「広領遺跡—長野県北佐久郡御代町広領遺跡発掘調査報告書—」，p.35-40，御代町教育委員会。
 パリオ・サーヴェイ株式会社（1989b）和田原遺跡出土炭化材同定。小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集「和田原遺跡群 和田原・中原遺跡群 藤田原—長野県小諸市むだはら・藤田原遺跡発掘調査報告書—」，p.83-88，小諸市教育委員会。
 パリオ・サーヴェイ株式会社（1991）関口A・B遺跡出土材の樹種同定。小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口A・関口B・下柏原—長野県小諸市関口A・関口B・下柏原遺跡発掘調査報告書—」，p.245-254，小諸市教育委員会。
 パリオ・サーヴェイ株式会社（1994a）過去の植物利用について。小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原—長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書—」，p.613-624，小諸市教育委員会。
 パリオ・サーヴェイ株式会社（1994b）健康村遺跡自然科学分析調査報告。「山梨県北巨摩郡長坂町 健康村遺跡—（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書—」，p.116-128，新宿区区民健康村遺跡調査会。
 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO，2，p.5-18。

図版1 炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クスギ節（A地区99号住居址 炭No.50）

a：木口，b：柁目，c：板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

V章 調査のまとめ

1 集落・遺構の変遷

今回の平田本郷遺跡の発掘調査では、出土土器を器種・器形組成などの検討から3群に大別し(III章III節1参照)、各遺構の時期もそれらをもって記述した。第1群は古墳時代中期、第2群は平安時代前期、第3群は平安時代後期に相当し、さらに第3群は前半と後半に細分している。ここでは第1～3群の各時期ごとに遺構やその分布について概観したい。

古墳時代中期 B区南部の溝13下層周辺から検出された溝20が唯一この時期の遺構と推定できるものである。遺構の記述(III章II節5)にあるとおり、溝13はこの時期から平安時代前期まで、流路として断続的に活動し浸食と堆積を繰り返しており、初期の溝底が削られずに残ったのが溝20で、そこに当時の土器廃棄の一部が残存していたと推定される。残念ながら、土器を廃棄した人々の集落址の位置は特定できていない。ただし、「平田本郷遺跡の過去の調査」の項(II章II節2)で述べたように、平成8年度の試掘調査では流路の堆積層中に当期の土器(第5図に全点図化提示)が多数廃棄されていた。また、平成4年度の第1次調査の時も、検出面から若干の当期の土師器が出土しており、本遺跡の範囲内や周辺に当期の集落が存在することは間違いないであろう。

平安時代前期 溝11、溝13、及び溝12の護岸状遺構が当期に属する。溝13は規模の大きい流路、溝12はそれに対する水防的な遺構と推定している。溝11は小規模な流路である。この時期は、溝13の流路がまだ活発に活動していたと推定されており、その影響のためか、調査地内に住居址や建物址、土坑などの遺構は営まれていない。しかし、当期の土器片は散見されており、また溝13と溝12の関係から、本調査地に近接した一帯に集落址の存在が予測される。それは東から北東方向であろうか。

平安時代後期 竪穴住居址、建物址、土坑・ピットのほとんどが当期に属す。溝13の活動が減退して堆積がすすみ、当期には調査地一帯は安定した離水域になったため集落が形成されたと推定する。溝13の跡地には細い流路や人為的な溝が残っているのみとなる。竪穴住居址の規模と密集状況からみて、A区中央部が当期集落の中心のひとつであるとすることは問題なかろう。11世紀から12世紀の集落址は中心部では非常に遺構が密集して重複し、中心部からわずかも外れると急激に遺構分布が疎となる状況は、市内の他遺跡でもいくつか認められており、本例はその典型的なものといえよう。遺構の分布は調査区域外の全方向に続くが、中核地帯は東及び南に延びていく可能性を認めたい。

竪穴住居は隅丸の方形または長方形プランで、カマドはほとんどが北東隅に設けられる。隅丸長方形プランの住居は長軸を大抵東西にしている。建物址は柱穴の掘り方は20～40cmの小ぶりな円形で、7～9世紀のものとは様相が異なる。柱穴配置も2間×2間のような定まったもの他に、本数や間隔に規格性が無いが全体として方形、長方形に柱穴が並ぶものもみられる。中世の建物址に通じていくありかただろう。A区北部やB区中央南部のように建物址がまとまるものや、B区西部の竪穴住居址と建物址がセットになっている如くに捉えられるものも注目に値する。

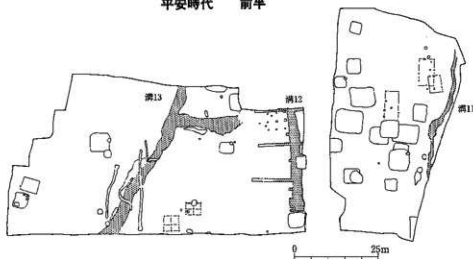
2 平田本郷遺跡と田川・奈良井川間の開発

現在、平田本郷遺跡として捉えられる範囲は南北に700mと細長いのが、その北部での状況を端的に示すのが第1次調査の結果であり、9世紀代を中核とする8世紀初頭から11世紀初頭にかけての集落址を検出した。一方、今回の第3次調査は11～12世紀の集落址を検出し、本遺跡南部での様相を明示した。周辺遺跡の項(II章II節1)でも述べたように、本遺跡以北は弥生時代中期後半から連続して開発が進み、特に7世紀代には

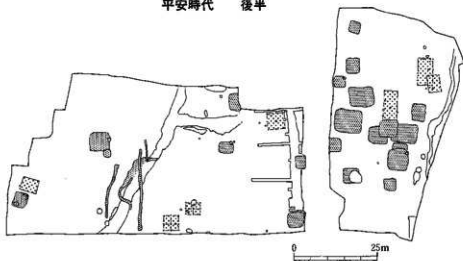
古墳時代 中期～後期



平安時代 前半



平安時代 後半



第10図 平田本郷遺跡第3次調査 遺構変遷図

大規模な集落を形成する。これに対して、本遺跡以南は8世紀代以降から集落の進出が本格化する、いわば後発地帯である。

この様な遺跡の立地と開発の時期に影響を与えている大きな要因のひとつが本遺跡の西方を北流する奈良井川である。特に本遺跡以北においてその影響は顕著といえよう。奈良井川は芳川小屋地籍で右岸段丘が比高差を失うと、その付近から度々決壊して北東方向に洪水性の流れを押し出している。今回調査のB区や本遺跡第1次調査地点、試掘調査地点、あるいは遠く離れた出川南遺跡第4次調査地点でも、奈良井川の洪水の痕跡が明瞭に残っていたのがその証拠である。洪水の時期は、出川南遺跡第4次調査地点では7世紀代の住居址群に先行するものとそれらを破壊するものがあり、後者の洪水はさらに10世紀以降の住居址に切られていた。本遺跡の今回調査では、洪水性の砂礫堆積や溝がすべて住居址（11～12世紀）に切られており、溝13や溝12の観察からは古墳時代から平安時代前半まで断続的に水流があって、徐々に離水していったことも推測されている。これらから奈良井川は古墳時代以前から芳川小屋地籍付近で切れて北東方向にいくつかの流れを押し出しており、その傾向は平安時代前期（おそらく9世紀代）まで続いたと考えられる。中には恒常的に近い流れが存在していた可能性もあろう。しかし、平安時代後期にはなんらかの原因でこれらの流れが弱まり、途絶えていったと考えられる。この結果、今回調査地点のように決壊地点の近距離にも集落が営まれるようになり、それに対して7世紀代に爆発的に集落が増加した出川南遺跡など流れの下流地帯では、集落立地の勢いが下火になったと想像する。

次に、本遺跡以南一帯の遺跡だが、これまでに発掘調査が実施されている小原遺跡（第3図13）、高畑遺跡（同14）、塩尻市吉田川西遺跡（同18）でみる限り、集落の初源は8世紀代の前半～中葉（小原遺跡と吉田川西遺跡ではわずかに7世紀末の要素をみるが、集落出現の先駆として捉えておきたい。）である。終焉は小原遺跡と吉田川西遺跡では中世まで下り、高畑遺跡は狭い調査面積のため不明確だが11世紀代までは下る。松本市域の古代において、最も遅く集落の進出が始まり、しかしながら、その後は中世まで連続と栄えた地域といえよう。

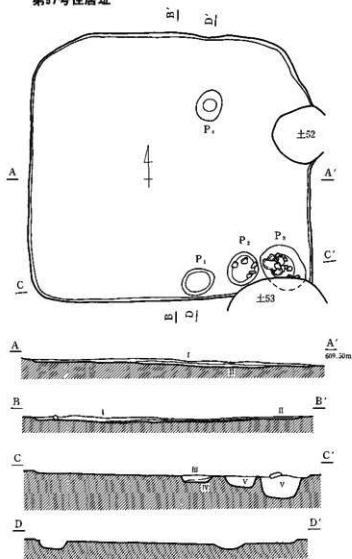
3 おわりに

今回の発掘調査地点は従来判明していた平田本郷遺跡の南端部にあたり、事前の試掘調査により新たに遺構の存在が確認された場所である。一帯は沖積性の土層堆積に加えて以前から水田となっており、発掘調査は技術的には難しいものとなったが、結果としては古墳時代中期、平安時代前期、平安時代後期という3つの時代を確認し、特に平安時代後期では竪穴住居址と掘立柱建物址からなる集落址を確認できた。多数の出土遺物を得たことも重要だが、とりわけ第99号住居址出土の炭化材分析結果は興味深い。材は中心部に虫害がある古材との指摘や、それを傍証するかのよう放射線炭素年代測定結果は住居廃棄年代の11～12世紀とは200～400年遡る材の伐採年代を示した。内部未炭化腐食か、虫害か、焼失家屋か、古材焼却か、提起される問題は多く、今後の調査研究の成果が問われよう。遺跡全体としては奈良井川からの洪水性の流れが、時代ごとに遺跡にどのような影響を与えていたかを探る手がかりをいくつも掴めたことも大きな成果といって良い。今後の周辺開発においても、未発見の埋蔵文化財保護に対して何等かの指針となるであろう。

発掘調査の作業自体については、12月から翌年3月という、文字どおり松本の厳冬期に行われ、凍りつく現場や遺物に追い討ちをかけるような1月15日の百年ぶりという大雪で、一時は作業完遂は無理かとも思えた日々であった。無事に終了できたことを、担当者一同ただ感謝するのみである。

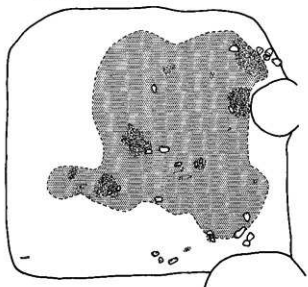
最後になりましたが、本調査に絶大なご理解とご協力をいただいた、平田西土地区画整理組合、芳川土地改良区の皆様、暖かいご援助をいただいた芳川小学校、芳川公民館の皆様、調査のご指導ご助言を下された皆様に満腔の謝意を表して結びといたします。

第97号住居址

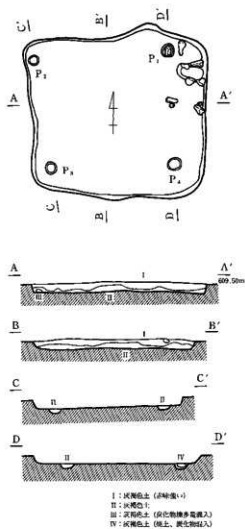


I : 灰褐色土
 II : 灰土
 III : 灰黄色土
 IV : 暗棕色土
 V : 灰褐色土 (灰化物少量混入、微少風化層)

97住遺物出土状況

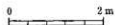
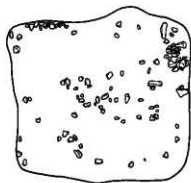


第98号住居址



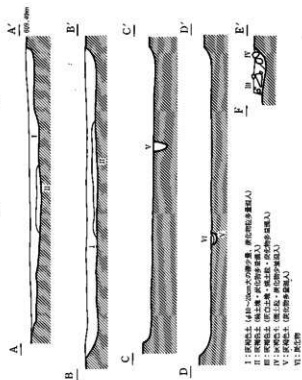
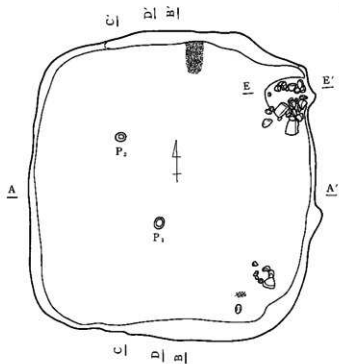
I : 灰褐色土 (灰化層あり)
 II : 灰褐色土
 III : 灰褐色土 (灰化物微量混入)
 IV : 灰褐色土 (灰土、灰化物混入)

98住遺物出土状況

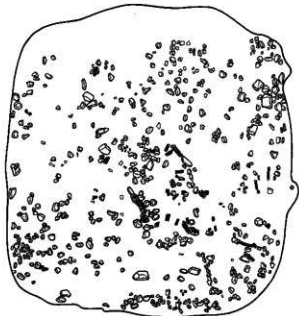


图版 1 住居址(1)

第99号住居址



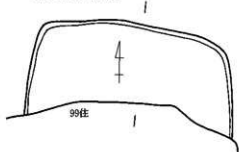
99住遺物出土状況



99住炭化材・炭化物出土状況

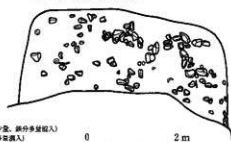


第100号住居址



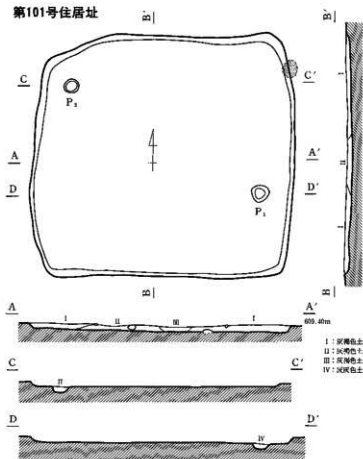
I: 灰褐色土 (灰物少量, 炭物少量混入)
 II: 灰褐色土 (炭化物少量混入)

100住遺物出土状況

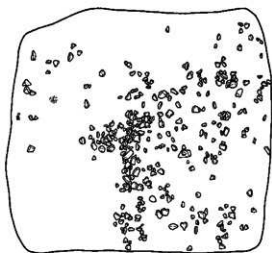


図版 2 住居址(2)

第101号住居址

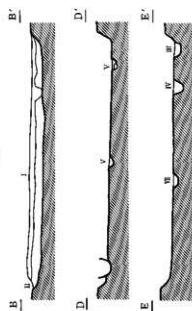
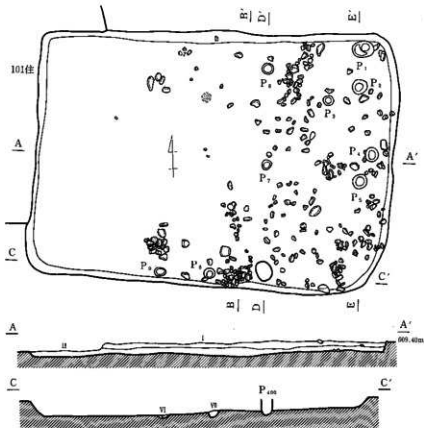


101住遺物出土状況



- I : 灰褐色土 (灰化物少量混入)
- II : 灰褐色土
- III : 灰褐色土 (1層より稍高)
- IV : 灰褐色土 (粘土・炭化物多量混入)

第102号住居址

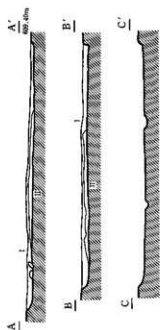
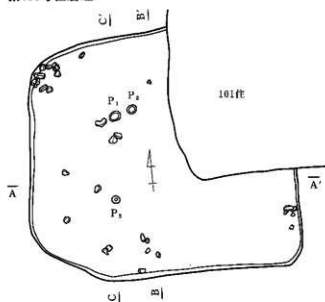


- I : 灰褐色土 (灰分混入)
- II : 灰褐色土 (灰化物少量混入)
- III : 灰褐色土 (灰化物少量混入)
- IV : 灰褐色土 (φ5cm次の砂少量混入)
- V : 灰褐色土
- VI : 灰褐色土 (φ10cm次の砂少量混入)
- VII : 灰褐色土



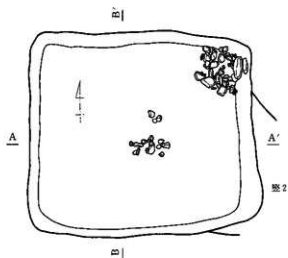
图版 3 住居址(3)

第103号住居址

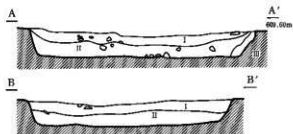
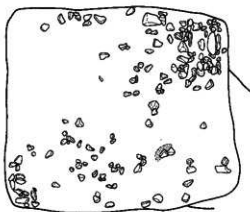


I : 灰褐色土 (φ 5~10cm位の礫少量混入)
 II : 灰褐色土 (φ 5cm以下の礫少量混入、砂質)

第104号住居址

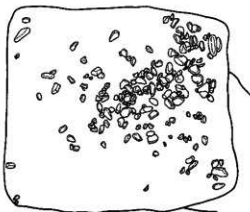


104住遺物出土状況 上層



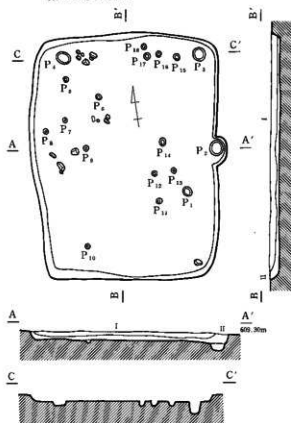
I : 灰褐色土 (φ 5~10cm位の礫少量混入)
 II : 灰褐色土 (φ 5~10cm位の礫・碎七物少量混入)
 III : 灰褐色土 (礫少量混入)

下層



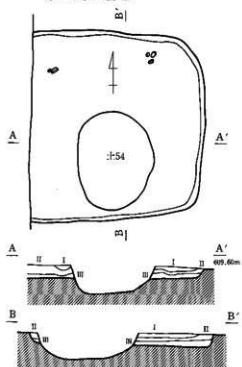
図版4 住居址(4)

第106号住居址



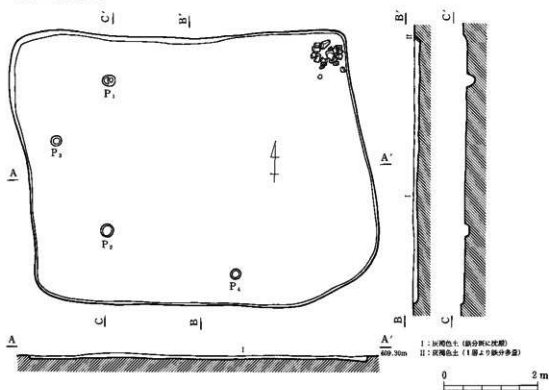
I : 灰褐色土 (灰化物少量, 鉄分少量混入)
II : 灰褐色土 (鉄分少量混入)

第110号住居址



I : 灰褐色土 (鉄分混じり状態)
II : 緑褐色土 (鉄分・マンガン混じり状態)
III : 褐色砂土 (砂質)

第111号住居址

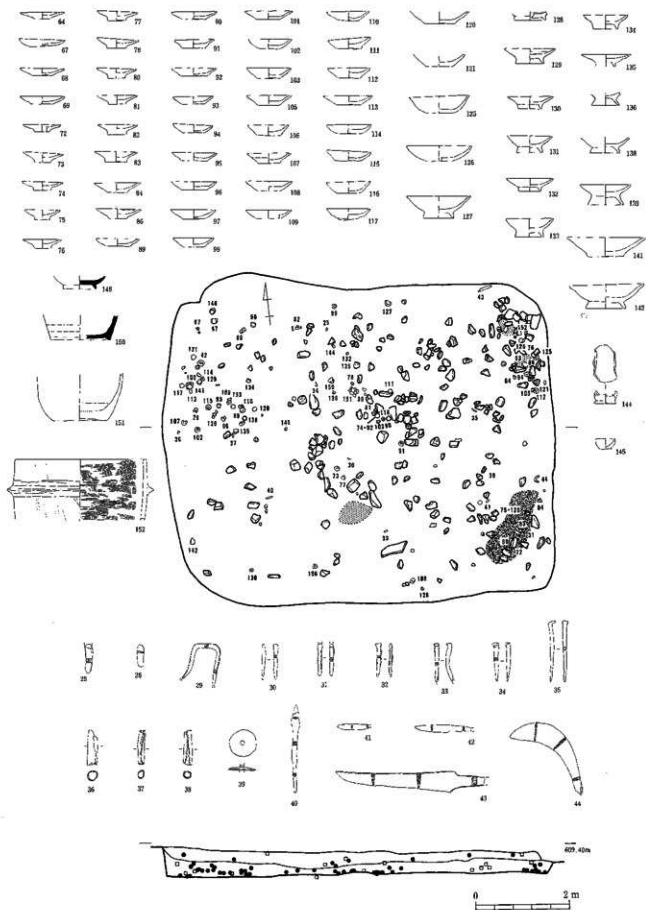


I : 灰褐色土 (鉄分混じり状態)
II : 灰褐色土 (I層より鉄分多量)

0 2 m

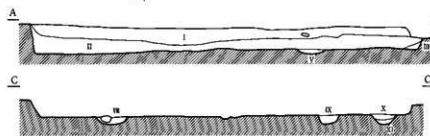
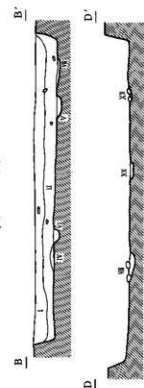
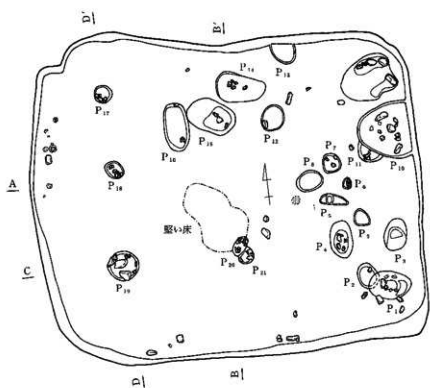
図版 5 住居址(5)

第107号住居址遺物出土狀況



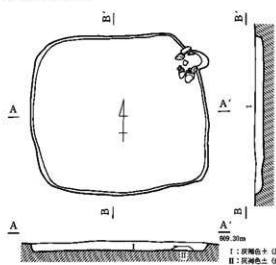
图版 6 住居址(6)

第107号住居址

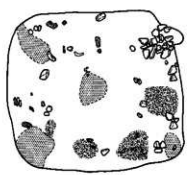


- I : 灰褐色土 (φ 3cm大の器・灰化物少量混入)
- II : 灰褐色土 (灰土粒少量・灰化物少量混入)
- III : 灰褐色土
- IV : 灰褐色土 (粘土質・灰化物少量混入)
- V : 灰褐色土 (層1粒・粘土質少量混入)
- VI : 灰白色土 (灰化物粒少量混入)
- VII : 灰褐色土 (φ 5cm大の器少量・灰土粒・灰化物粒少量混入)
- VIII : 灰褐色土 (φ 5~20cm大の器少量混入)
- IX : 灰褐色土 (器土粒混入・φ 10cm大の器・灰土粒少量混入)
- X : 灰褐色土 (灰化物粒少量混入)
- XI : 灰褐色土 (砂質)
- XII : 灰褐色土 (φ 5~10cm大の器少量混入)

第112号住居址



112住遺物出土状況

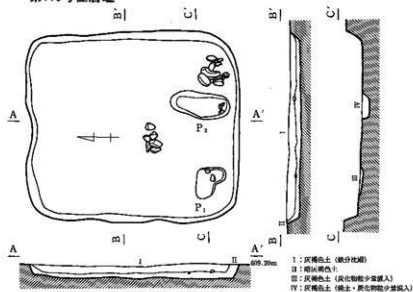


- I : 灰褐色土 (灰化物少量・小器少量混入)
- II : 灰褐色土 (粘土・灰化物少量混入)

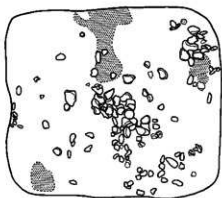


図版 7 住居址(7)

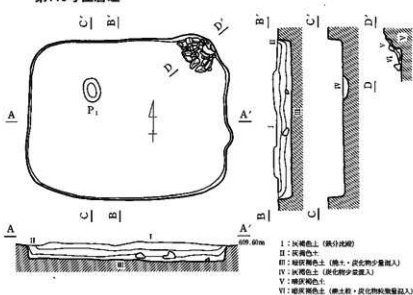
第113号住居址



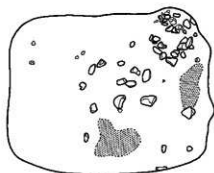
113号住居出土状况



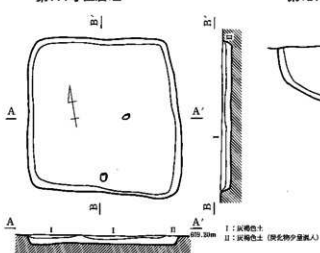
第115号住居址



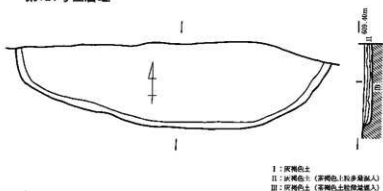
115号住居出土状况



第114号住居址



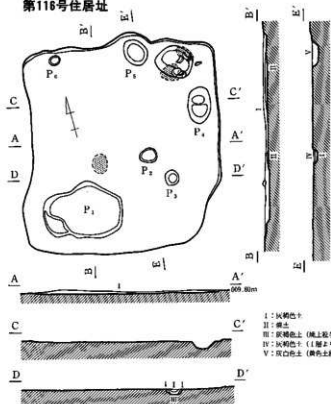
第121号住居址



0 2m

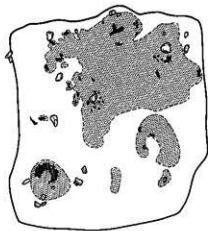
图版8 住居址(8)

第116号住居址

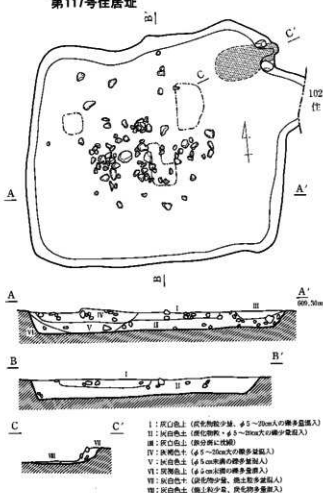


- I: 灰褐色土
- II: 黄土
- III: 灰褐色土 (壁上泥多量混入)
- IV: 灰褐色土 (1層より薄)
- V: 灰白色土 (壁上泥混入)

116住遺物出土状況



第117号住居址



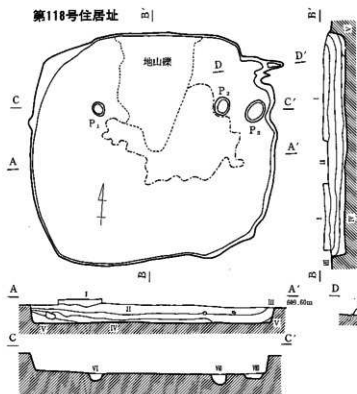
- I: 灰白色土 (灰化程度少量, φ5~20mmの礫多量混入)
- II: 灰白色土 (灰化程度 - φ5~20mmの礫少量混入)
- III: 灰白色土 (礫少量に灰混)
- IV: 灰褐色土 (φ5~20mmの礫多量混入)
- V: 灰白色土 (φ5cm未満の礫多量混入)
- VI: 灰褐色土 (φ5cm未満の礫少量混入)
- VII: 灰白色土 (礫化物少量, 粘土多量混入)
- VIII: 灰白色土 (壁上泥少量, 灰化程度多量混入)

117住遺物出土状況

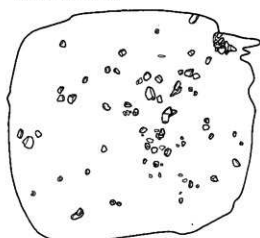


図版9 住居址(9)

第118号住居址

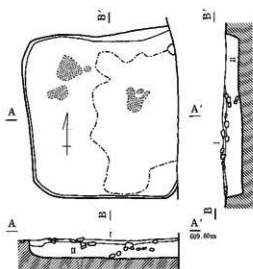


118住遺物出土状況

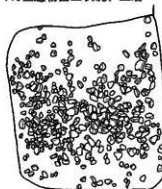


- I: 灰褐色土 (赤分沈積)
- II: 灰褐色土 (灰化物少量混入)
- III: 灰褐色土 (灰化物少量混入、砂質)
- IV: 暗灰褐色土 (灰化物少量混入)
- V: 暗灰褐色土 (土塊混入)
- VI: 暗灰褐色土 (灰化物少量混入)
- VII: 灰褐色土 (灰化物少量混入)
- VIII: 灰褐色土 (黄土・灰化物少量混入)

第119号住居址

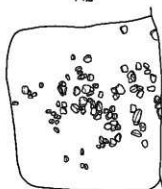


119住遺物出土状況、上層

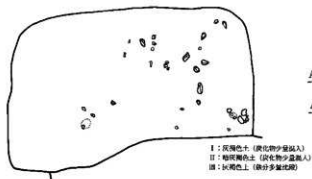


- I: 灰褐色土
- II: 灰褐色土 (赤分少量混入)

下層

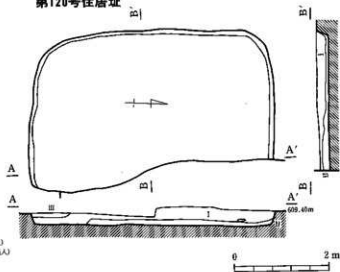


120住遺物出土状況



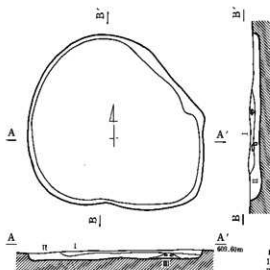
- I: 灰褐色土 (灰化物少量混入)
- II: 暗灰褐色土 (灰化物少量混入)
- III: 灰褐色土 (赤分少量混入)

第120号住居址

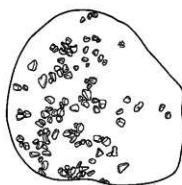


図版10 住居址(10)

第2号竖穴状遺構

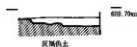
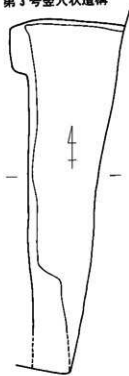


竖2遺物出土状況

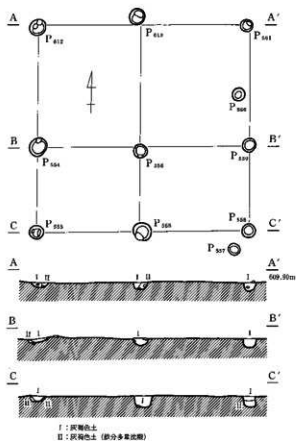


I : 灰褐色土
 II : 灰褐色土 (上部より赤味強し)
 III : 灰褐色土 (粘土・炭化物多量混入)

第3号竖穴状遺構

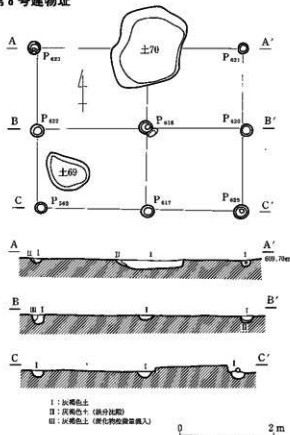


第7号建物址



I : 灰褐色土
 II : 灰褐色土 (粘土多量混入)

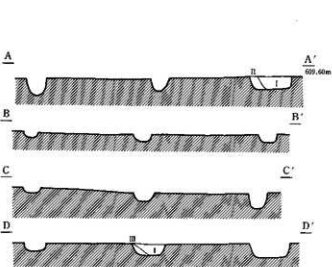
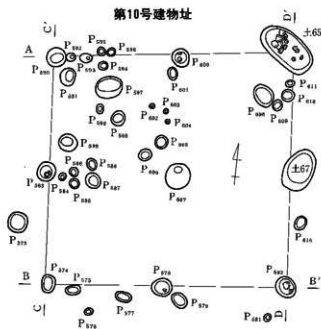
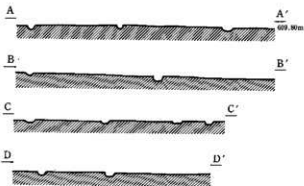
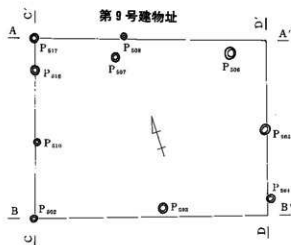
第8号建物址



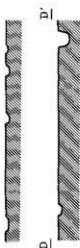
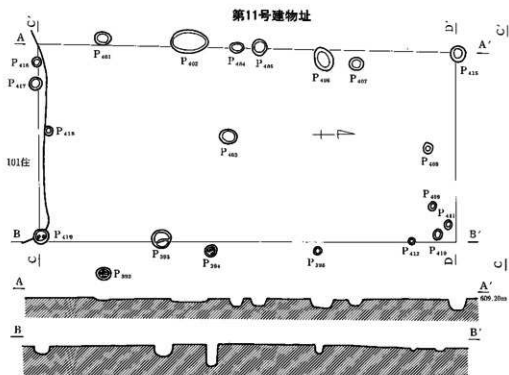
I : 灰褐色土
 II : 灰褐色土 (粘土混入)
 III : 灰褐色土 (炭化物少量混入)



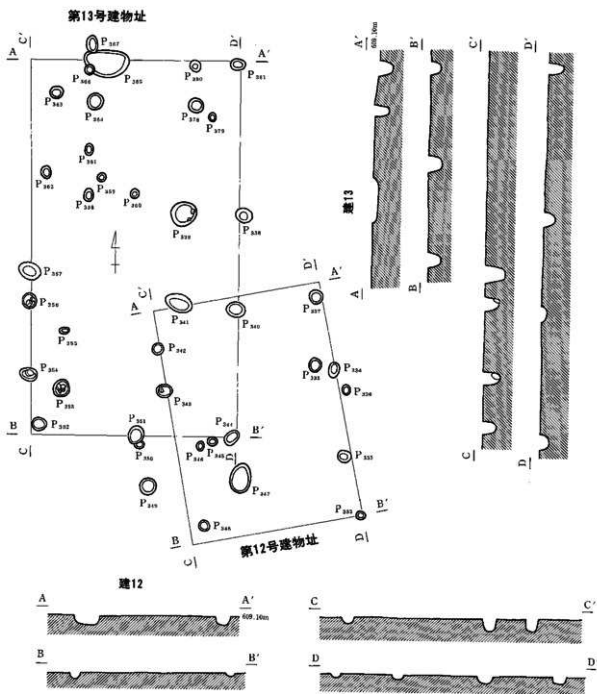
図版11 竖穴状遺構、建物址(1)



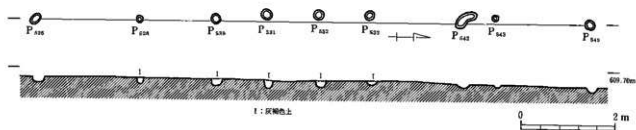
I : 灰褐色土 (黄化地冲填层土)
 II : 灰褐色土 (黄褐色土冲填层土)
 III : 砂褐色土



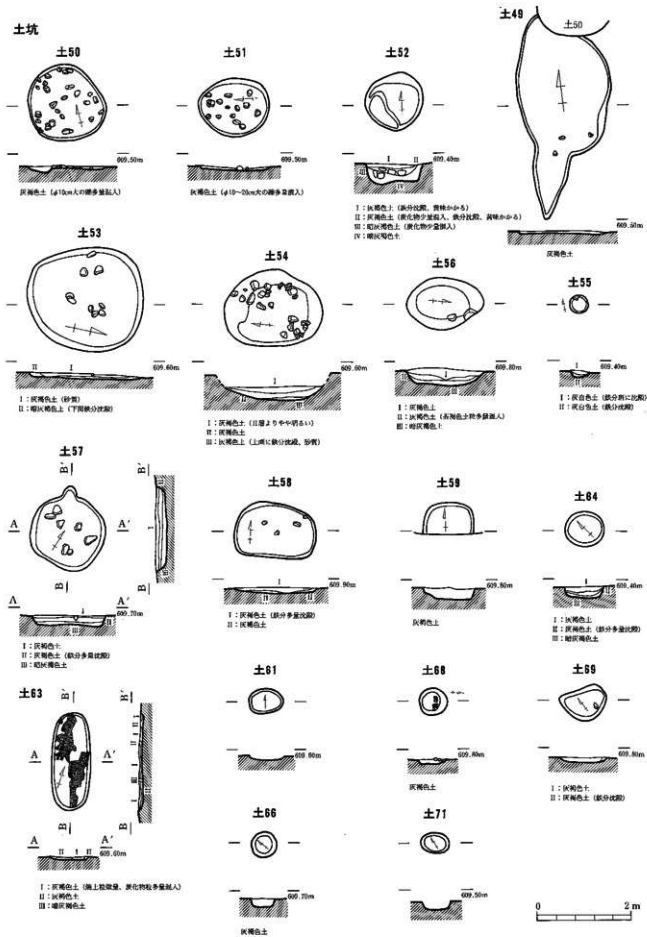
图版12 建物址(2)



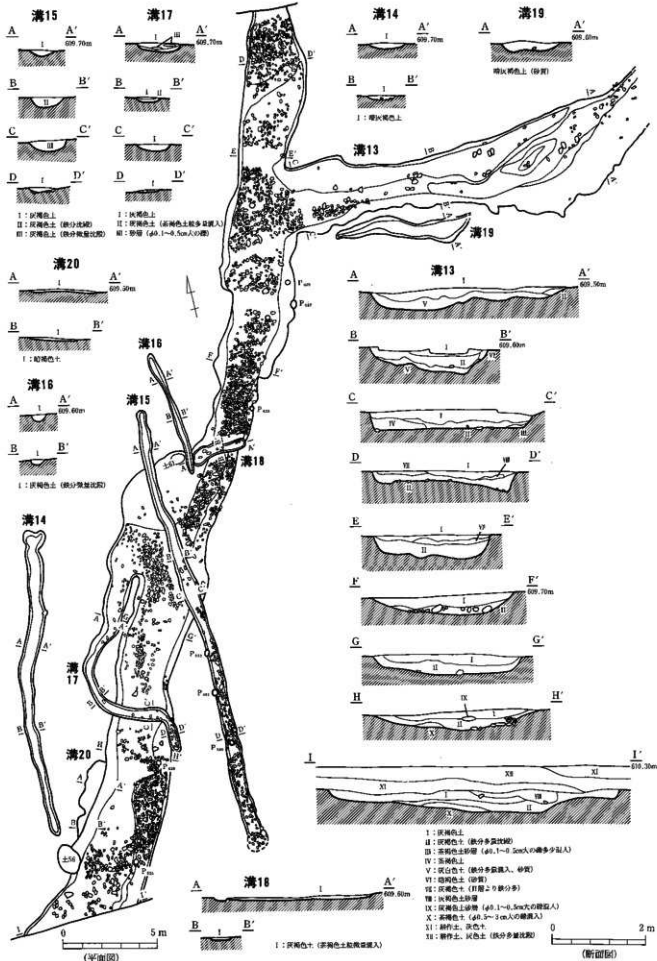
第1号柱列



图版13 建物址(3)

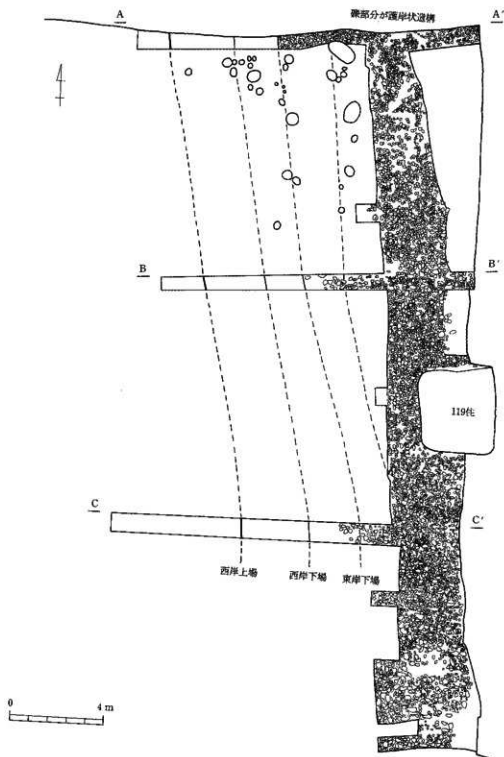


図版14 土坑



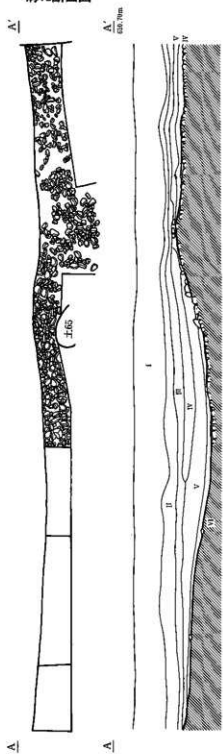
図版15 溝(1)

溝12平面図

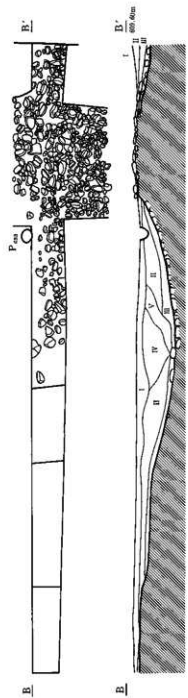


図版15 溝(2)

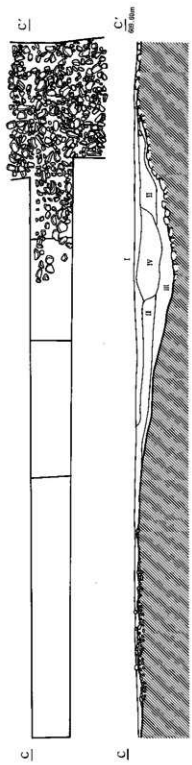
溝12断面図



- I : 耕作土
- II : 耕作土
- III : 暗沢色土 (鉄分少量沈殿)
- IV : 暗沢色土
- V : 暗沢色土 (鉄分少量沈殿, 1層より薄)
- VI : 砂層



- I : 暗沢褐色土 (鉄分少量沈殿)
- II : 暗沢褐色土
- III : 砂層 (IV層より細)
- IV : 砂層 (φ6.10or~1.0cm次の礫混入)
- V : 砂層 (IV層より層の厚が少な)

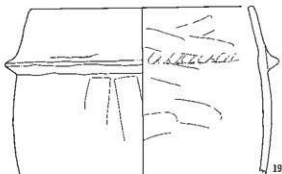
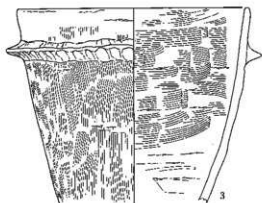


- I : 暗沢褐色土 (鉄分少量沈殿)
- II : 暗沢褐色土
- III : 砂層 (IV層より細)
- IV : 砂層 (φ6.10or~1.0cm次の小礫混入)

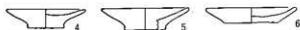


図版17 溝(3)

第98号住居址 (1~3)



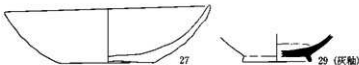
第98号住居址 (4~19)



第100号住居址 (20~25)



第101号住居址 (26~29)



第102号住居址 (30~36)



第103号住居址 (37·38)



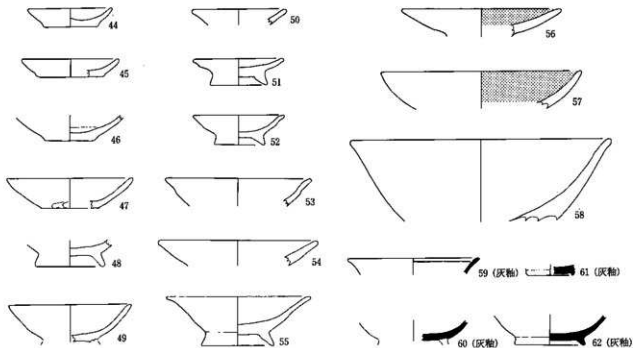
第106号住居址 (39~43)



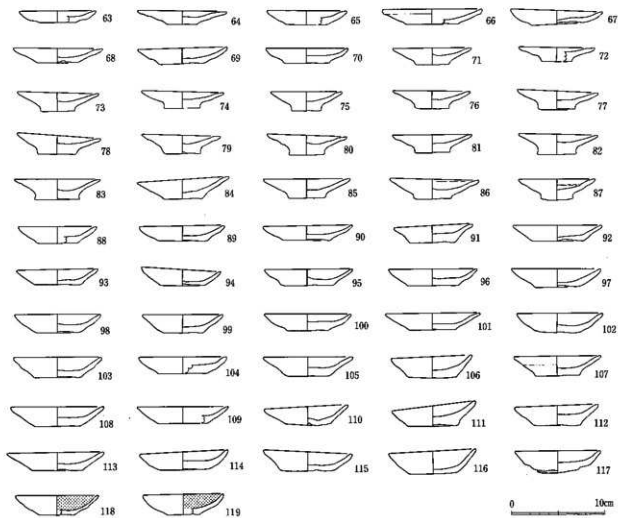
0 10cm

図版18 土器(1)

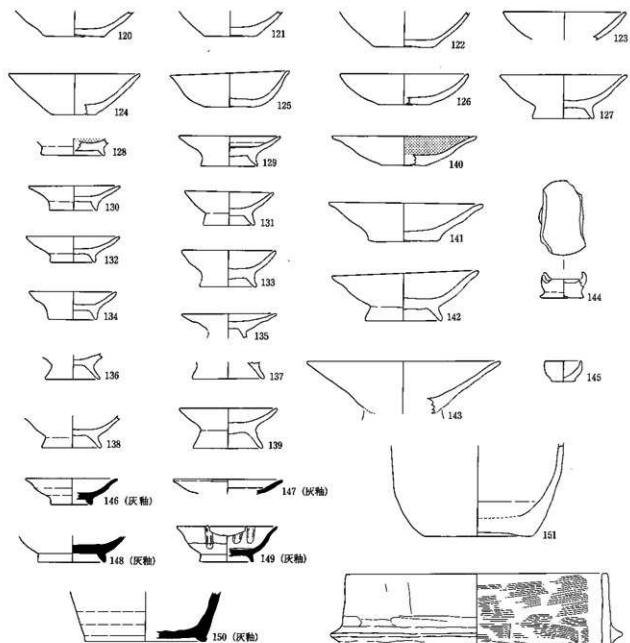
第104号住居址 (44~62)



第107号住居址 (63~152)



图版19 土器(2)



第108号住居址 (153)

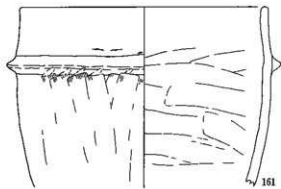
第112号住居址 (158~161)



第109号住居址 (154・155)



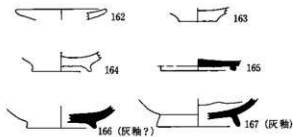
第111号住居址 (156・157)



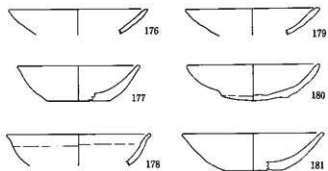
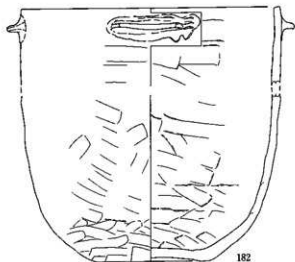
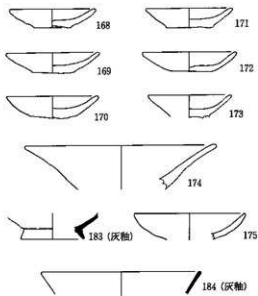
0 10cm

图版20 土器(3)

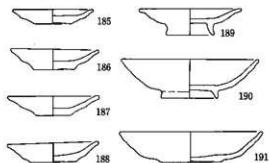
第110号住居址 (162~167)



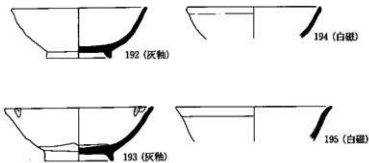
第113号住居址 (168~184)



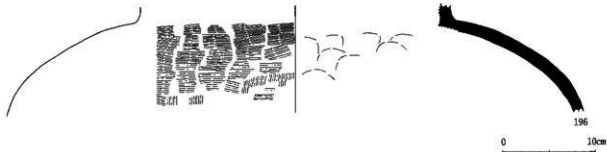
第115号住居址 (185~193)



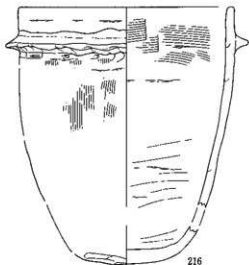
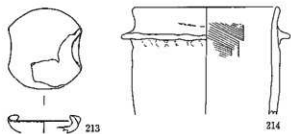
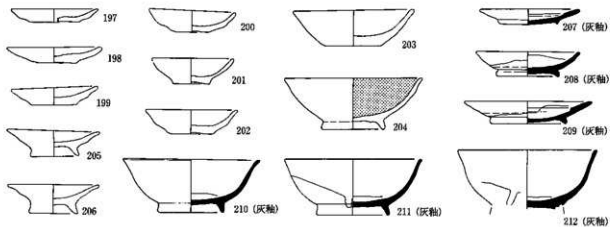
第116号住居址 (194・195)



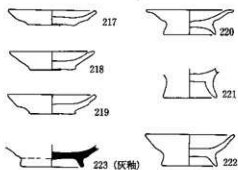
第117号住居址 (196~216)



图版21 土器(4)



第118号住居址 (217~224)



第8号建物址 (232)



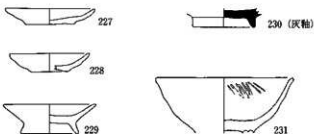
第10号建物址 (233~235)



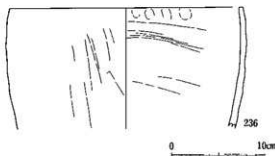
第119号住居址 (225·226)



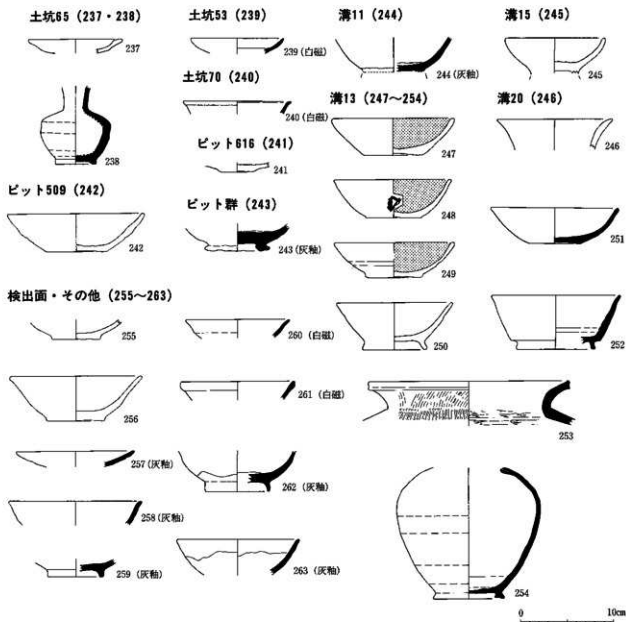
第120号住居址 (227~231)



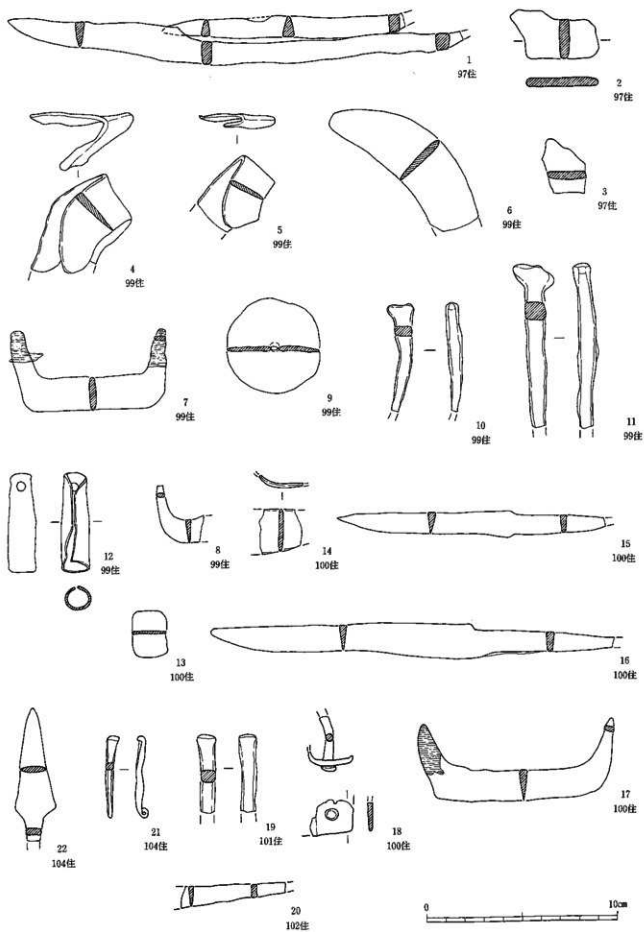
第2号竖穴状遺構 (236)



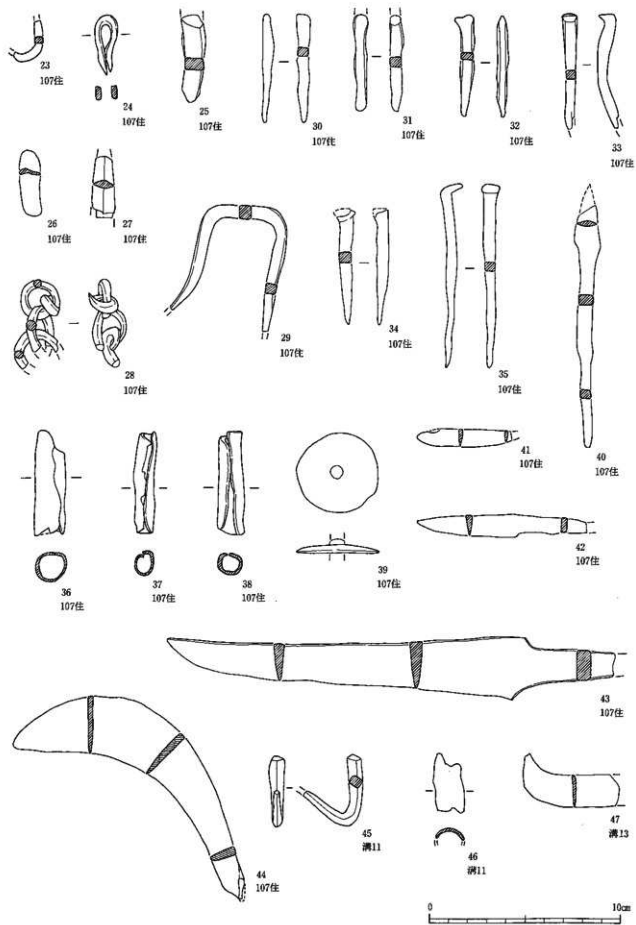
图版22 土器(5)



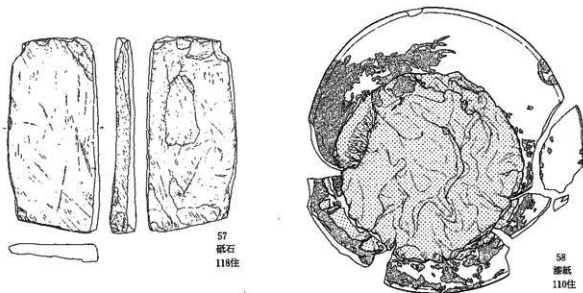
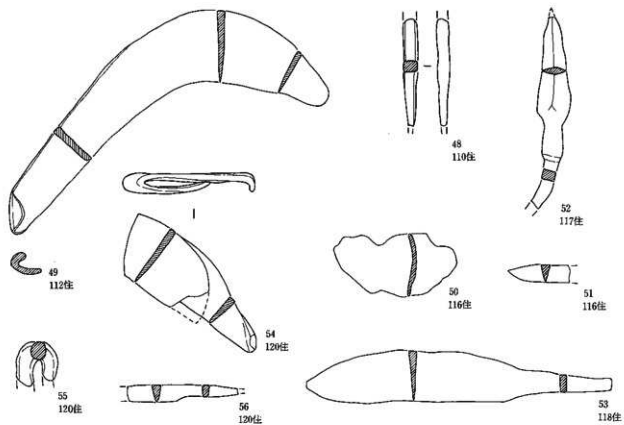
図版23 土器(6)



図版24 鉄器・鉄製品(1)



図版25 鉄器・鉄製品(2)



図版26 鉄器・鉄製品(3)、石器、漆紙

写真図版



現地説明会風景（平成10年3月14日）



A区全景（南から）



B区全景（北から）



B区全景（東から）

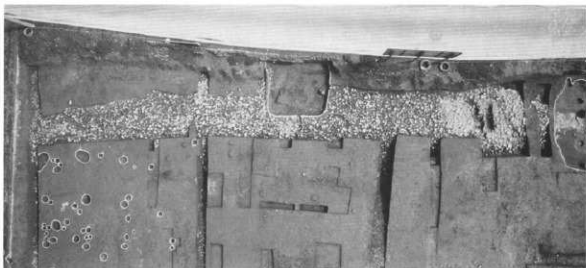
写真図版 2



B区全景（北東から）



B区全景（北から）



B区溝12（渡岸状遺構）



98住遺物出土状況



98住完掘



99住遺物出土状況



99住遺物出土状況



99住遺物出土状況



99住遺物出土状況

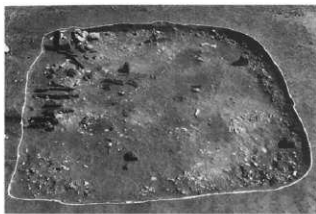


99住遺物出土状況



99住遺物出土状況

写真図版 4



99住炭化物出土状況



99住炭化物出土状況



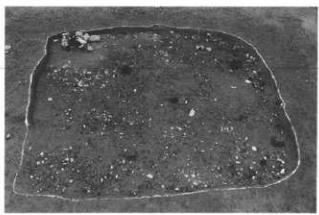
99住炭化物出土状況



99住炭化物出土状況



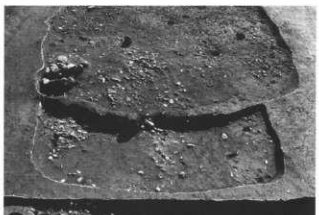
99住炭化物出土状況



99住完掘



100住跡出土状況



100住完掘



97住全景



103住全景



102住全景



104住遺物出土状況



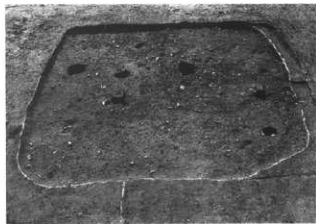
104住カマド



104住完掘



101住跡出土状況



101住完掘



106住完掘



110住全景



107住跡出土状況



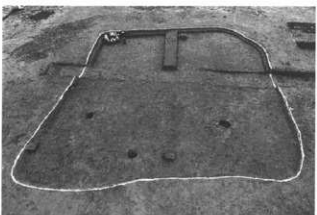
107住完掘



112住跡出土状況



112住完掘



111住完掘



114住完掘



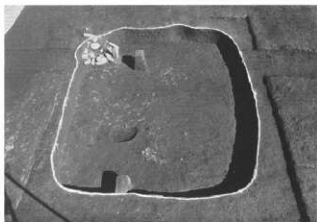
113住曝出土状況



113住完掘



115住遺物出土状況



115住完掘



116住完掘



120住全景



117住曝出土状況



117住完掘



第118住遺物出土状況



第118住完掘



第119住礫出土状況



第119住礫出土状況



第119住完掘



竪穴状遺構 3 完掘



竪穴状遺構 2 礫出土状況



竪穴状遺構 2 完掘



建物址 7 完掘



建物址 8 完掘



土坑53



土坑54



土坑65遺物出土状況



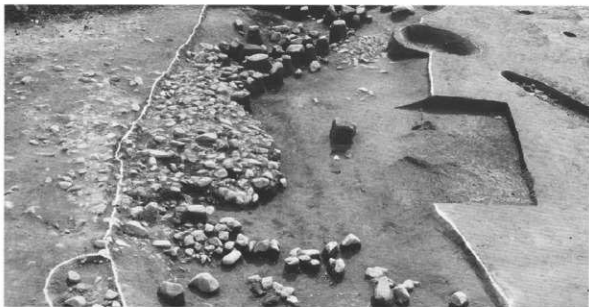
土坑65遺物出土状況



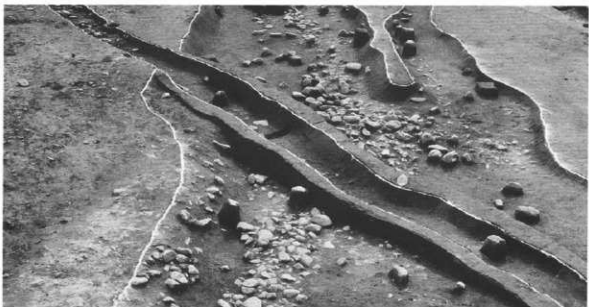
溝11全景 (北から)



溝11全景 (南から)



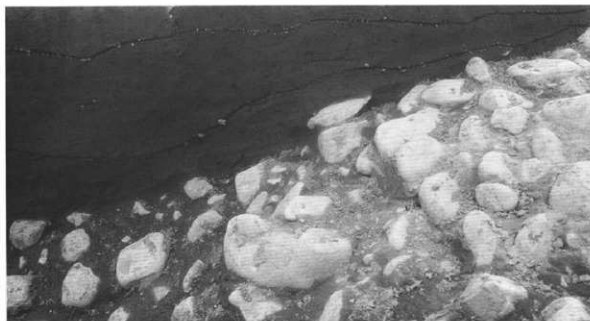
溝13南部礫出土状況



溝13・15・17 (太い溝13から溝17が分岐。溝15が切る。)



溝13北部と溝19



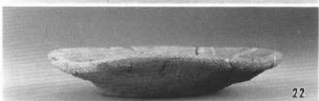
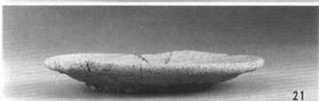
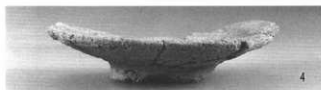
溝12東岸立ち上り

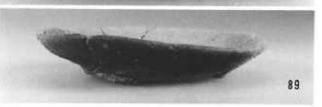
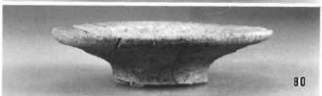
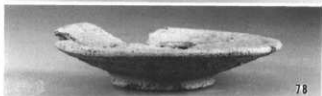
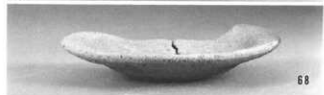
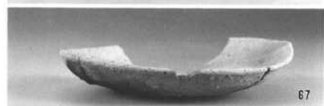
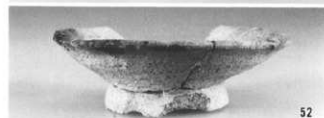


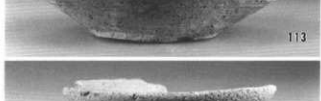
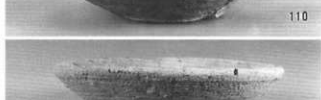
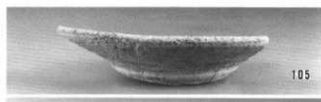
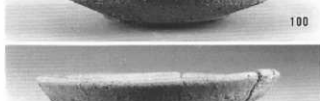
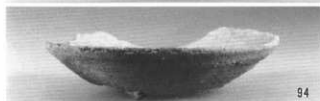
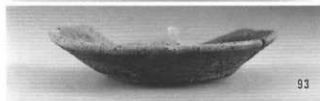
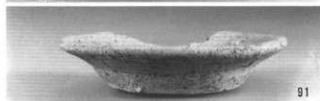
溝12西岸立ち上り

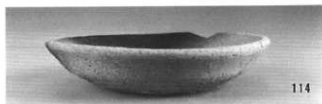


溝12中央流路堆積

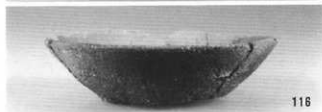








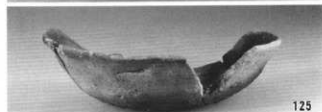
114



116



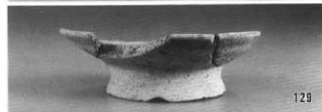
117



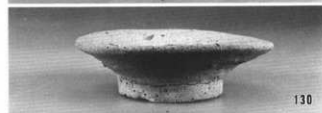
125



127



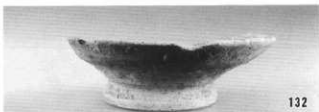
129



130



131



132



133



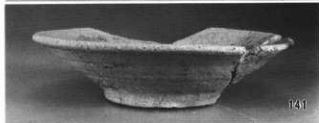
134



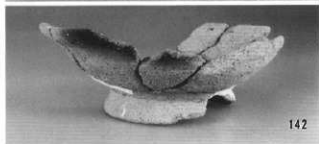
135



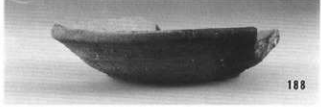
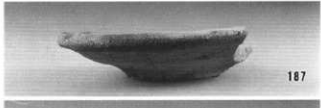
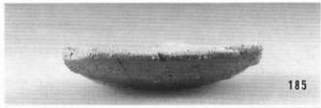
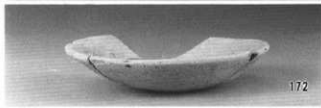
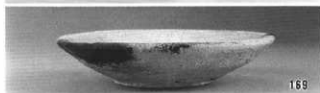
139

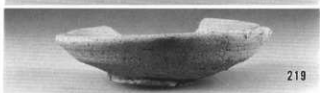
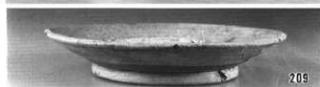
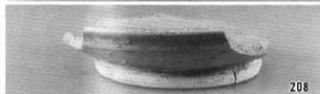
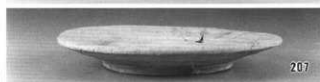
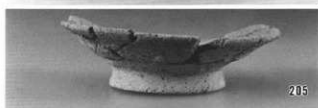
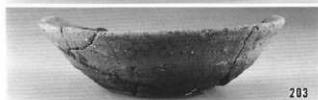
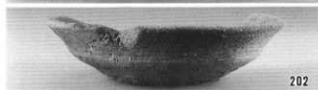


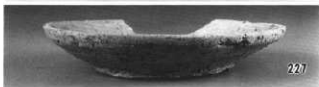
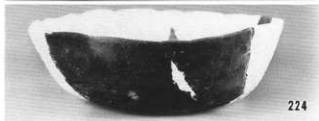
141

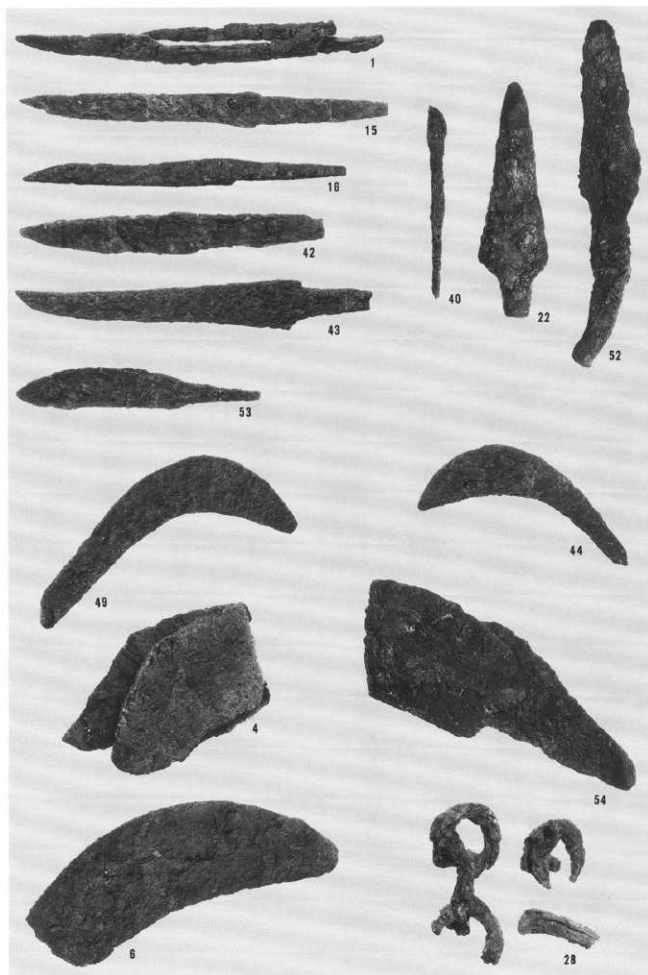


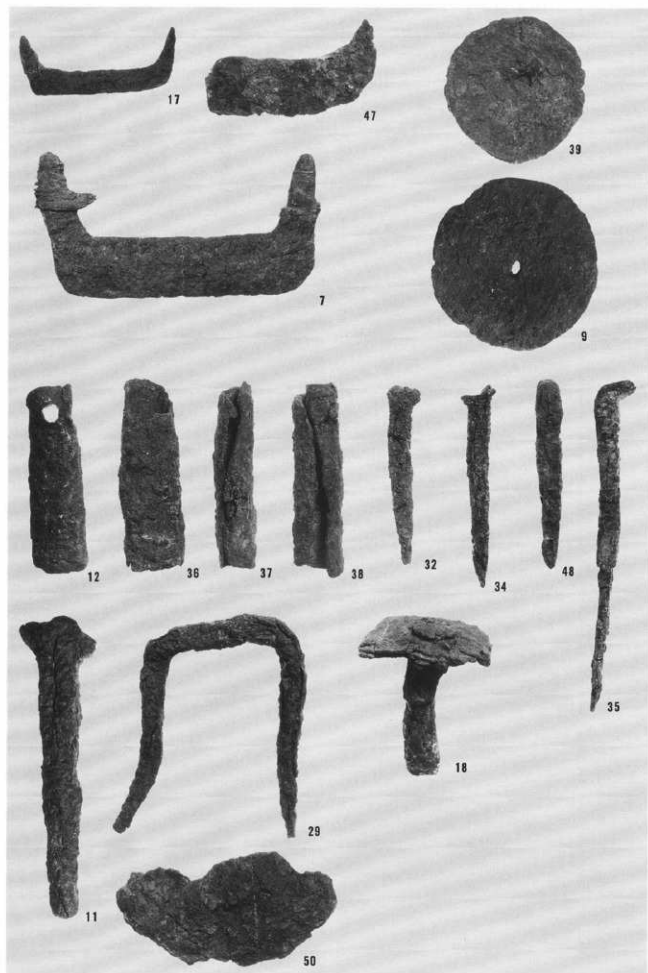
142











長野県松本市 平田本郷遺跡Ⅲ 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし ひらたほんごういせき3 きんきゅうはくつちようさほうこくしよ							
書名	長野県松本市 平田本郷遺跡Ⅲ 緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.138							
編著者名	直井雅尚、荒木 龍、長睦和正、田多井用章、太田守夫、森 義直							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	1999(平成11)年3月25日 (平成10年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ひらたほんごう 平田本郷	ながのけんまつもとし 長野県松本市 よしかわひらた 芳川平田	20202	293	36度 11分 20秒	137度 57分 50秒	19971211～ 19980324	5,558㎡	土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平田本郷	集落跡	古 代		竪穴住居址 掘立柱建物址 溝 土坑	22軒 7棟 10本 21基	土器・陶磁器(土師器、須 恵器、灰輪陶器、白磁) 鉄器(刀子、短刀、鎌、紡 錘車、苧引金具) 石器 漆紙	平安時代後期 の集落址	

松本市文化財調査報告No.138

長野県松本市

平田本郷遺跡Ⅲ

緊急発掘調査報告書

発行日 平成11年3月25日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 藤原印刷株式会社

〒390-0865 長野県松本市新橋7番21号

